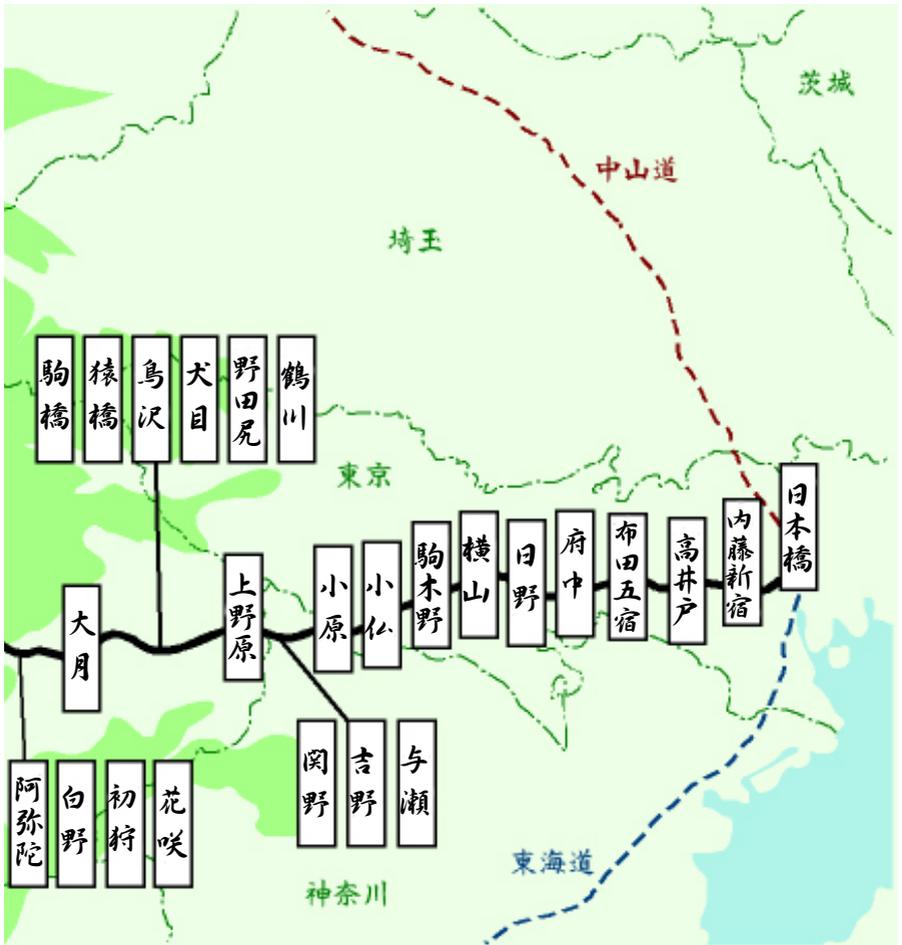


甲州街道を歩く【中】

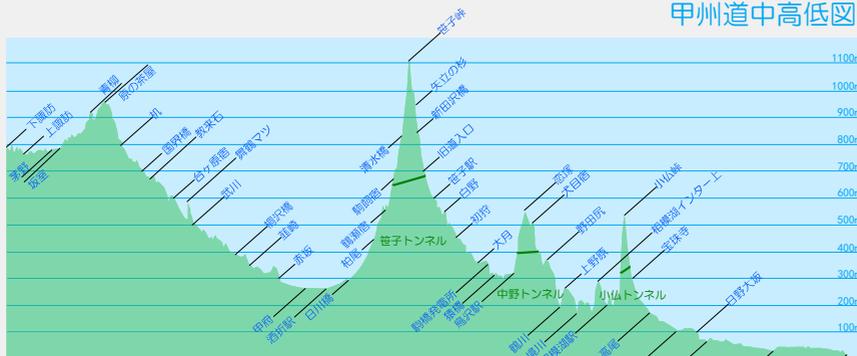
(黒野田宿から金沢宿)

## 甲州道中の宿しゆく

日本橋ニッポン橋 || 内藤新宿 || 下高井  
 戸・上高井戸 || 国領・下布田・上  
 布田・下石原・上石原 || 府中 ||  
 日野 || 横山 (隔月で八日市) ||  
 駒木野・小仏・小仏峠・小原・与瀬  
 || 吉野 || 関野 || 上野原 ||  
 鶴川 || 野田尻 || 犬目 || 下鳥  
 沢・上鳥沢 || 猿橋 || 駒橋 || 大  
 月 || 下花咲・上花咲 || 下初狩・  
 中初狩 || 白野・阿弥陀海道・黒野  
 田 || 笹子峠 || 駒飼・鶴瀬 || 勝  
 沼 || 栗原 || 石和 || 甲府柳町  
 || 葦崎 || 台ヶ原 || 教来石 ||  
 葛木 || 金沢 || 上諏訪 || 下  
 諏訪 (中山道下諏訪宿)

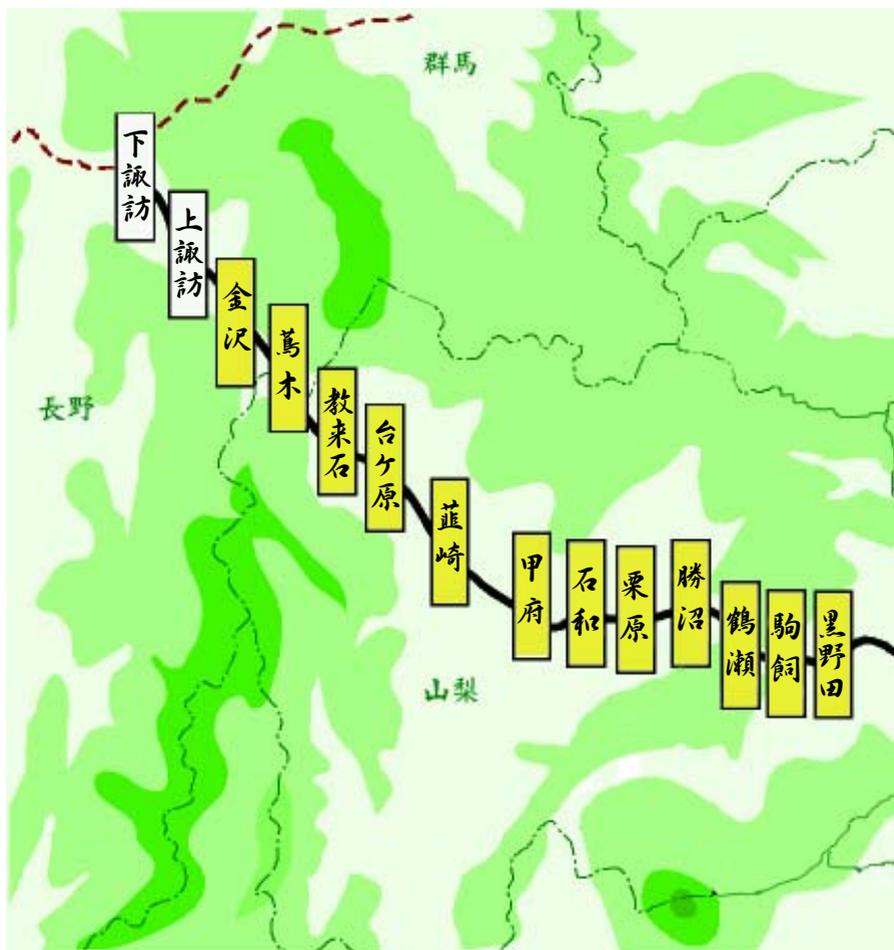


# 甲州道中高低図



## 八八が歩く甲州道中

<http://www.konoha-house.com/kosyukaicho/>



# 目次

第十二回	黒野田宿〜大善寺（勝沼ぶどう郷駅）	平成二十四年十月十八日（木）	1
第十三回	勝沼ぶどう郷駅〜石和温泉駅	平成二十四年十一月十五日（木）	16
第十四回	石和温泉駅〜県立美術館	平成二十四年十二月二十日（木）	30
第十五回	県立美術館〜葦崎駅	平成二十五年一月十七日（木）	49
第十六回	葦崎駅〜武川駐在所（日野春駅）	平成二十五年二月二十一日（木）	65
第十七回	武川駐在所〜台ヶ原宿（長坂駅）	平成二十五年三月二十一日（木）	78
第十八回	台ヶ原宿〜蔦木宿（小淵沢駅）	平成二十五年四月十八日（木）	94
第十九回	蔦木宿〜金沢宿（青柳駅）	平成二十五年五月十六日（木）	110
武田家系図	・・・・・・・・・・・・・・・・	・・・・・・・・・・・・・・・・	130

第十二回 実施日 平成二十四年(2012) 十月十八日(木)

大月駅⇨新田下⇨大善寺⇨勝沼ぶどう郷駅

約十二軒 累計約百二十一軒

宿 笹子峠、駒飼宿、鶴瀬宿

★集合場所・時刻 JR高尾二番線階段下 午前七時十五分

高尾 7:27 = 8:11 大月 8:30 = バス = 9:04 新田下

【第十二回甲州道中行程】

大月駅⇨バス⇨新田下バス停⇨明治天皇野立所跡⇨矢立の杉⇨笹子隧道⇨笹子峠⇨天神宮⇨甘茶茶屋⇨清水橋⇨桃の木茶屋跡⇨駒飼宿・脇本陣跡・本陣跡⇨大和橋西詰⇨勝頼腰掛石⇨巨勢金岡地藏尊碑⇨鶴瀬関所跡標柱⇨血洗沢標柱⇨鞍懸標柱⇨横吹集落⇨柏尾古戦場跡⇨大善寺⇨タクシー⇨勝沼ぶどう郷駅

◇久しぶりに、浅見さんも加わり、旅人十二名が揃って、雨の中、身支度を整えて、大月駅からバスで出発する。

このバスが我々の歩いた街道の軌跡を通り、道々を思い出しながら楽しく運んでくれる。

時折、こんな狭い道までバスが通っていたのかと感激に慕ったりする。

やがて、貸切状態のバスが笹子新田下に到着して、今回の歩



き始め地点で降りる。運転手さんも本日の売り上げに北叟笑んでいると思うのは下種の考えか。

中島さんから雨で滑りやすいのでゆっくりと行きましようとの挨拶で、歩き始める。すぐに沢沿いの山道に入ってゆく。





矢立の杉の幟があちこちに目立つ、直ぐ近くかと思わせる。時折、舗装道路を歩いてはまた山道に入る。暫く進むと八百九十九米の水準点が出てくる。直ぐに明治天皇野立所跡に到着して小休止する。

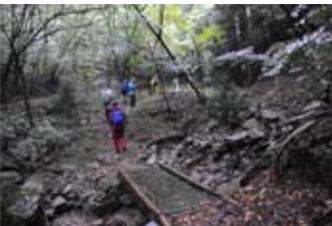


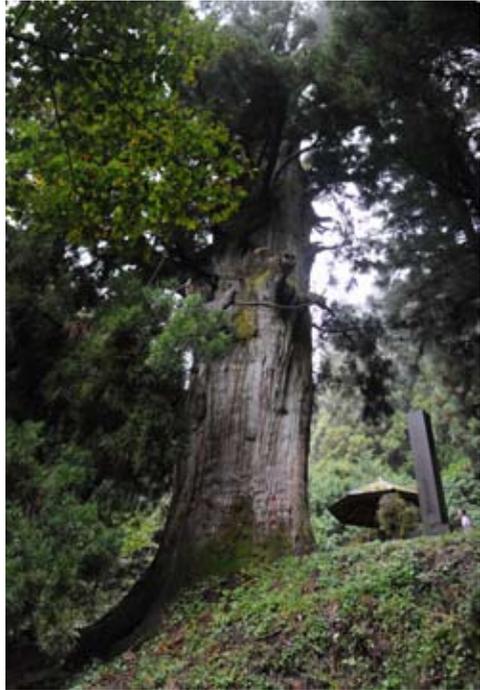
◎明治天皇野立所跡

この地の持ち主天野治兵衛氏を顕彰する碑には「過ぐる明治十三年(1880)六月十九日大帝本縣御巡幸に際し、畏れ多くも此の地天野治兵衛家に御野立あらせられ、……(以下略)」とある。

また、ここは「三軒茶屋」とも呼ばれていた。

◇さらに山道を進む、四、五分程歩くと杉林の中にひと際太い杉が見えてくる。これが目的の「矢立の杉」である。





◎ 矢立の杉

説明板には 県指定天然記念物

笹子峠の矢立のスギ

所在地 山梨県大月市笹子町大字黒野田字笹子一九二四の一

種類 スギ

指定 昭和三十五年十一月七日

所有 山梨県

このスギは昔から有名なもので、昔の武者が出陣にあたって、



矢立の杉にて 第十二回参加者記念撮影

後列立ちびと【中島、相原、中田、折本、竹島、三浦、八木、伊藤】  
前列座りびと【前北、嶋崎、浅見、宇山】

矢をこのスギにうちたてて、武運を祈ったところから「矢立のスギ」と呼ばれてきたものである。

そのような名木であるうえに巨樹であるために、県指定天然記念物にされている。

その規模は次のようである。

根回り幹囲 十四・八米 目通り幹囲 九米

樹 高 約二十六・五〇米

幹は地上約二十一・五米で折れ樹幹中は空洞になっている。

昭和五十年十月 山梨県教育委員会 とある。

空洞となっているため、根元の洞から空を見上げることができ  
きる。

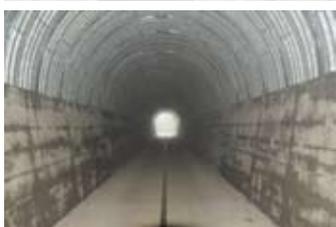
◇地元の人が整備した厳しい道を歩き、靄につつまれ一行は笹



子峠へ向かう。本降りでは旅人前北は一人、笹子隧道を通る。

### ◎笹子隧道

「登録有形文化財 笹子隧道」の説明板には



四方を山々に囲まれた山梨にとって昔から重要な交通ルートであった甲州街道。その甲州街道にあって一番の難所といわれたのが笹子峠です。この難所に開削された笹子隧道は、昭和十一年から十三年まで国庫補助を入れて二十八万六千七百円の工費を投入し、昭和十三年三月に完成しました。抗門の左右にある洋風建築的な二本並びの柱形装飾が大変特徴的であります。

昭和三十三年、新笹子トンネルが開通するまでこの隧道は、山梨、遠くは長野辺りから東京までの幹線道路として甲州街道の交通を支えていました。南大菩薩嶺を越える大月市笹子町追分（旧笹子村）より大和村日影（旧日影村）までの笹子峠越えは、距離十数軒、幅員が狭くつづら折りカーブも大変多いためまさに難所で遥か東の東京はまだまだ遠い都だったでしょう。昭和前期の大役を終え静寂の中にあるこの隧道は、平成十一年、登録有形文化財に指定されました。大月土木事務所とある。

### ◎笹子峠

標高千九十六米。江戸と下諏訪のほぼ中間である。両側が切立っていて、切通しのような地形を考えると、江戸時代初期にはもっと上の方に街道はあって、後期に開削し通りやすくしたと思われる。峠から下った先の「清水橋」に『笹子峠』と『笹



子峠唄』を紹介した案内板があり、それには

笹子峠

徳川幕府

は慶長から

元和年間に

かけて甲州

街道（江戸日本橋から信州諏訪まで約五十里）を開通させました。笹子峠はほぼその中間で江戸から約二十七里（約百軒）の笹子宿と駒飼宿を結ぶ標高千九十六米、上下三里の難所でした。峠には諏訪神社分社と天神社が祀られていて広場には常時、馬が二十頭程繋がれていました。峠を下ると清水橋までに馬頭観世音、甘茶茶屋、雑事場、自害沢、天明水等がありました。また、この峠を往来した当時の旅人を偲んで昭和六十一年二月十二日、次のような唄が作られ発表されました。

### 甲州峠唄

作詞 金田一春彦

作曲 西岡 文朗



笹子峠にて  
 後列【八木、相原、中島、伊藤、折本、三浦】  
 前列【嶋崎、宇山 浅見、中田】(撮影：竹島)



この唄の発表によって旧道を復元しようという気運が高まり  
 昭和六十二年五月、清水橋から峠まで 地域推進の一環として、  
 日影区民一同と大和村文化協会の協力によって荒れていた旧道  
 を整備して歩行の出来る状態にしました。

佐藤 達明 文」とある。

あれに白いは コブシの花か  
 峠三里は 春がすみ  
 うしろ見返りゃ 今来た道は  
 林の中を 見え隠れ  
 高くさえずる 妻恋雲雀  
 おれも歌おうか あの歌を  
 ここは何処だと 馬子衆に問えば  
 ここは甲州 笹子道

◇本日の昼食は雨の中、笹子隧道で、しかも十月一杯車両通行  
止めで、大変恵まれた得難い体験になった。



◇隋道を出ると、直ぐ舗装道路を外れて旧甲州街道に入る。山  
道を暫く下りると、舗装道路の交点に甘酒茶屋跡の標識がある。



◇笹子峠で説明された標識を確認しながら歩く。馬頭観世音普  
薩、自害沢、天明水などの標識はあるものの実態は把握できな  
かった。さらに前述の『笹子峠』と『笹子峠唄』の案内板を見て、7  
清水橋を渡り、桃の木茶跡を見て天狗橋を渡る。



### ◎駒飼宿・脇本陣跡・本陣跡

甲州街道は桃の木茶屋跡から笹子沢川の右岸を行き、天狗橋で旧20号線に出るのだが今は道は無い。『分間延絵図』には天狗橋の上流に「日影の一里塚」が描かれているが、現在その跡は分からない。「日影の一里塚」は江戸日本橋から二十九里。天狗橋を渡ると駒飼宿に入る。宿の入口に芭蕉の句「秣<sup>まぐさ</sup>負う人を枝折(采)の夏の哉」の碑がある。



### ◎駒飼宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠六軒、総家数六十四軒  
人口二百七十四人(男百三十九人、おんな百三十五人)、  
宿場の長さ四町

集落の数軒過ぎた左手に脇本陣、その先に本陣跡の標柱と「明治天皇御小休所跡」の碑が立っている。本陣、脇本陣ともいまでは建物がなく、空き地である。

『宿村大概帳』には「凡建坪六十坪玄関附にて、門構無之」とある。

### ◎勝頼腰掛石

新府から落ちのびてきた武田勝頼が腰掛けたという石は武田菱が浮いて見えるので菱石ともいう。天正年間(1573-92)のころの道はこの脇を通っていたと伝えられる。



◎鶴瀬関所跡標柱

標柱に「甲州十二関の一つ、この関は『鶴瀬の口留番所』といわれ、主に物資の流通の警戒と『入鉄砲に出女』を取り締った関所です」とある。

◎鶴瀬宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠四軒、総家数五十八軒  
人口二百四十二人（男百二十五人、女百十七人）、  
宿場の長さ三町三十間

この宿は国道20号線によって切り裂かれている。「関所跡」より宿になるが、本陣は20号線を横断した先で、右手に石尊宮の常夜灯が立つ。その先でまた20号線と合流する。



◎血洗沢標柱

『宿村大概帳』に「此宿・駒飼宿共合宿にて、人馬継合之儀毎月朔日ついでより廿日迄鶴瀬宿にて継立、廿一日より晦日迄駒飼宿にて継立いたす、尤江戸之方黒野田宿江は朔日より十五日迄、阿弥陀海道宿江は十六日より廿日迄継立いたし、甲府之方勝沼宿江は朔日より廿日迄継立いたし来」とある。

十返舎一九は『東海道中膝栗毛』に続いて著している『諸国道中金草鞋』に鶴瀬宿にまつわる狂歌「光陰の矢よりもはやく急ぎつゝ、弓のつるせにこまる夕ぐれ」を載せている。

伝説では、「武田勝頼が落ちのびてきた際、土屋惣蔵が跡部大炊助あとおのすけを討ち取り、この沢水で血を洗った」という。土屋惣蔵、跡部大炊助については以下参照。

つちやそやうまきつね  
土屋惣藏昌恒

土屋昌次の弟。「長篠の戦い」で兄が戦死したため家督を継いだ。幼少の頃から、武田家の次代を支える人材として武田信玄から期待されていたという。

武田家の滅亡の際には最後まで武田勝頼に付き従い、天目山田野の戦いで絶壁に立ち塞がって下に落ちないよう片手で蔓をつかみ、もう片方の手で刀を振るって、勝頼を追いかけてくる織田の兵を次々と切り倒し続けた。これが後に「片手千人斬」と呼ばれ、三日間血で染まった崖下の川は「三日血川」と名付られた。

そして武田家終焉の地となった「天目山田野」にて、武田勝頼の子「武田信勝」の武田家継承の儀式と、自害の介錯を行った後、武田勝頼と共に自刃している。最後まで武田家に殉じた家臣であった。

惣藏昌恒には男子が一人あった。惣藏の家来某がその子連れを逃げ、惣藏と名付けて駿府興津の清見寺に預けた。惣藏が九歳になった年、家康が鷹狩の帰りに清見寺で惣藏を見かけ、言葉をおかけたことから、土屋の遺児と分かり、駿府に連れ帰って秀忠に会わせたいうえで茶阿の局に養わせ、成人すると平八郎忠直と名乗らせて三百石を与えた。

のちに出世して上総久留里で二万一千石の大名となった。

跡部大炊助勝資は幼少の頃から信玄に目をかけられていたと言われており、武田勝頼の代に勝頼の側近となった。勝頼期には対外交渉において越後上杉氏との甲越同盟や常陸国佐竹氏との甲佐同盟などにおいて取次を務めている。『信長公記』によれば、天正十年(1582)三月十二日に織田・徳川連合軍による甲斐侵攻において勝頼とともに死去。

『甲陽軍鑑』において勝資は勝頼期の側近である長坂長閑齋光堅とともに武田家没落の原因となった奸臣として評されており、出頭人としての勝資と古参の武断派宿老との対立が武田家滅亡の原因であるとしている。『甲陽軍鑑』では天正三年の長篠の戦いにおいて勝資は光堅とともに勝頼に主戦論を主張し、大敗を招いたとしている。また、天正六年(1578)の越後国内乱「御館の乱」において光堅とともに景勝方から賄賂としての黄金を受け取ったとしており、『三河物語』によれば天正十年の武田氏滅亡時には勝頼を見捨てて逃亡したとする逸話を記している。

### ◎鞍懸標柱

伝説では、「逃亡する長坂長閑が土屋惣藏に追われ、落とした馬の鞍が路傍の桜の木に懸っていたところ」という。

長坂長閑齋光堅ながさかちよみかんざいみつた 長閑齋は出家名で文書では釣閑齋と表記され

ている。信玄の代から武田家に仕えており、越後上杉氏との北信を巡る抗争が顕著になると、牧之島の国衆香坂氏のもとへ工作に赴き、また、翌年には遠江の国衆天野氏への使者を務めるなど、外交に功績があったという。

早くから勝頼との関係は深かったようで、元亀四年(1573)の信玄没後も引き続き勝頼に重用されたという。『甲陽軍鑑』では前述跡部勝資とともに長篠の戦で主戦論を主張し大敗を招き、御館の乱では賄賂を受け取ったとしている。

また『甲陽軍鑑』では、天正十年(1582)に織田・徳川軍の武田征伐が始まると、長閑齋光堅は勝頼の軍から密かに離れて逃亡したが、織田軍の厳しい追討を受けて捕えられて首を斬られて殺されたとしている。しかし、文書上から実際は勝頼に従い殉死したものと考えられている。享年七十。

### ◎横吹集落

横吹集落は観音トンネルの先の信号を右に入り、20号線の下を通る。左手に勝頼一行がここで 休憩した際に不動尊を祀った「古跡武田不動尊」がある。集落は甲州街道の往時をいまに伝える佇まいを見せている。再び20号線と合流する辺りに一里塚(横吹の一里塚 江戸から三十番目)があった。



◇古跡武田不動尊は街道から川に向かって降りたところにいるため、雨天の為見られなかった。また二十号線と合流するあたりの横吹の一里塚も未確認であった。武田不動尊は下見のとき、筆者(中島)が撮った写真を掲載しておく。

## ◎柏尾古戦場跡

説明板には、柏尾の戦いについて次のように記されている。

「慶応四年（1868）三月五日、江戸より大久保剛（近藤勇）率いる幕府軍（甲陽鎮撫隊）は、柏尾橋の東詰、鳥居（東神願鳥居）大善寺境内の東境を示す鳥居の前に本陣を据え、大砲を二門据えつけ、宿内二箇所に通りを遮る柵門を設け、日川左岸の岩崎山に日野の春日隊を配した。夜にはいたる所で篝火がたかれ、柵の警備に宿の人もかりだされていた。三月五日に甲府城に入城した板垣退助率いる官軍は、六日甲州街道を因幡藩、諏訪藩、土佐藩の本隊が進軍し、途中岩崎方面に土佐藩隊、菱山から柏尾山を越える因幡藩隊の三手に分け柏尾に迫った。

三月六日午後、最初の銃声は、等々力村と勝沼宿の境に造られた柵門の所で起こった。幕府軍二人をねらって官軍が撃った



銃弾は、宿人足の宇兵衛を即死させてしまった。柵を破り進軍する官軍は、通りから家の裏まで見通しがきくよう、宿の家々の建具をすべて外させ、家の者は裏の物陰に隠れ、動かないように命令した。このとき通りに飛び出してしまった女性が一人撃たれてしまったという。宿通りを進軍する官軍に対し、幕府軍は次第に後退し、柏尾の茶屋に火を放ち、柏尾橋を焼き、橋から鳥居までの坂道に木を切り倒し、官軍の進撃路を防いだ。官軍は五所大神の南のダイホウインの台地に大砲を据え、深沢の溪谷を挟んで、打ち合いが行われた。岩崎方面では白兵戦が行われ、一進一退を繰り返していたが、官軍の三番手の因幡藩隊が山越えに成功し、深沢川の上流から幕府軍の本陣に攻め入ったため、総崩れとなり、甲州街道を江戸に向かい敗走し、一時間ほどで官軍の勝利に終わった。」東神願鳥居は太平洋戦争後まであって、鳥居には激戦を物語る銃弾の跡がなまましく刻まれていたという。

## ◎柏尾橋

説明板には

柏尾橋

「明治十三年六月明治天皇の山梨御巡幸に際し、甲州街道の拡幅整備が進められた。



この時柏尾橋は、幅三間長さ十九間の欄干付き木造橋として掛け替えられた。橋は、深沢の両岸岩盤中程から、二段の石垣を積み上げ橋台とし、下段の石垣からトラス構造の橋脚を両岸から突き出し連結したもので、明治二十六年の版画や、大正初期の銅版画が残されている。

この明治橋の北側には、大正から昭和の初期に掛け替えられた橋台、さらに江戸時代の橋台が残っており、南には、現在の鉄骨橋、平成八年さらに下流の甲州街道以前の大善寺東参道の橋があつた位置に祇園橋が掛けられた。

勝沼町 教育委員会

### 明治柏尾橋

「明治十三年(1880)六月、明治天皇の山梨県、三重県、京都府への御巡幸が実施された。

これに先立ち、馬車による通行が行えるよう甲州街道拡幅や橋梁の整備、清掃が進められ、山梨県内では十三橋の補強工事が行はれ、柏尾戦争で被害を受けた柏尾橋は、新規掛け替えとなつた。このとき、山梨県令藤村紫朗は、小宮山弥太郎、土



屋庄蔵、松木輝<sup>てるしげ</sup>殷の山形県の擬洋風建築(藤村式建築)を代表する棟梁三人に仕事を請け負わせ、幅三間(五・四三米)長さ十九間(三十四・三九米)の欄干付きボルト締め木造トラス橋を、当時の金額四千八百十三円で完成させた。

工事は、勝沼学校の建設を行つていた松木輝殷が主に当たつた。松木家には工事設計書や契約書、設計図案などが残されており、完成直後に撮影された写真も山梨県立図書館に保存されている。

御巡幸の折り橋のたもとに、戊辰の役でこの場所が東国で最初の戦端を開いた場所であるとの説明板が設置された。」

### 大正柏尾橋

「明治柏尾橋のすぐ上流側に造られた幅五・八米、長さ十八米の木造トラス橋で、昭和三十年代に鉄骨の昭和柏尾橋が完成するまで使われていた。建設された年代は定かではないが、深沢川の川原から積み上げた高い橋台の石積は空石積みで、橋脚の受け台のみコンクリートが使用されていることなどから、明治

## 江戸柏尾橋

「甲州街道勝沼宿の東端は深  
沢入り口の柏尾東神願<sup>じんが</sup>であり、  
大善寺の鳥居が建ち、勝沼宿の  
目印となっていた。ここから、  
深沢川を渡り柏尾に至るのが宿  
通り随一の難所で、柏尾橋にい  
たる急な坂道は『ころび石』の  
名がつけられていた。深沢川を  
渡る柏尾橋は、両岸に橋脚をお  
ろした、幅十尺（約三米）長



の終わりから大正時代にか  
け造られたと推定される。  
明治柏尾橋と比較すると橋長  
を短くし、橋脚の支持柱の数  
を増やして、重量物の通過に  
耐えられるように造られてお  
り、おそらく自動車の普及に  
対応し造り替えられたと想定  
される。」



さ十二間（約二十二米）の板橋で、江戸時代を通じ平均すると  
十七年ごとに架け替えを行い維持するのが勝沼宿の役割となっ  
ていた。それ以前の通行は、昭和柏尾橋のたもとからつづら折  
りの坂を深沢川の川原まで下り、平成祇園橋のたもとまで上が  
る大善寺東参道が使われていたと考えられている。  
江戸柏尾橋の姿は甲州街道分間延絵図などから伺うことがで  
き、慶応四年（1868）三月、この橋を挟んで繰り広げられたの  
が柏尾戦争である。」とある。

◇この柏尾橋の周りは公園になっており、柏尾公園停留所、大  
善寺、勝沼町の入口でもある。近藤勇の像をみて、本日の最終14  
目的の大善寺へと足を進める。

## ◎大善寺

大善寺は真言宗智山派の寺で、山号を柏尾山という。創建は定かでないが、寺伝では「養老二年(718)行基による開創」とある。

「同年僧行基が甲斐の国を訪れたとき、勝沼の柏尾にさしかかり、日川の溪谷の巨石の上で修行したところ、満願の日、夢の中に、手に葡萄を持った薬師如来が現れました。行基はその夢を喜び、早速夢の中に現れたお姿と同じ薬師如来像を刻んで安置したのが、今日の大善寺です。

以来、行基は葉園をつくって民衆を救い、法葉の葡萄の作り方を村人に教えたので、この地に葡萄が栽培されるようになり、これが甲州葡萄の始まりだと伝えられています。」

また、この寺には三枝守国の開創伝説もある。



その後、安元二年(1176)と文永七年(1270)に災禍にあった。

大善寺本堂(国宝)は、北条貞時が後宇多天皇の勅を奉じ、甲信二国において棟別十文を徴収し再建の費用にあて、弘安九年(1286)に立柱した県下最古の和様建築である。文明五年(1473)に武田信春によつて奉納された厨子(国宝)にはサクラの一本造で漆箔の薬師三尊(国重文)が安置されている。

天正十年(1582)三月三日、武田勝頼一行は葦崎の新府城を出発し、郡内(笹子峠・御坂峠の東方)の岩殿城で再興を図らんと東走途中、この柏尾山大善寺で戦勝祈願し、一夜を明かした。

この後、勝頼主従は天目山を目指したが、田野の地で勝頼以下一族と家臣は自決し、新羅三郎義光以来五百年続いた甲斐源氏は滅亡した。

この武田滅亡の悲運の姿を自撃した理慶尼(大善寺に係のある雨宮氏に嫁いだ勝沼五郎信友の娘が、髪を落とし理慶尼となりこの寺に住んでいた。)は『理慶尼記』を残している。

これは、武田滅亡記ともいわれ、大善寺に大切に保管されている。

◇大善寺からタクシーに分乗して、勝沼ぶどう郷駅に着く。

待合室で雨具を着替えて、ホームに行くと天気は回復の兆、本日は雨の中、思い出の多い旅になった。



第十三回 実施日 平成二十四年(2012)十一月十五日(木)

勝沼ぶどう郷駅⇨バス⇨柏尾坂公園前⇨石和温泉駅

約十一・七軒 累計約百三十二・三軒

宿 勝沼宿、栗原宿、石和宿

★集合場所・時間 JR高尾二番線甲府寄り階段下午前七時十五分

JR高尾駅 7:27 ⇨ 8:40 勝沼ぶどう郷駅

【第十三回甲州道中行程】

勝沼ぶどう郷駅⇨タクシー⇨大善寺⇨勝沼氏館跡⇨勝沼宿本陣跡・槍掛けの松⇨萩原家⇨勝沼宿仲松屋⇨旧田中銀行社屋⇨文政の常夜灯と妙な石の碑⇨杉御坊⇨栗原宿⇨大翁寺⇨大宮五所神社⇨水上稲荷神社・田安陣屋跡⇨松並木⇨笛吹権三郎の像⇨石和陣屋跡⇨由学館跡⇨石和宿⇨石和本陣跡⇨遠妙寺⇨八田

家書院⇨石和温泉駅

◇前回とは打って変わって変わって上天気、勝沼ぶどう郷駅のホームから山並みが綺麗、バスの予定がタクシーで大善寺まで行き、そこからスタートする。



◎勝沼宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠二十三軒、総家数百九十二軒  
人口七百八十六人(男三百九十四人、女三百九十二人)、  
宿場の長さ十二町  
甲州盆地の東に位置し、近世は甲州街道の主要な宿場の一つとして、にぎわいを見せていた。

宿場の通りには格子戸や葺造りの家も何軒か残っていて、昔の雰囲気を保っている。

### ◎勝沼氏館跡

勝沼氏館は、武田氏の親類衆の筆頭勝沼五郎の居館である。勝沼五郎は信玄の父・武田信虎の同母弟、信友の嫡男信元のことと信玄のいとこにあたる。永禄3年(1560)、武州秩父の藤田右衛門尉と通じたことが露顕し、信玄に滅ぼされた。

文化年間(1804~18)に記された『甲斐国古城跡志』に「山梨郡勝沼村の内、城跡一ヶ所」として「但し二町四方ばかり、二重の堀あり、御殿跡と申すは茶の木を植置候……御殿の跡は御所ともうし伝え罷り有り候、右御城主は勝沼五郎昌友と申し伝え候」とあり、また、『東山梨郡誌』に御所について「勝沼町の



南方、日川に沿いたる懸崖十数丈の一耕地に、字御所と称する所あり。是れ勝沼五郎信友の城跡なり」と記されている。

昭和四十八(1973)年五十二年の発掘調査で館跡の全容が解明。約四万七千平米、内郭部は発掘当時の姿で全面保存されている。

館跡は標高約四百十八米、二重の堀跡がある。内郭は東西約九十米、南北約六十米で、南側は比高二十五米の急崖をなして日川に臨んでいる。内郭は周囲に土塁を巡らし、その内側下部に水路の跡がある。防備中心に構築された中世武将館跡として評価されている。

### ◎勝沼宿本陣跡・槍掛けの松

勝沼氏館跡のすぐ先の右側が脇本陣で、隣の松の木のある場所が本陣(屋号池田屋)跡。本陣跡に生えている松が「槍掛けの松」である。名の由来は大名一行が泊まったとき、この松の枝に槍を立てかけて置いたところから来ている。

本陣は『宿村大概帳』によると「凡建坪八十七坪、門構・玄関附」とある。





### ◎萩原家

本陣跡を過ぎると道の左側に白壁の蔵と、それに続く重厚な二階建ての母屋「萩原家」がある。

勝沼宿のかつての賑わいを想像させる豪商のたたくまいである。質屋で財をなしたと言われているが、店先は帳場で入口から広い土間が続き、二つの部屋と反対側には内蔵がある。

### ◎勝沼宿仲松屋

萩原家の隣が勝沼宿仲松屋である。説明板には

「勝沼宿仲町の仲松屋住宅は、江戸時代後期の主屋を中心とした東屋敷と明治時代の建築を中心とした西屋敷の二軒分の商家建築から成る。東屋敷の主屋は北西隅に帳場を置く田の字型を基本とした、板葺、二階建建築で、通り土間を挟み明治後期に一階を座敷として建てられて協蔵（通り蔵）、坪庭、風呂、廁、味



噌蔵から構成されている。西屋敷は帳場と居間を別棟とした主屋と坪庭、会所、蔵屋敷などから構成されている。東西両屋敷群は勝沼宿の建築を知る上で貴重である。

とある。

勝沼町 教育委員会

### ◎旧田中銀行社屋

国登録有形文化財。説明板に

「藤村式建築の流れをくむ建物。明治三〇年代前半に勝沼郵便電信局舎として建てられた伝承をもつ入母屋造り、瓦葺、二階建の建物で、大正九年より昭和七年ごろまで山梨田中銀行の社屋として利用された。外壁の砂漆喰を用いた石積み意匠、玄関の柱や菱組天井、二階のベランダ、引き上げ窓、彩色木目扇、階段などに擬洋風建築の名残があります。また、建物の背後には銀行時代に建てられた、扇に『山梨田中銀行』の名が鮮やかに残るレンガ外装の土蔵があります。とある。

勝沼町 教育委員会





◎勝沼宿の家並み

旧田中銀行社屋を過ぎて百五十米強、ようあん坂を下った勝沼小学校入口の「明治天皇勝沼行在所碑」の手前が問屋場跡。その先、勝沼地域総合局入口の交差点あたりに高札場があった。

等々力の交差点あたりに一里塚があったと推定されている。このあたりまでが勝沼宿であった。

◇昨年の十一月に



偶然知り合った等々力の大雅園が道筋にあり、寄つてみる。皮も食べられるので歩きながら食べてくださいと、大粒のぶどうを頂きご夫妻に見送られる。

◎文政の常夜灯と妙な石の碑

等々力交差点から二百五十米にある妙な石の碑は「道祖神」とも「延命地藏尊」ともいわれている。勝沼地域総合局入口から西五百米位行った右手の諏訪神社には一つ玉（丸石）の道祖神がある。



◎万福寺（杉御坊）

万福寺は、「杉の御坊」の名をもつ浄土真宗本願寺派（西）の寺で山号を等々力

山という。縁起では、推古十二年（604）聖徳太子の命を受けた調子磨（注1）が甲斐へ入国して、時の国司秦川勝の助け



を得て建立したといわれる。安貞二年(1228)に遊行した親鸞の教えに従い寛元二年(1244)浄土真宗となった。南北朝期は天皇の祈祷所、室町期には將軍家祈祷所となり、武田氏の庇護のもと武田信玄と本願寺・一向一揆衆との連絡をこの寺の夷了師慶が取り持った。



境内にある大石「馬蹄石」は、聖徳太子が黒駒(注2)に乗って富士山に飛来した折、この石の上にとどまつたときの馬のひづめの跡と伝えられ

ている。なお、甲斐国矢代郡上黒駒村(現笛吹市御坂町上黒駒)という地名がある。「杉の御坊」は、親鸞が同寺に逗留したとき、杉の箸を地面に刺して念仏を唱えたところ、たちまち芽をふき、大木となったのに由来する。また、境内には、芭蕉の句碑「行駒の麦に慰むやどりかな」がある。ほか、県の天然記念物に指定されている根囲十二・三米、目通り幹囲五米、樹高二十二・五米の榎の木の大木がある。

注1) 調子磨 || 調子磨は百濟から渡来して聖徳太子の舎人となり黒駒の世話をしていたという。

注2) 黒駒 || 『聖徳太子伝暦』や『扶桑略記』によれば、太子は推古天皇六年(638)四月に諸国から良馬を貢上させ、献上された数百匹の中から四脚の白い甲斐の烏馬くろうまを神馬と見ぬき、舎人の調使磨(調子磨)に命じて飼養する。太子が試乗すると馬は天高く飛び上がり、太子と調使磨を連れて東国へ赴き、富士山を越えて信濃国まで至ると、三日を経て都に帰還したという。

◎ 栗原宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠二十軒、総家数二百四十軒  
人口一千五十七人(男五百三十八人、女五百十九人)、  
宿場の長さ六町



現在は開発が進み、宿場の面影が全くみられない。

『諸国道中金草鞋』には、狂歌「渋皮のむかし女もみゆるなり  
うまささかりの栗原のちや屋」、「馬つらのような女を追廻す  
御牧の名ある栗原の宿」とある。

◎大翁寺

寺地は栗原氏の館跡と伝えられる。いまは墓地の奥の竹林に  
土塁の一部が認められるのみである。栗原氏は甲斐守護武田信  
成の子、武統を祖とし、国人領主として守護武田氏と並ぶほど  
の勢力を振るっていた。

◎大宮五所神社



江戸時代には栗原筋五十五ヶ村の総鎮守であった。参道には、  
木製の両部鳥居と、その内側に石の鳥居がある。建物は歌舞伎  
造り、社殿の前が舞台となる。拝殿に掲げられた絵馬は山梨  
県指定民俗有形文化財です。境内には「老松」といわれる市指



定天然記念物のクロマツがある。根回り三・二五米、目通り二・八三米、樹高十二米、樹齢は不詳です。

◇ここ大宮五所神社で小休止、大雅園で頂いたぶどうを誰かが食べようと言いつし、皆でつまむ。甘くて美味しいのに吃驚、甘味で手がべとべとになる。

大宮五所神社から葡萄畑や川沿いの道を二十五分ばかり歩き本日の昼食場所、田安陣屋跡に着く。



### ◎水上稲荷神社・田安陣屋跡

一町田中の信号を右折し、百米ほど進むと水上稲荷神社があり、



ここが田安陣屋跡である。

説明板には

「山梨市指定 史跡 田安陣屋跡

江戸幕府第八代將軍徳川吉宗の二男田安宗武は、延享(えんきょ)三年(1746)領地として甲斐・武蔵・下総・和泉・摂津・播磨の六か国にわたって十萬石を与えられた。そのうち甲斐は山梨郡(こおり)二十八か村、矢代郡三十五か村の計六十三か村で、石高三万四十一石六斗二升八合五勺、その後天保三年(1832)山梨・矢代・巨摩三郡のうち四十か村、一万七千石が加えられた。現在、陣屋を囲んで濠の一部が北部と西部に遺(のこり)、北東の石積みの上には守護神の水上(みずかみ)稲荷社が祀られている。

山梨市教育委員会





昼食後、水上稲荷神社・田安陣屋跡にて 第十三回参加者記念撮影  
 左から【中島、八木、宇山、浅見、竹島、前北、中田、伊藤、三浦、嶋崎、折本】

◎南田中一里塚跡

日川橋を渡り日川橋南の信号の少し手前、白山神社のある川沿いの道（右折）を進むと田中の集落に入る。日川橋南の信号の少し手前右折点から約四百米あたりに南田中一里塚があったようだ。『分間延絵図』には南田中村を出た日川土手際の左手に一里塚が一基描かれている。

『宿村大概帳』にも「木立無之 但、左右の塚共南田中村地内」とある。しかしこの辺りは明治四十年の大洪水で笛吹川の河道が大きな被害を受けたため、塚の痕跡は全く残っていない。

◇日川橋の上から石和方向を見る。土手道を歩くと遠く山間に富士山が頭を出している。この辺の川は明治四十年の洪水で川筋が大きく変わったと中島さんが突然地図を広げて説明する。



中島さんの説明通り、日川沿いに歩いていたら、いつの間にか笛吹川沿いになっている。

もたらした。

### ◎川中島の松並木

笛吹川を渡り、石和温泉郷入口東の信号を左折すると、松並木がある。明治四十年の災害後、笛吹川の河道が変わって、現在の流れとなった

が、堤防の保護のため松の木が植えられた。

今も約三百米ほど残っていて、旧道のようなおもむきがある。



### (一) 降雨

本州南部に二つの台風が停滞したため、山梨県内では八月二十二日から降り始め、二十三日夜に強雨となり、二十七日午後まで降り続いた。殆どの地域で総雨量四百糎を超え、大原村(現大月市)で七百十八糎、丹波山村で六百八・五糎、泉水谷(丹波川の最奥)で八百八十二・七糎、日影村(甲州市大和町日影、甲州街道駒飼宿の先、日川沿い)で五百六十・四糎、谷村町(現都留市)で四百八十四・九糎を記録した。

特に県東部に大雨が集中し、二十三日～二十五日にかけて日雨量百糎以上の大雨が各地で二日以上降り続いた。日影村・丹波山村では日雨量二百糎以上の豪雨が続ぎ、泉水谷で日雨量四百十六糎、大原村で日雨量四百十五・三糎を記録した。

### (二)、県内の被害

県内の山間部では崩壊がおびただしく、平野部ではほとんどの河川が氾濫した。死者二百三十三人、負傷者百八十九人、家屋の全壊一千二百六十七戸、半壊一千七百二十八戸、破損・流失八千九百二十八戸、床上・床下浸水一万五千五十七戸にも及び、田畑や人畜等の被害も著しく、有史以来の大被害となった。

### ◎明治四十年 大水害

一、山梨県東部における大水害明治時代、山梨県では台風や豪雨により度重なる水害が発生していたが、その中でも甚大な被害をもたらしたのは、明治四十年(1907)八月下旬の大水害である。当時の主要な交通網は甲州街道や青梅街道、富士川の舟運であったが、明治四十年大水害は、これらの交通網にも多大な影響を

激甚地は県東部の東八代・東山梨・北都留・南都留の各地であり、東八代郡の被害が最も大きく、日川、重川、御手洗川及び金川で惨状を極めた。

### (三)、崩壊地の分布

山梨県東部では、二十三日～二十五日において広域的に崩壊が多発し、土石流や土砂流の氾濫等による同時多発型の大規模土砂災害が発生した。御坂峠から笹子峠、大菩薩峠に至る分水嶺付近では三日間の総雨量は約九百耗にも達し、県内では御坂峠、笹子峠および柳沢峠を結んだ東西二十耗、南北二十八耗の範囲に崩壊が多発した。崩壊箇所は約八千箇所、崩壊面積の合計は約十平方杆に及び、崩壊地は笛吹川上流の重川、日川、御手洗川及び金川、相模川上流の笹子川に集中した。

### (四)、各河川の土砂流出

重川や日川、御手洗川、金川、笹子川の上流域では崩落が多発し、諸溪流では土砂流出が著しく、家屋や田畑は埋没し、直径数米の巨石が堆積した。重川では、柳沢や葡萄沢、佐野川等の支川で土石流が発生し、大菩薩峠山麓の悪沢では天然ダムができ、また、日川では、木賊川や焼山川等の支川で土石流が発生し、中流域の旧鶴瀬村や旧初鹿野村では土砂氾濫により家屋

が埋没または流失した。さらに、重川及び日川の下流域に位置する旧日川村では、土砂氾濫により堤防が決壊したため、街道が寸断し、重川・日川上流域の集落は数日間孤立した。笹子川では、大鹿川（白野宿の先）等の支流からの土砂流出が著しく、笹子川が氾濫したため、笹子川沿いの家屋は埋没または流失し、道路や鉄道も流失した。初狩宿の本陣の山本周五郎生家もこの時壊滅的被害を受け、周五郎一家は北豊島郡王子町豊島（現東京都北区豊島）に転居した。また、中初狩宿の先、笹子川を渡る御舟石橋にあった舟石も流失した。

重川・日川・御手洗川・金川合流点下流に位置し、富士川舟運の拠点である石和町は、これらの河川の洪水・土砂氾濫の直撃により堤防が決壊した。家屋や田畑等は殆ど流失して壊滅状態となり、見渡す限り巨石で埋め尽くされ、河原と化した。

### 二、石和町での笛吹川の流路の変化

最上川、球磨川とともに日本三大急流の一つである富士川水系の笛吹川は、地形が急峻なため、梅雨、台風季節に洪水が起こり易くなっている。中でも明治四十年(1907)八月に発生した明治四十年大水害と呼ばれる洪水は被害が甚大であり、笛吹川本流の流路が約七杆にわたって変わってしまうという凄まじいものであった。これまでの笛吹川は甲州街道(現国道四一一

号)、笛吹橋の少し上流付近より西方向に流れ、温泉街を西に流れ(八田家書院の北側の土塁が堤防の跡)た後、石和町と境界を流れる(現在の)平等川を經由し、旧中道町の北東部にある白井河原橋付近で現在の笛吹川本流につながっていたが、この洪水による土手決壊及び旧河川敷の土砂堆積により南東方向へ流路を変えた。新河川流路整備等が行われ現在の笛吹川となった。今の笛吹川は百年ほど前までは存在していなかった。

三、多摩川における明治四十年八月二十四日の洪水の被害

旧地名	被害
中州村	堤防決壊
拜島村字石原	三十間余(約六十米)堤防決壊
小宮村	四十間(約七十米)、他一箇所堤防決壊。一戸流出、電柱一本、橋梁一橋流出。十戸浸水
羽田村字鈴木新田	弁天橋落橋、二百二十戸浸水古市場渡し三間余(約六米)堤防決壊
調布村字友田、字下菅	五十間(約九十米)、二百間(約三百六十米)堤防決壊
浅川村 他7箇所	堤防決壊
八王子霞村	百五十間(約二百七十米)堤防決壊、一反(約二万一千平方米)流出。

八王子大郷村字古川	十間(約十八米)堤防決壊。
雜式村	二戸流出
府中多摩川村字瀬田	家屋二戸小屋一戸流出。
元小安	百間(約百八十米)堤防決壊、一丁(約百十平方米)浸水。
粕江村字泉	百四十間(約二百五十二米)堤防決壊。
砧村、岡本村、等々力	一面深さ二丈(約六・〇六米)浸水。
羽田村	一尺三寸(約三十九糎)浸水、二百二十戸浸水。
矢口村	五十間(約九十米)他4箇所堤防決壊、二戸流出。
羽村	三百間(約五百四十米)堤防決壊、三戸水没。

◎笛吹権三郎の像

説明の石板には「笛吹権三郎の事

今から六百年ほど昔、芹沢の里(現在の三富村上釜口)に権三郎という若者が住んでいた。彼は鎌倉幕府に反抗して追放された日野資朝一派の藤原道義の嫡男であったが、甲斐に逃れたと聞く父を母と共に尋ね歩いてようやくこの土地に辿り着き、仮住まいをしている身であった。彼は孝子の誉れ高く、また、笛の名手として知られており、その笛の音色はいつも里人の心を酔わせていた。ある年の秋の夜のことである。長雨つづきのため近くを流れる子西川が氾濫し権三郎母子が住む丸木小屋を



一瞬の間に呑み込んでしまった。若い権三郎は必死で流木につかまり九死に一生を得たが、母親の姿を見つけることはついにできなかった。悲しみにうちひしがれながらも権三郎は日夜母を 探し求めてさまよい歩いた。彼が吹く笛の音は里人の涙を誘い同情をそそった。しかし、その努力は報われることなく、ついに疲労困憊の極みに達した権三郎は、自らも川の深みにはまってしまったのである。変わり果てた権三郎の遺体は、手にしっかりと笛を握ったまま、はるか下流の小松の河岸で発見され同情を寄せた村人の手によって土地の名刹長慶寺に葬られた。権三郎が逝ってから間もなく、夜になると川の流れの中から美しい笛の音が聞こえてくるようになり、里人たちは、いつからかこの流れを笛吹川と呼ぶようになり、今も芹沢の里では笛吹不動尊権三郎として尊崇している。これが先祖代々我が家に伝えられている権三郎にまつわる物語です。

昭和六十年五月吉日

山梨県山梨市七日市場四九三番地 長沢房子(旧姓広瀬)とある。

### ◎石和宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠十八軒、総家数百六十六軒  
人口一千百四十三人(男五百七十八人、女五百六十五人)  
宿場の長さ六町

国中東部の幕府領を支配する代官所が置かれ、郷学由学館もあつた。また、この宿は鎌倉街道の起点である交通の要衝でもあつた。笛吹川には「川田河岸」が設けられ、駿州岩淵までの舟便があり、身延詣にも利用された。

### ◎石和陣屋跡

説明板には「寛文元年(1661)甲府宰相徳川綱重の時建てられた陣屋で、綱重は江戸城桜田邸に居住したので代官所として



使用された。享保九年(1724)甲府藩第二代藩主柳沢吉里(柳沢吉保の長男)が大和郡山(十五万石)へ国替えの後、慶応三年(1867)まで甲斐国のおよそ三分の一を支配する江戸幕府の出先機関であった。(代官所とは、主君にかわって官職を代行する役所のこと、柳沢吉里の移封後は、江戸幕府の直轄地となったので、幕府の役人が年貢収納や民政を司った)とある。  
現在は石和南小学校の敷地となっているが、校門付近に石塁が残り、門は八田家に移築されている。

### ◎石和本陣跡

『宿村大概帳』に「凡建坪五十四坪 門構・玄関附」とある。本陣跡の説明板には



「(前略)……石和御本陣は寛永年間(1650頃)幕府の命により此処に置かれた。特に大名が宿泊し信州松代城十万石真田伊豆守及び松平甲斐守十五万石を初め全国の諸大名が宿泊し大名宿とも言われ明治維新まで続いた。建物(書院造り、門・玄関・上段の間を備えて広大な構えであった。明治十三年六月十九日明治天皇御巡幸のみぎり御休息のご予定のところ同月六日、大火に抛り焼失し

現在土蔵一棟のみ現存している。石和町」とある。

### ◎由学館跡

文政六年(1823)に当時の代官山本大膳が一宮町小城に作った学校を後に移転。主として漢学を教授。武士ばかりでなく、一般人にも聴講を許していたという。



### ◎遠妙寺

日蓮宗うかいざんおんみょうじ鵜飼山遠妙寺は謡曲「鵜飼」で知られる寺。遠妙寺の縁起や石和地域の民話によると、「平安末期、殺生を禁じる領主により禁漁となっていた笛吹川で鵜飼をした老鵜匠勘作(実は、勘作は平時忠であり、配流先の能登国から逃れてこの地に



流れ着き、漁師をしていたとの伝説がある）が極刑を言い渡され實巻きにされて川に沈められた。だがその後勘作の亡霊が出るようになり、村人が困り果てていたところ、たまたま通りかかった日蓮上人と弟子の日朗が供養を申し出る。二人が法華經六万九千三百八十字余りを一字一字河原の石に書いて川に流し（川施餓鬼）、供養塔を建てたところ、それ以降勘作の亡霊は出なくなつた。この時に日朗がこの地に草庵を結び、それが現在の鵜飼山遠妙寺となつた」と伝えている。この話が後（室町時代）に榎並左衛門五郎原作世阿弥改作によつて能「鵜飼」となつた。山門をくぐると正面に仁王門、本堂と続く。仁王門は寛政年間（1789～1800）の再建。中の仁王像は像高百八十糎とほぼ等身大だが、力強く美しい。左手に鵜飼翁の供養塔、さらに奥に「鵜飼勘作の墓」（五輪塔）があり、その前に「謡曲『鵜飼』と鵜飼勘作」の説明板がある。

寺宝の「七宝の経石」が現在、本堂に置かれていて参拝者は見ることが出来る。これは川施餓鬼の際に日蓮が字を書いた石といわれ、「南無妙法蓮華經」の七文字がそれぞれに書かれている。遠妙寺は「宗門の川施餓鬼の根本道場」であり、毎年九月十六日には施餓鬼法要が行われる。

◎八田家書院（県文化）



八田家は武田氏の藏前奉行として、年貢の収納、軍糧の輸送をつかさどっていたため、天正十年（1582）三月、織田軍の兵火にかかり、居宅その他をことごとく焼失した。

同年七月、徳川家康が入国の際に、徳川家に属して、家康か



ら万力まんりき(山梨市)の材木を賜って母屋(この建物は安政六年(1859)七月に笛吹川の洪水のために大破したので取り壊された)を造立し、また慶長六年(1601)に都留郡つる富士根ふじねの材木を賜って書院を構築した。茅葺入母屋造で、桃山時代末期の武家書院様式をよく残しており、当時の格調がよく保存管理されている。

八田家の表門は寛文元年(1661)、石和代官所創設の際、代官の平岡勘三郎良辰が石和陣屋表門として建立したものを、明治七年(1874)十一月に八田家が払下げをうけて、当家の表門としてここに移築したものである。屋敷全体も八田家御朱印屋敷として県の史跡に指定されている。

◇調理師会が犠牲になった魚介類の供養として、建立した観音様をみて、綺麗な川筋の道を歩き、石和温泉駅に無事到着する。



第十四回 実施日 平成二十四年(2012)十二月二十日(木)  
石和温泉駅～県立美術館ⅡバスⅡ甲府駅  
約十一・五軒、累計約百四十二軒

宿Ⅱ甲府柳町

★集合場所・時間

① JR 高尾二番線甲府寄り階段下 午前七時十五分 高尾 7:27  
小淵沢行Ⅱ 9:13 石和温泉 ② \* 特急利用の場合 八王子  
8:03 あずさ3号Ⅱ 9:03 石和温泉(石和温泉駅で合流)

【第十四回甲州道中行程】

石和温泉駅～石和八幡宮～甲運橋～川田の道標～武田氏館跡30  
(県立青少年センター)～和戸町名の由来の標柱～山崎刑場跡～  
板垣の一里塚跡～酒折宮～善光寺～木戸と枅形～石川家住宅～  
尊祿寺～新聞発祥の地碑～(甲府城)～甲府柳町宿～相生歩道  
橋～旧泉町の道標～荒川橋～貢川橋くがね～サイカチの木～県立美術  
館Ⅱバス(十五分)Ⅱ甲府駅

注) 山梨県立美術館 開館時間 9:00～17:00

◇石和温泉駅から南に四百米ばかり歩くと石和橋がかかりその上に笛吹の銅像が立っている。付近は笛吹川が流れていたが無  
明治四十年の大水害で川の流れが大きく変わり、復興に貢献し



た人の功績をたたえる標識を見て石和八幡宮に寄る。

◎石和八幡宮

説明板には「八幡信仰は、源氏一門がとくに尊崇した神であり、始祖頼信が承承の頃(1050頃)石清水八幡宮へ奉納した願文によっても清和源氏の氏神であったことがわかる。

八幡宮は、応神天皇または八幡神(三神一体)の神に対する信仰で、源氏がとくに武神として崇め、神社の配置形式は独特な八幡形式を持っている。頼信の子頼義は石清水の社前で、長子の加冠の礼を行った。これが八幡太郎義家である。

康平六年(1063)頼義は石清水八幡宮を、鎌倉に勧請して鶴岡八幡宮とした。

当社の社記によると、武田氏の祖信義の子信光(石和五郎)

が建久三年(1192)鶴岡八幡宮をこの地に勧請して、石和八幡宮として郷の産土神とした。祭神は応神天皇・仲哀天皇・神宮皇后の三神であり、武田氏の尊崇あつく、甲斐源氏の射法相伝の儀式はすべて当社で行われたといわれる。

永正十六年(1519)武田信虎が川田の地から躑躅ヶ崎に居館を移すとともに、当社を府中に勧請して府中八幡宮としてからも、武田家の厚い崇敬を受けて栄えたが、天正十年(1582)武田家滅亡のおり、織田軍の兵火にかかり社殿のすべてを灰じんに帰し、翌年徳川家康の寄進によって社殿が再興されたといわれる。現在の建物は安永三年(1774)従来の三棟を一棟にして建立されたもので、拜殿・随神門ともに石和町最古の建築である。浅野長政以来歴代の国主、甲府勤番支配は当社に参拝することを例とし、本殿には記録が納められている。また拜殿には、



豊臣時代の奉納と思われる竜、駒の一对、龜山上皇湯立図、加藤清正・小西行長と朝鮮王宣和との講和図一对の幅五尺もある大きな絵馬があり、このほか江戸時代の絵馬多数もあつた歴史上貴重なものとされている。 石和町」とある。

◇両部鳥居を出るとすぐ四一一号線に出る。

川田＝石和八幡宮から二百五十米で甲運橋を渡るが、ここから川田の集落になる。

### ◎甲運橋（川田の渡し）

現在の橋は昭和十年（1935）に造られた。もとは笛吹川の本流が流れ、夏期は舟渡しであった。



『宿村大概帳』には「常水川幅三拾六間、出水之節百式拾間に相成……（中略）……右川年々四月より十一月迄渡船いたし、十一月より翌三月迄土橋を掛渡し通路いたす」とあり、船賃は「老人に付六文、馬老正に付拾二文」の定めであった。甲運橋の西詰にある「甲運橋碑」には、明治七年（1874）九月、藤村県令により長さ四十五丈（約百三十六米）中二丈（約六米）の長大な甲運橋が完成したことが掛かれている。しかし明治四十年の水害で橋は流され、笛吹川は石和の東を流れるようになった。

### ◎川田の道標

万延元年（1860）に建てられた「川田の道標」は、高さ百二十六糎。表に「右富士 大山 東京道」と刻まれているが、この道標の「東京」は「江戸」を改刻したものであり、「左 甲運橋」の甲運橋という橋名は明治七年九月に命名されたもので、あとから追刻されたものである。



### ◎武田氏館跡

道の右側に県立青少年センターがあり、「武田氏館跡」の標柱がある。標柱には「（由来）川田町、川田の名の起こりは河原に



由来するといふ。武田信義の五男信光の居館があつた。武田信虎がつつじヶ崎の館に移るまで武田氏はおおむねここに居住、現在も「御所曲輪」の地名が残る。」とある。

信虎が新館を躑躅ヶ崎に築き、一族家臣を府中に住まわせたのは、永正十年(1519)。

◎和戸町名の由来の標柱

甲運小学校入口バス停に和戸町名の由来の標柱がある。標柱には「和戸町(由来)和戸町は平安期の附近を中心として栄



えた表門郷の遺称である。郷とは奈良時代に五十戸をもつて編成された行政村落のことであり、地名の由来から、古くから集落が発達していたことが知られる。地内には在原塚、琵琶塚、太神さん塚などの古墳が 点在する。」とある。

◎山崎刑場跡

山崎三差路の交差点で雁坂みち(青梅街道)と合流する。この道は、恵林寺、大菩薩峠を越えて青梅、内藤新宿へ通じていた。



この三差路(追分)のすぐ先、右手の小さな公園が「山崎刑場跡」である。「山崎の刑場」は甲府代官所の死刑執行場。江戸中期に設けられ、明治五年(1872)の大小切騒動(注) 処刑を最後として廃止するまで約五十年間使用された。

高さ二米四十糶の「南無妙法蓮華經 身延山五十八代 日蓮」の供養塔があり、周囲に六地藏・無縫塔・墓塔などがある。

『甲州街道』（中西慶爾著 木耳社 1972年）に「香煙縷々たり山崎刑場趾」がある。「…斬り棄て場二ヶ所、首洗い井戸四ヶ所、骨捨て井戸一ヶ所という、かなり大規模な公認殺人場であったという」などの記述がある。甲州における博徒の大親分黒駒勝蔵は、明治政府によりここで処刑されている。

（注）大小切租法と騒動Ⅱ江戸時代甲州国中の山梨・八代・巨摩三郡には、大小切と呼ばれる年貢の納入法が行われていた。

その名は年貢額の三分の二を大、三分の一を小と区分したことから起り、武田氏の遺制が継承されたといわれるが、最近の研究によると、慶長年間（1596～1615）までさかのぼることができる。甲州の年貢は江戸初期まで<sup>もみ</sup>粗納であったが、笛吹川以西では寛文（1661～73）から、以東では宝永（1704～11）から米納になった。大小切租法によると、小切の分は金一兩につき米京枅四石一斗四升（従来は京枅換算の初六石九斗）の割合をもって金納し、大切の分の三分の一は<sup>おん</sup>御張紙<sup>かひだん</sup>値段（公定相場）に換算して金納、残る大切分の三分の二を米納する。これが明治初年まで続いた整った形の大小切租法である。

農間稼ぎの現金収入に頼ることが大きかった甲州農民に適合

した税法であり、ことに時代が下がるにつれて米価が騰貴しても小切の米金換算率は一定であったから、農民にとってはたいそう有利であった。幕府はたびたび廃止しようとしたが、農民の強い抵抗で実現せず、明治五年（1872）、新政府が廃止を通じたのに対しては、山梨郡の九十七カ村が武装蜂起した「大小切騒動」が、軍隊を背景にした県庁に鎮圧された。大小切租法の継続を願い出て処せられた島田富重郎の墓は石和町の大蔵<sup>だいざう</sup>経寺にある。

#### ◎板垣の一里塚跡

酒折駅前信号の先に「板垣の一里塚」があったが、現在はその位置は不明。江戸日本橋から三十五里。



◇酒折道標から山梨学院大学を過ぎて、先の信号を右折して酒折宮へ向かう。

◎酒折宮さか折りのみや

祭神は日本武尊。『古事記』や『日本書紀』の日本武尊説話で有名な所である。尊が蝦夷征伐を終えて都へ



帰る途中ここに宿營したと伝えられている。そのとき尊は「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と歌で家来たちあそびに問いかけた。常陸国新治郡の筑波からここ甲斐国にくるまで、幾晩寝ただろうかという意味であるが、

尊のこの問に対して家来たちの中には歌で答えられるものはいなかった。すると身分の卑しい焚火番たきびの年老いた男がすすみ出て「かがなべて夜には九夜、日には十日を」とみごとにつけ加えた。数えてみますと九泊十日かかりましたの意味である。尊はこの老人の才能をたいそうほめ、東国あそびまのくにのみやうこ造に任命したと『古事記』や『日本書紀』では伝えている。

注 『古事記』原文

『即自其國越出甲斐、坐酒折宮之時、歌曰、

邇比婆理 都久波袁須疑互 伊久用加泥都流

爾其御火焼之老人、續御歌曰、

迦賀那倍互 用邇波許許用 比邇波登袁加袁

是以誉其老人、即給東國造也。』

『日本書紀』原文

『蝦夷即平、自日高見國還之、西南歷常陸、至甲斐國、居右于酒折宮。時舉燭而進食。是夜、以歌之間侍者曰、

珥比麼利、菟玖波塙須擬氏、異玖用伽彌菟流

諸侍者不能答言。時有秉燭者。續王歌之末、而歌曰、

伽餓奈倍氏、用珥波虛々能用、比珥波苔塙伽塙。

即美秉燭人之聰而敦賞。則居是宮、以鞍部賜大伴連之遠祖武日也。』



の大成者本居宣長が撰し、その弟子にあたる平田篤胤の酒折宮寿詞の碑が立っている。



◇酒折宮の東鳥居から出て、急坂を登る。右側に梅の名所の不

後世、この伝説が、二人で一首の和歌を詠む連歌の起源だと考えられ、連歌発祥の地として酒折宮を訪れる文化人が多かった。境内には山形大式の酒折祠碑や国学

老園が広がり、その先の中腹に連歌の碑があるとの案内である。振り返れば富士山が、西側には南アルプスの山並みが晴天に映える。甲斐善光寺まではゆるい坂道を下る。

◇ポンポコ塚と玉諸神社拝殿跡の標識

「やまなしの歴史文化公園 北山野道

ポンポコ塚と玉諸神社拝殿跡

玉諸神社拝殿跡南西のぶどう園内に見える土盛りがポンポコ塚です。北原扇状地帯には、古墳が二十基ほど点在していますが、ポンポコ塚はかなり保存状態が良い方です。形や大きさ・副葬品など、くわしい事は不明ですが、横穴式の石室などから六〜七世紀頃のものと考えられています。古墳は昔「御前塚」といわれ、この玉諸神社とかわりがあったようです。背後の

御室山山頂付近にも石祠があり、柴宮神社しばみやの撰社せんしゃとして合祀されています。この祭神は農耕にかかわることから、早魃かんぼつのときは近郷の人々が太鼓をボンボコ打鳴らしながら御室山に登り雨乞いの祈願をしました。これが明治の中頃まで続き、いつのまにかボンボコさんと呼ばれるようになりました。ボンボコ塚の名前の由来にはいくつかの説がありますが、これもその一つです。

甲府市・甲府市教育委員会「

と標識が立っている。

### ◎善光寺

開基は武田信玄(1521～73)である。信玄は信濃へ進撃し、越後の上杉謙信と天文二十二年(1553)から永禄七年(1564)に



かけて前後五回川中島で対戦した。永禄元年(1558)、信玄は長野の善光寺が戦火にさらされることを恐れ、本尊以下諸仏や寺宝類をこの地に移し、自ら開基となり甲府に善光寺を建立した。永禄八年(1565)三月に落慶供養が行われたという。

37

天正十年(1582)、武田氏滅亡の際、本尊が一時外に出たが翌年戻った。この本尊は慶長二年(1597)には豊臣秀吉の命により京都方広寺へ移り、翌年信濃善光寺に帰された。武田氏滅亡後も織田信長、豊臣秀吉により保護され、徳川氏もこの善光寺を厚く保護したが、宝暦四年(1754)の大火で全伽藍を焼失した。現在の本堂(国重文)は明和三年(1766)再建に着手し、寛政八年(1796)に完成したもので、その間実に三十年を要した。(工事が遅々として進まないことを「善光寺普請ぶしん」というようになつた)。



主な善光寺について

◎善光寺（信州善光寺）

善光寺は、無宗派の単立寺院、山号Ⅱ定額山、本尊Ⅱ一光三尊阿弥陀如来（絶対秘仏）、創建Ⅱ伝皇極三年（644）、開基Ⅱ伝皇極天皇（勅願）

山内にある天台宗の「大勧進」と二十五院、浄土宗の「大本願」と十四坊によって護持運営されている。「大勧進」の住職は「貫主」と呼ばれ、天台宗の名刹から推挙される。「大本願」は大寺院としては珍しい尼寺で、住職は「善光寺上人」と呼ばれ、門跡寺院ではないが代々公家出身者から住職を迎えている。善光寺の住職は、「大勧進貫主」と「大本願上人」の両名が務める。

善光寺の歴史概要（善光寺ホームページより）

「(前略)『善光寺縁起』によれば、御本尊の一光三尊阿弥陀如来様は、インドから朝鮮半島百済国へとお渡りになり、欽明天皇十三年(552)、仏教伝来の折りに百済から日本へ伝えられた日本最古の仏像といわれています。この仏像は、仏教の受容を巡っての崇仏・廃仏論争の最中、廃仏派の物部氏によって難波の堀江へと打ち捨てられました。後に、信濃国司の従者として都に上った本田善光が信濃の国へとお連れし、はじめは今の長野県飯田市でお祀りされ、後に皇極天皇元年(642)現在の地に遷座いたしました。皇極天皇三年(644)には勅願により伽藍

が造営され、本田善光の名を取って「善光寺」と名付けられました。創建以来十数回の火災に遭いましたが、(中略)。

草創期を語る史料は残念ながら善光寺には残っていません。しかし、発掘史料や史書などから、いにしえの善光寺の姿をうかがい知ることができます。大正十三年と昭和二十七年には境内地から白鳳時代の川原寺様式を持つ瓦が発見され、七世紀後半にはかなりの規模を持つ寺院がこの地に建立されていたことがわかってきました。平安後期・十二世紀後半に編集された『伊呂波字類抄』は、八世紀中頃に善光寺の御本尊が日本最古の靈仏として中央にも知られていたことを示す記事を伝えています。

十一世紀前半は、京の貴族を中心に浄土信仰が盛んになった時期でもありました。こうした浄土教の隆盛とともに、善光寺聖と呼ばれる民間僧が本尊のご分身仏を背負い、縁起を唱導して、全国各地を遍歴しながら民衆の間に善光寺信仰を広めました。(中略)

鎌倉時代に入ると、源頼朝や北条一族は厚く善光寺を信仰し、諸堂の造営や田地の寄進を行いました。善光寺の信仰が広まるにつれ、全国各地に新善光寺が建立され、御本尊の模刻像が多く造られました。現在の前立御本尊はこの鎌倉時代の作です。(中略)

戦国時代に入ると善光寺平では武田信玄と上杉謙信が信濃の覇権を巡り、川中島の合戦を繰り広げました。弘治元年(1555)、武田信玄は御本尊様や多くの什宝、寺僧にいたるまで、善光寺を組織ごと甲府に移しました。その武田家が織田・徳川連合軍に敗れると、御本尊様は織田家・徳川家の祀るところとなり、最後は豊臣秀吉が京都・方広寺の御本尊としてお奉りいたしました。そして、秀吉の死の直前、如来様がその枕元に立たれ、信濃の地に戻りたい旨をお告げになり、それによつて慶長三年(1598)、四十数年ぶりに善光寺にお帰りになりました。

戦乱の時代に巻き込まれ、荒廃を余儀なくされましたが、江戸幕府開府に伴い、徳川家康より寺領千石の寄進を受け、次第に復興を遂げてまいりました。(後略)

戦国時代での善光寺仏の地方流転、行き先については諸説ある。一説には、武田信玄により甲府に移され甲斐善光寺で祀られた。別の説では、善光寺を保護したのは上杉謙信であり、本尊は越後国直江津(現在の上越市)に移され、その寺跡には念寺(浜善光寺)が大本願別院として法燈を伝えている。

本堂(金堂) 国宝(附Ⅱ厨子一基)

建物は「撞木造り」と呼ばれる屋根を持っている。これは

入母屋造りの屋根をTの字に組み合わせた構造で、宝永四年(1707)の再建。高さ約二十七米、間口約二十四米、奥行約五十三米で、国宝に指定されている木造建築の中で三番目に大きいといわれている。

#### ◎甲斐善光寺

浄土宗、山号Ⅱ定額山 院号Ⅱ淨智院 寺号Ⅱ善光寺

本尊Ⅱ善光寺如来、創建年Ⅱ永禄元年(1558)、

開基Ⅱ武田信玄

住所Ⅱ甲府市善光寺三―三十六―一

最寄駅ⅡJR中央線酒折、JR身延線善光寺

#### 甲斐善光寺の歴史

永禄元年(1558)、武田信玄によつて山梨郡板垣郷に創建された。開山は信濃善光寺大本願三十七世の鏡空。

甲斐善光寺ホームページより

「甲斐善光寺の歴史 当山は、開基武田信玄公が、川中島の合戦の折、信濃善光寺の焼失を恐れ、永禄元年(1558)、御本尊善光寺如来をはじめ、諸仏寺宝類を奉遷したことに始まります。

ここ板垣の郷は、善光寺建立の大檀那本田義光公を葬送した地と伝えられ、信濃より大本願上人以下、一山ごとごとくお迎

えいたしました。その後、武田氏滅亡により、御本尊は織田・徳川・豊臣氏を転々といたしましたが、慶長三年(1598)信濃に帰座なさいました。甲府では新たに、前立仏を御本尊と定め、本坊三院十五庵を有する大寺院として浄土宗甲州触頭を勤め、徳川家の位牌所にもなっております」

信玄は信濃侵攻を行い越後の上杉謙信と衝突し、現在の長野市南郊において五次に渡る川中島の戦いを行うが、弘治元年(1559)の第二回合戦では戦火が信濃善光寺に及び、信玄は自分の領国である甲斐へ本尊などを移したといわれ、以後、川中島の戦いの戦火は善光寺方面へ及んでいない。上杉謙信もまた領国の春日山城下に本尊以下を遷しており、善光寺別当栗田氏も武田方と上杉方に分裂している。

信玄が遷した最初の移転先は彌津村(現在の長野県東御市)であったが、その後甲斐国内の法城寺を経て永祿元年(1589)に板垣郷へ移された。この地が移転先選ばれたのは、この付近に信濃善光寺の由来にかかわりのある本田善光についての伝説があるからだといわれており、今でも甲斐善光寺の北一軒ほどの場所に本田善光の墓とされる「善光塚」がある。

板垣郷は近世に板垣村となり、昭和十二年に甲府市善光寺町(現、善光寺三丁目)となる。

#### 御本尊

一光三尊如来像(重要文化財)：銅造鍍金。在銘の一光三尊式善光寺如来像では最古の像といわれ、「建久六年(1195)」「蓮阿」などの銘がある。信濃善光寺の前立仏として、熱田(尾張)の僧、定尊の勧進によつて造立されたと『善光寺縁起』にあるようだ。

像高、阿弥陀百四十七・二寸、観音九十五・五寸、勢至九十五・一寸。中尊の重量は二百四十二匁、善光寺式阿弥陀三尊像としては例外的に大きい等身大の像。

伽藍ほか武田信玄建立の七堂伽藍は、宝暦四年(1754)門前の農家の失火により焼失。

#### 金堂(重要文化財)

現在の金堂(本堂)は寛政八年(1796)に再建されたものである。善光寺建築に特有の撞木造しゅもくぞうとよばれる形式で、正面梁間二十三米、側面桁行三十八米、高さが二十七米と東日本において最大級の木造建築である。

金堂の天井には、日本一の規模を持つ「鳴き龍」がある。この部分のみが吊り天井となっている。江戸の希斎という画家によつて巨大な二匹の龍が描かれていて手をたたくと共鳴がおこる。金堂の下には、「心」の字をかたどる『戒壇廻り』がある。

建築厨子と棟札は重要文化財附に指定されている。

## 山門（重要文化財）

本堂とともに焼失したが明和四年（1766）に上棟供養。現在のは桁行十七米、梁間七米、棟高十五米。両脇には未完成の金剛力士（仁王）像が祀られている。

## 善光寺銅鐘

武田信玄により信濃善光寺より移されたもの。総高二百糎、口径（内側）百三十五・二糎。

## ◎元善光寺

天台宗、山号〓定額山、本尊〓善光寺如来（阿弥陀三尊仏）

住所〓長野県飯田市座光寺2638、

最寄駅〓JR飯田線元善光寺駅

元善光寺と名付けられる前は坐光寺ざこうじ（現在地名として残る）と呼ばれていた。

## 〓元善光寺の由来

元善光寺の縁起は善光寺と同じ、今から約一千五百年前第三十三代推古天皇十年（602）に、本田善光卿によって開かれたという。

善光卿は信州麻績まひの里（現在の飯田市座光寺）の出で、国司

に随したがって都に上り、ある時難波の堀江で一光三尊の如来にめぐりあい、これを背に負って故里に帰り白を浄めて安置し奉った。これがこの寺の創りである。

白はかくしやくとして輝き、御座光の白とよばれて今もこの寺の靈宝となっている。里を座光寺と称するのもこの縁によるものであろう。

四十一年を過ぎ、第三十五代皇極天皇二年（643）、勅令によって本尊は芋井の里に遷された。

今の長野善光寺がそこに始まる。この時、同じ一光三尊仏を造つてこの地に留められ、寺は元善光寺とよばれるようになった。

善光寺の名は本田善光卿の名に基づき、元善光寺の元は本元42の意で、云々（後略）飯田観光協会〓 看板より

また、仏勅によって「毎月半ば十五日間は必ずこの麻績の里に帰りきて衆生を化益せん」というご誓願を残されたとのことで、長野の善光寺と飯田の元善光寺との「両方にお詣りしなければ片詣り」と昔から云われている。

## ◎祖父江善光寺東海別院

山号〓双蓮山そうれんざん 寺号〓善光寺

住所〓愛知県稲沢市祖父江町祖父江南川原五十七〓二

最寄駅〓名鉄尾西線森上駅

「善光寺東海別院縁起」

言伝えによると天正十年(1582)、織田信長・信雄(のぶか)によって善光寺ご本尊如来さまが岐阜より尾張甚目寺(しむくじ)へ御遷座の途中、祖父江付近に立ち寄られたとあり、その場所に明治四十二年・四十三年と蓮田であった境内地に一本の茎から二つの花が咲くという奇瑞を縁として、開基旭住上人(あさひぢゆう)が信州善光寺本坊大勧進より善光寺如来さまを勧請して善光寺東海別院を創立しました。善光寺東海別院は信州善光寺の別院です。・以下略」

善光寺東海別院ホームページより。

善光寺東海別院の本堂は善光寺特有の撞木造り(しゅもく)で間口十四間奥行二十間の総檣造りの大伽藍である。信州善光寺の本堂の約三分の二の大きさである。

### ◎ 関善光寺

天台宗、山号 妙祐山 寺号 宗休寺

住所 岐阜県関市西日吉町三十五

最寄駅 長良川鉄道関駅

「関善光寺の由来」

関善光寺の創建は延享二年(1745)、関の新屋、広瀬新太郎利忠

が祖父母の遺言で祖先の霊を供養する為、草庵を設けたのが始まりと伝えられている。宝暦五年(1755)に竹本院の古跡を現在地に移し、比叡山(天台宗)の智堂大和尚を招き開山し、一建立の大仏殿を建て、祖父母の戒名より山号を妙祐山、寺号を宗休寺、院号を竹本院に改称している。

寛政十年(1798)に信州善光寺大勧進等順大和尚による出開帳がこの地で行われ、その縁で上野輪王寺輪番公寺澄法親王の持仏一光三尊善光寺如来を拝領している。文政元年(1818)、一光三尊善光寺如来を本尊として信州善光寺を横した堂宇が計画され、十年の歳月をかけた文政十年(1827)に竣工している。以来、関善光寺として広く信仰されるようになった。」

### ◎ 岐阜善光寺

真言宗醍醐派、山号 愛護山、寺号 善光寺、院号 安乘院

住所 岐阜市伊奈波通一丁目八

最寄駅 岐阜駅よりバス伊奈波通下車

「岐阜善光寺縁起 (岐阜善光寺パンフレットより)」

戦国時代、甲斐の武田信玄公は信濃善光寺から善光寺如来様を持ち出し、甲府に新善光寺を建立しお祀りしました。信玄公が没すると、織田信長公によって岐阜に迎えられます。本能寺

の変後は、信長公の次男織田信雄公により尾張の甚目寺に、豊臣秀吉公によって京都の方広寺に、徳川家康公により遠江浜松の鴨江寺に移され、そして信濃善光寺の本所にお帰りになったのであります。

信長公時代に善光寺如来様が祀りされていたこの岐阜伊奈波の靈蹟に、信長公の嫡孫織田秀信公は、稲葉善光寺堂を建立し、善光寺如来様の御分身をお祀りされました。それを安乗院と満願寺によって護持されて来たのですが、明治の廃仏毀釈・神仏分離によって伊奈波神社の別当であった満願寺は廃寺となり、その後は安乗院一山でお護りするようになったのです。

今でも善光寺安乗院は、岐阜伊奈波の善光寺として、宗派を超えて岐阜市民に親しまれています。」

### ◎小山善光寺

浄土宗、山号〓南面山、院号〓無量壽院、

寺号〓善光寺、別名〓元善光寺

住所〓大阪府藤井寺市小山一―十六―三十九、

最寄駅〓近鉄南大阪線藤井寺駅

### 縁起

天正年間まで城山古墳の後円部外側に接する小字名、善光

寺屋敷址といわれる位置にあったが、天正年間織田信長の河内小山城攻めの折、小山城と共に戦火をうける。堂舎焼失後、西誉宗珍によって慶長年間（江戸時代初期）になって現在地に移転再建される。

小山善光寺は南面山無量壽院善光寺と称し、本田善光の伝説を持っている。その内容としては、推古天皇の御代、若使主東人本田善光が信州に帰国する途中、浪速の堀江で一光三尊仏を拾ってこれを背負って小山の里の隆聖法師の庵に宿泊した。法師はその仏像を祀らせてほしいと善光に所望したが一体しかないで二人で三日三晩にわたり念仏したところ第三日目に一光三尊仏が二体になったので、隆聖法師はその一体を入手して本尊とし、河内小山に一寺を建立した。本田善光は他の一体を背負って信濃に帰り信濃の善光寺の本尊とした。日本で最初に建立されたので日本最初の善光寺と称するようになった。

### ◎浜善光寺

浄土宗、山号〓不捨山、寺号〓十念寺

正式名称〓信州善光寺大本願別院不捨山光明院十念寺、

別称〓浜の善光寺 本尊〓一光三尊阿弥陀如来、

開基〓伝・行基、創建年〓伝・天平時代

住所〓新潟県上越市五智二―一―一六、

概要

浜善光寺は聖武天皇の天平年間(729～749)に行基が越後下向の折に創建されたと伝えられる。上杉謙信が川中島の戦いの際、信濃国善光寺を武田信玄から守るために越後国に遷した。日本海近くの海岸部にあることから浜善光寺と呼ばれる。十念寺では、今も大本願別院として法燈を伝えている。



◎木戸と枅形

身延線善光寺駅(ガード)に木戸があった。ガードをくぐる とすぐに最初の「枅形」となり左折。四十米程で右に直角に進み、直進一軒で次の枅形がある。枅形を左折した先で右折する手前左側に尊躰寺がある。

◎石川家住宅

江戸時代から金物屋や糸繭問屋などを営み、屋号を「河内屋」と称した旧家で、現在は住宅・倉座敷・文庫倉・門・塀から成る。倉座敷が明治五年(1872)の上棟のほかは大正初期の建築であ



るが、塗り箆め土蔵造りの建物は、屋敷の景観とともに江戸時代の形態を偲ばれる。塀の一部はくりぬかれ、道祖神が祀られている。

◎尊躰寺

功德山深草院尊躰寺(浄土宗)は、武田信虎が古府中の緑町(武田四丁目)に建てたもので、武田氏が滅亡し、徳川家康が入国した際、宿舎にあてた寺だという。武田信玄の二男海野信親(信玄正室・三条の方の子武田本家の正当な血を受け継いでいるが、盲目であった)の子道快(武田信道)はこの寺で家康に拝謁している。現在地に移ったのは浅野氏が甲府城を築城した文禄年間(1592～1596)である。境内には、大久保長安(甲州街道を歩く【上】43頁を参照)、俳人山口素堂(注1)、甲府学問所



(徽典館) 教授富田武陵 (注2) らの墓がある。

(注1) 山口素堂 II 「目には青葉 山ほととぎす 初鯉」は彼の句。

(注2) 富田武陵 (1742 ~ 1812) II 江戸住まいの旗本であったが、他人の罪に連座して甲府勝手小普請に落とされた。寛政八年 (1796) 頃、時の甲府勤番支配近藤政明は甲府学問所を創設し、学問に優れた武陵を教授に任じて勤番の子弟を教育した。この学問所はのちに徽典館と命名された。現在の山梨大学教育学部の前身である。また武陵は『甲斐国志』の資料収集にも貢献した。

◎新聞発祥の地碑

N T T 甲府支店の前に新聞発祥の地碑がある。現存する我が国最古の新聞は山梨日日新聞で、峡中新聞として明治五年

(1872) 七月一日この地で創刊した。この碑は創刊百周年を記念して昭和四十七年に建てられた。

◎甲府柳町宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠二十一軒、総家数二百九軒  
人口九百五人 (男四百八十六人、女四百十九人)、  
宿場の長さ四町四十七間

甲府城を中心とする新しい城下町は浅野氏時代に設定され、南北二区からなっている。北区が古府中 (躑躅ヶ崎を「上府中」、「古府中」といった) の地で旧城下町を手直したものであり、南区はまったく新たに形成した。城の南東部を商工業の中心と定め、旧城下の町を多く移した。

江戸時代の甲州街道は城屋町（現・城東町）から入り、城南を通る道筋となった。江戸時代にはこの宿を「下府中」といった。「甲府柳町宿」とは宿の中ほどにある柳町に問屋場などの機能が集約されていたから付けられた名である。『宿村大概帳』によると甲府柳町宿は城屋町に始まって、和田平町・下一条町・上一条町・金ノ手町・柳町・工町・八日町・片羽町・西青沼町の十町からなっていた。現在の城東五丁目から丸の内三丁目目までである。『甲府略史』によると、本陣は藤井屋庄太郎、脇本陣は佐渡屋幸三郎で柳町二丁目東側と記されている。NTT甲府支店西交差点を左折した辺り。

◇歩道橋を渡り、52号線を進む。



◎旧泉町の道標

相生歩道橋の先の丸の内郵便局東交差点の先の左手に、「西しんしうみち 南みのぶみち」の道標がある。

◎荒川橋と貢川くがわ橋

荒川はかつて四月から九月まで船渡し、十月から三月までは飯橋を架けて通っていた。荒川と貢川は両橋のすぐ下流で合流している。



◎サイカチの木

貢川から約二百五十米で左に曲がるあたりに、高札場があった。また、甲府市の天然記念物「石田のサイカチ」の木が二本ある。樹齢三百年余という。

◇今回予定の県立美術館まで歩き、美術館見学は次回に譲り、ここからバスで甲府駅に戻る。



◇甲府駅外側を周り舞鶴城公園の正面入口から入る。ボランティアの説明員に案内してもらい。城主不在の期間が長かったお城と聞く。



### ◎甲府城跡（舞鶴城公園）

この地は、いちじょうこやま一条小山とよばれた独立丘陵だった所で、十二世紀末、甲斐源氏の一条次郎忠頼が居館を構えた所である。その後一蓮寺となり、門前町も発達した。武田氏滅亡後、甲斐国を徳川家康（1542～1616）は、領国経営のため、この一条小山の地に新しい城の建設を計画した。天正十一年（1583）、城代の平岩親吉により起工されたが、その後中断され、豊臣秀吉の小田原攻めにより北条氏滅亡後には、家康自身が関東へ移転を命ぜられた。豊臣秀吉支配下の甲斐国領主は豊臣秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子と変わった。加藤光泰は築城を再開したが、秀吉の朝鮮出兵に従軍して朝鮮で没した。

次の浅野長政・幸長父子は、一蓮寺を城南（遊亀公園あたり）へ移すなど積極的に築城工事をすすめ、慶長五年（1600）幸長



が紀州国和歌山（三十七万六千石）へ転封するころまでにはほぼ完成していたと思われる。関ヶ原の戦い（1600年）後、甲斐国は徳川氏の直轄領となり、以来義直（のち尾張家）、忠長（三代将軍家光の弟）、綱重（家光の二男）、綱豊（綱重の子、六代将軍家宣）と徳川一族が城主となった。宝永元年（1704）に綱豊が六代将軍家宣になると、柳沢吉保が城主となった。甲斐国は柳沢吉保の先祖の地であったが、当時幕閣に重きをなしていたので入城することはなかった。しかし、甲府城修築には力を入れ、建物を増築して大名の本拠にふさわしい姿に改め、城下町を整備して多数の家臣を住ませた。吉保が隠居すると、子の吉里が甲斐守となり、甲州最後の大名として藩政にあたった。享保九年（1724）、吉里が大和郡山に転封後は甲斐一国が天領となり、甲府勤番の支配下に置かれ、明治に至る。城は享保十二



年（1727）の大火で焼失。明治六年（1873）に廃城となった。昔は鶴の舞う姿に似ているので「舞鶴城」ともいわれ、現在は城跡が「舞鶴城公園」と名付けられている。



第十五回 実施日 平成二十五年一月十七日（木）

山梨県県立美術館～韮崎駅 約十・五軒 累計約百五十二軒  
宿＝韮崎宿

★集合場所・時間

① JR立川駅五番ホーム NEWDAYS 辺り午前6時35分

（始発）立川 6:46 〓 八王子 6:57 〓 高尾 7:04 〓 〓 8:38 甲府

甲府駅6番のりば8:51バスー8:10山梨県県立美術館

② 立川、八王子、高尾いづれから乗っても良い。5号車あたりに乗る。③ ※特急利用の場合 八王子→29スーパーあずさ

1号 〓 〓 8:28 甲府（甲府駅6番バス停で合流）

【第十五回甲州道中行程】

甲府駅⇨バス⇨県立美術館⇨日蓮の遠忌碑⇨竜王新町下宿道  
 祖神場（称念寺お休み井戸）（慈照寺）⇨赤坂⇨赤坂供養  
 塔⇨諏訪神社⇨三軒茶屋⇨赤坂道標⇨下今井道標⇨下今井寺町  
 蔵屋敷群⇨自性院・明和の石畳⇨煉瓦のトンネル⇨泣石（光  
 照寺薬師堂）⇨下志田の道祖神⇨三界萬霊塔⇨船形神社の石  
 鳥居⇨芭蕉句碑（妙善寺）（一橋陣屋跡）⇨金剛地道標・  
 二十三夜塔（姫宮神社・鏡石）（船山河岸の碑）⇨葦崎宿  
 本陣跡の碑⇨一橋陣屋跡⇨馬つなぎ石⇨追分の道標⇨雲岸寺の  
 穴観音⇨葦崎駅

◇甲府駅で武田信玄公の銅像を見て、六番乗り場から県立美術  
 館までバスに乗る。



◎県立美術館

昭和五十三年(1978)に開館、敷地三万八千平米の広さを誇る。  
 正面の庭にはヘンリームーアの「四つに分かれた横たわる人  
 体」が展示されている。この美術館の収蔵作品で最も充実した  
 コレクションのひとつにフランス十九世紀バルビゾン派の巨  
 匠ミレーの作品がある。「ダフニスとクロエ」「種をまく人」「夕  
 暮れに羊を連れ帰る羊飼ひ」など四十点余りの作品が収蔵され  
 ている。また、ミレーと同時代のコロ、クールベ、デュプレ、  
 トロワイヨン、ドビーニ、ターナーらの作品もある。

◇この時期三月三日まで、ミレーのコレクション70点が「挙公  
 開されている。これは開館以来初めてという。「種をまく人」「夕  
 暮れに羊を連れ帰る羊飼ひ」の油彩画二点を東京銀座の画廊を





山梨県立美術館前にて 第十五回参加者記念撮影  
 左から【竹島、宇山、伊藤、八木、中島、折本、三浦、相原、嶋崎、中田、(前北)】

通じ、計一億八千二百万円で落札したその翌年に開館した。

初代館長（美術史家千沢楨治）の顧問時代にミレーを軸にパルビゾン派作品を収集する方針が決定されて作品が集められたとこう。（2013/1/24 読売新聞より）

◇一行十一人が当美術館を見学して、残雪の街道歩きがスタートになる。



◎日蓮の遠忌碑

甲斐市に入って中央自動車道をくぐり、五十米で左側に土蔵の陰に日蓮の三百年と五百五十年の遠忌碑がある。遠忌とは、宗祖などの五十年忌以後、五十年ごとにする法会ほうえ。

◎竜王新町下宿道祖神場

竜王新町交差点で国道52号と分かれ右に入るとその六十米程先右に丸石の道祖神がある。

ここを竜王新町下宿道祖神場といい、三つの古跡がある。説明板には、

古跡保存標識

一、名称「竜王新町下宿道祖神場」

(一) 道祖神、丸石神体径四十五糎

(銘) 衢神、

文政七申極月氏子中

(二) 白檀古樹(種別大木) 目通り百三十糎

樹齡約二百年、主幹奇形

(三) 古井戸、明治初年掘削、コンクリート巻、

杵径九十六糎近辺共同井戸、現不使用

二、所在地 竜王町竜王新町元免許三二五―二番地(地積六坪)  
 三、由来 ここは江戸時代村人の互助的な集会協議実行の場所として地域発展の基点となった「寄り合い場」である。村の道路に河川、農産、慶弔交際または、盆、正月、祭り、相撲大会などすべてのことがここで民主的に協議されたものである。

ここ往時五十坪の地積であったが大部分が道路用地となった



とある。

◎称念寺のお休み井戸

正式名称は「くり抜き石杵井戸」で、甲斐市の指定文化財。



のでこの由緒ある地積を保存すべく、昭和八年小菅貞三氏の主唱により大蔵省から払下げ、十人の共有地となっている。以上の理由により、町内にも他に例の無い地域発展の基点であった貴重な古跡であることからこれを将来に保存すべく「保存標識」を設置するものである。

竜王町竜王新町五区

平成二年十一月

現存するのは極わずかで、上水道が引かれるまで付近の生活用水として使われ、また、甲州街道の旅人が赤坂を控え、また下つてきて喉を潤したことから「お休み井戸」と呼ばれていた。

◎慈照寺

古くは真言宗寺院であったが、延徳元年(1489)、真翁宗見禅師によって禅寺として開創した。

開基は永祿四年(1561)九月に信州川中島で戦死した諸角豊後守昌清で、その古碑を祀つてある。

山号を「有富山」というように富士の霊峰と相對しており、眺望が良い境内には法堂、庫裏、衆寮、開山堂、鐘樓、塀など伽藍が整っている。武田氏との関係も深く、多くの古文書が保存されている。



惣門を入り、石段を登ったところに立つ山門は桁行三間、梁間三間で十二脚二重入母屋造り銅版葺きの荘厳な建築。寛永六年(1629)に建立され、楼上の五百羅漢像は子授け子育て羅漢として広く信仰を集めている。また、墓股、木鼻、実肘木<sup>さねひじき</sup>などの形式手法が桃山時代の特徴を伝えている。

法堂は桁行十二間、梁間八間の単層寄棟造り銅版葺きの壮大な建物で、禅宗の法堂形式を完備し、山門同様桃山時代の様式を伝えている。両建築物とも県の文化財に指定されている貴重な建築物である。「竜王」の地名の由来になっている井戸屋(竜王水)や、寺の繁栄に尽くした猫を供養して建てたという「猫石」などを境内で見ることができる。



◇街道から少し外れた慈照寺から街道に戻り、緩やかな長い坂道の途中に赤坂供養塔がある。

### ◎赤坂供養塔

諏訪神社の手前右側に大きな名号碑「赤坂供養塔」がある。説明板には、

「甲斐市指定有形民俗文化財

赤坂供養塔

指 定 昭和五十二年六月二十五日

所在地 甲斐市竜王新町氏神前一四八九番地

表面を平坦に加工した巨大な自然石で造られた名号塔で阿弥陀如来の名をたたえる『南無阿弥陀仏』を六字名号または名号と呼び、この塔は名号を本尊として供養のために建立されたもの

であり、念仏講中による信仰的な表現である。供養塔は高さ四・三米、幅一・二二米、厚さ〇・三八米の長大な石材を用いて台石上に建てたもので、中央に草書体



で『南無阿弥陀仏』と大書した名号を刻み、左下には一蓮寺法阿本暁上人の署名、裏面には念仏講中の名や竜王新町（竜王町）外北山筋村々に住む三八名の建立者の名前が刻まれる。一蓮寺は甲斐市太田町にある時宗の名刹で、染筆の法阿本暁上人は第五六世の住職であり、この草書名号は「遍流名号」と呼ばれる書式である。

建立年代は、『記録によれば安政年間（1854～59）で『安政年中竜王新町赤坂供養塔建立』と記され、また北山筋村々の信者で組織された念仏講中が、無縁舎供養のために建立したことが刻名によって知られる。当時の庶民の間に深く浸透した念仏講の広まりと江戸時代末期における信仰の隆盛を示す民俗資料である。

甲斐市教育委員会

当初は赤坂道沿い西側に建てられたが、明治六年(1873)ころに竜王川の石橋に転用され、その後、明治十九年に元の場所に再建。さらに明治二十四年に現在地に移建、保存された。

◎諏訪神社

諏訪大社から勧請を受けた諏訪神社の数は全国で二千六百十六社で、竜王の諏訪神社もその一つ。村々の小さな諏訪神社を入れると二万五千社という。諏訪大社では六年に一度、御柱と呼ばれる四本の杭を立てる御柱祭が行われるが、全国の諏訪神社でも同様に行われる。

◇赤坂途中の諏訪神社に到着する。広場を利用して暫く休憩を取る。水分や糖分を補給して出発する。



◎三軒茶屋・赤坂道標

赤坂を登りきると広い大地で、この台地にはいくつかの工場や、病院、ホテルなどがあるが、昔は三軒茶屋と呼ばれたところで『分間延絵図』には高札場と家が七軒描かれている。道の右下には小さな鳥居を備えた道祖神や「赤坂の道標」がおかれている。道の下に水神が祀られており、「赤坂の道標」はその小



堂の中に墓石などとともに収められている。合掌像の両脇に「江戸道 左五ヶ村道」とある。

◎下今井道標

下今井集落の中程の鍵の手のような曲がり角に新旧二基の道標がある。一基は庚申塔と兼ねている。ここは、市川・身延・

駿河への道と甲州街道との分岐点である。古い方は元禄六年(1693)の建立で、正面に「従是左甲□」、右面に「従是右市□」とあり、新しい方は正面に「庚申 右市川駿□ 左甲府江□」、右に「弘化三丙午十二月吉□」とある。一番下の字は地面に埋もれていて、甲府、市川、駿河、江戸、吉日と思われる。



◎下今井寺町蔵屋敷群

下今井の町並みは落ち着いたたたずまいで、蔵のある家が多く、大きな門構えのナマコ壁の家の 興石氏宅や門から玄関までの前庭が美しい水上氏宅がある。



◎自性院・明和の石畳

天真山自性院の石畳は明和二年(1765)のもの。また、参道の入口に球形の石を二段重ねた「道祖神」がある。  
◇今回の昼食は自性院内(浄土)の東屋で丸椅子を使わせて頂き、





膝を付き合わせての食事になった。雪の中じっとしていると寒さを感じるため、本堂をお参りをして機<sup>えど</sup>土に戻りすぐ出発する。

◎煉瓦のトンネル

明治期に造られたと思われる煉瓦のトンネル。トンネルの手



前に「二段重ねの道祖神」がある。

◇レンガのトンネルを潜り、線路沿いにしばらく歩くと泣石が右側に現れる。

◎泣石

説明板には、

「下今井字鳴石のJR中央線と県道との間にあり、現在地より約百米南東にあった。高さ約三・八米、幅約二・七米、奥行約三・七米で中央部から水が流れ出ていたが、鉄道の開通により水脈が絶たれてしまった。天正十年(1582)三月二日、高遠城が落城すると武田勝頼一行は完成したばかりの新府蒔崎城に自ら火を放ち、岩殿城に向けて落ちのびて行った。その途中、勝頼夫人



はこの地で燃える新府葺崎城を振り返り涙を流したという言葉伝  
えがある。  
とある。

甲斐市教育委員会

◎光照寺薬師堂

塩崎駅の先、塩崎駐在所前の信号を右折、踏切を渡ったところ  
に「光照寺薬師堂（国重文）」がある。光照寺は薬師如来縁起  
によれば、永正七年（1510）、武田信虎によって郡下団子新居か  
ら岩森村坊沢に移され、百軒の坊中を建立し、坊中百軒と呼ば  
れるほど隆昌をきわめた。

天正十年（1582）、新府落城で織田・徳川連合軍が乱入した際、  
信長の臣川尻与兵衛らによって全山ごとく兵火にかかった  
が、如来の威力によってなかこの堂だけが危うくも難を免れ



た。その後現在の地山本に移築された。『甲斐国志』には「薬  
師堂あり、拝殿飛騨工匠本州にて椽（たな種）造りの最初と伝えた  
り」とあり、天井の四方にむかつてかけられた種木がきわめて  
美しい室町時代末期の様式が残されている。堂は方三間の小宇  
で宝形造、阿弥陀堂の形をあらわす簡素なものである。

昭和四十四年（1969）に解体修理をし復元された。なお堂内  
には宋様の一間厨子（国重文）があり、薬師如来を安置している。  
薬師堂とほぼ同期のものと考えられる。

◎下志田の道祖神・三界萬霊塔

岩下歯科医院の先、右手に数個の丸石が祀られ、「下志田の道  
祖神」（台座に「文化十五（1819） 戊寅夏建氏子中」）や、寛政  
五年（1793）建立の「三界万霊塔」がある。二十二夜塔もある。



◎船形神社の石鳥居

双葉西小学校の先右手に丸石3個の道祖神（寛政二庚戌年十一月日）があり、その奥に柱が太く丈が低い石の明神鳥居「船形神社の石鳥居」がある。船形神社は『甲斐国志』によると、「諏訪神社の南の田の中に船塚という古墳があつて、その上に神社が建てられた。石室を覆う大きな石が船形をしていたため、船形神社と呼ばれるようになった」とある。この船形石は現在も双葉町志田字砂間に残っている。往古は三月第二の酉の日、六月十五日には神輿を古社の地船塚に遷して祀つたとある。

この「石鳥居」は総高二・四二米、幅二・三六米、柱の直径四十四糎と大変太く、柱割は十九%で葎崎の勝手神社の鳥居（★注）の柱割二十五%と比べるとスマートだが貫下を低めにし

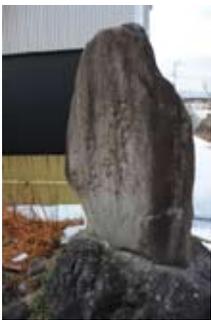


あるから安定感に富んでいる。柱は少々すぼり（エンタシス）と、ころび（傾き）があり、頭部で輪切りの台輪形に削り残し、笠木にはわずかな反り増しがみられる。島木とともに襷に切られている。材質は安山岩で柱に「応永四（397）丁丑四月日立」とあり、金閣寺創建の年と同じで室町期の貴重な遺構である。（★注）勝手神社の鳥居は高さ一・七二米、柱間一・四米、柱の直径三十五糎で、柱割は二十五%と非常に太い柱）

◎芭蕉句碑

六反川の手前、双葉電気の手前を右に入ると橋の手前に芭蕉の句碑「昼みれば首すじ赤き蛭かな」がある。六反川については『宿村大概帳』に「宇都谷村地内字金川橋辺にて五月初旬比年々蛭合戦有之候処、近年度々出水いたし候故歟無之候由、此川筋夏之内蛭多く集候て光曜川水に移り、水色黄金を散らしたるに似候故か、川之名を金川と唱候由」とあるように昔は六反川のことを「金川」といい、蛭の名所であったことがわかる。この辺りには立場茶屋があった。

六反川を渡り、右に約二百米入ったところに「妙善寺」があり、その反対側の水田に「一橋陣屋跡」の標柱が立っている。



◎一橋陣屋跡

双葉町指定史跡。説明板によると、ここは延享三年(1746)、徳川吉宗が四男一橋宗尹に十万石の領地を与えたうちの、巨摩



郡三万石余りの所領支配のために置かれた陣屋である。

宝暦三年(1753)に葦崎へ移るまでの七年間存続した。

◎妙善寺

臨済宗妙心寺派「天香山妙善寺」は鎌倉時代末期に傑翁是英禪師が開創した円覚寺派の寺で最初の寺名は不明。五世覚翁禪師の代に妙心寺派に変わった。当寺の保護者であった阿部加賀守勝宝の法名が妙善寺殿といったことから、寺名を妙善寺に改



めた。境内地の一部は加賀守の居館跡にもなっている。また、武田勝頼に従って天目山田野で殉死した阿部加賀守勝宝及びその二人の子の墓がある。家臣の雨宮新介は、主人勝宝の首級を天目山よりひそかに持ち帰り、当地に葬った。三基の宝篋印塔は中央が勝宝、左が長男掃部介貞直、右が右衛門尉道忠。子二人とも高遠城で殉死している。勝宝は勝頼のお守役で、勝頼の代に重臣となり「むかで隊」と呼ばれた伝令役「使番十二人衆」の一人だった。宝名を「妙善寺殿香山道義大禪定門」という。

◎金剛地道標・二十三夜塔

道標には「向左滝沢駒沢二通ス」とある。そばに二基の二十三夜塔があり、小さい方に「天保七(1836)丙申年二月吉日建立」の銘がある。



ながった。

このとき釜無川、  
笛吹川の合流点  
近くに青柳・鰍沢・  
黒沢の河岸が造ら  
れ、笛吹川沿いの  
石和宿、釜無川沿  
いの葦崎宿まで「近  
番船」と呼ばれる

◎ 船山河岸の碑と姫宮神社・鏡石

慶長十二年(1607)、徳川家康の命により京都の豪商  
角倉了以すみのくわりのようい(1554～1614)によつて、駿河の岩淵河岸から甲州  
の鰍沢河岸まで富士川の開削が行われ、甲斐と駿河が舟運でつ



船が通じるようになる。天保六年(1835)には大石を運んで河  
岸を築き、富士川の舟運はここまで延長された。以来、この道  
は江戸への年貢米を駿河へ、塩や魚などを信州方面へ運ぶ中継  
点としての役割を果たし、交易で栄えてきた。

「船山」の名は幅二十米、長さ三百七十五米ほどの船をふせ  
たような形をした丘陵から付けられたもので、現在この丘陵は  
船山公園になっている。公園内の姫宮神社には「鏡石」という  
直径七十六種の中央をくり抜いた円形の石がある。これは富士  
講の信者たちが富士山遥拝所として宝暦七年(1757)に造立し  
たもの。また、駿州から鰍沢を経て来た塩や海産物を陸揚げし、  
年貢米などを積み出した「船山河岸の碑」が立つ。

### ◎ 葦崎宿

本陣一軒、旅籠十七軒、総家数二百三十七軒  
人口千四百四十二人（男五百七十四人、女五百六十八人）、  
宿場の長さ十二町

甲州街道に佐久往還と駿信往還が交わる交通の要衝で、人馬の往来の激しい宿場として栄えた。

特に馬で荷物を運ぶ人たちが活用する中馬宿として商業が発達していた。今も何軒かの家並みが鋸の歯のように街道に対して斜めになっている。

### ◎ 鰍沢横丁

下宿交差点の辺りから葦崎宿に入るが、交差点の細い小径があり、「鰍沢横丁」の標柱が立っている。この横丁の道が「みのお道（駿州江之脇道）」で道の先、釜無川の堤防が「船山河岸」である。



### ◎ 一橋陣屋跡の碑

本陣跡の裏手の「本町ふれあい公園」の入口に「一橋陣屋跡



の碑」と説明板があり、それには「一橋家は八代將軍吉宗の第四子宗尹がおこしており、延享三年(1746)九月に本県の治領地三万四千石余りが与えられた。陣屋は当初双葉町宇津谷(村)に構えていたが、宝暦三年(1753)この地に陣屋を移した。その後寛政六年(1794)に静岡県榛原郡相良町にところがえになったので陣屋は廃され、再び幕府領となった。以下略」とある。

### ◎ 葦崎宿本陣跡の碑

本町二信号の手前、千野眼科医院の前に「葦崎宿本陣跡の碑」がある。石柱の横の説明には

「本陣とは江戸時代、大名や幕府役人に備えた宿舎をいう。甲



州街道は伝馬制（当宿は人足二十五人、馬二十五頭を常備して、幕府役人や諸荷物を次の宿駅まで順送りする）により、問屋場を設け運営に当らせた。葦崎宿は、諸大名の通過はあったが、日程の関係で宿泊はごくわずかで、本陣は問屋が兼務した趾である。平成五年二月吉日 葦崎地区公民館建立とある。

◎馬つなぎ石

本町第二交差点の上田商店の前の郵便ポストの後ろに「馬つなぎ石」がある。

◎追分の道標

本町の交差点が甲州街道と佐久往還の分岐点、追分である。

かつてここには道標（元禄八年（1699）乙亥八月左信州すわ上みち、右信州さくの郡みち）があったが、現在は平和観音下の市民会館の前にある。

◎雲岸寺の穴観音

平和観音が建つ七里岩末端の急崖下にある曹洞宗の寺院で山号は仏窟山、窟観音の寺として親しまれている。本尊は薬師如来。



寺域の七里岩急崖に窟屋観音がある。伝説によると僧空海が観音石仏を洞窟に安置し、住民が観音のために堂を建立したといわれ、寛文七年（1667）から千体仏を備え翌年開眼したと伝えられる。

雲岸寺の案内板には

「仏窟山 雲岸寺

宗派及び本山 曹洞宗 福井県永平寺 神奈川県総持寺

本尊薬師如来 合祀仏聖観音菩薩 千体地藏尊 不動明王

弘法大師



由緒、雲岸寺は、室町時代の寛正五年(1464)二月、弘法大師遊化の遺跡として遠近に著名な霊場窟観音を守るべく大師の法流をくむ祖慶和尚が開祖した真言宗の道場で、慶長八年(1603)三月徳川家康は黒印地一石四斗四升余と屋敷百五坪を寄せて寺を保護したのち寺運がやや衰えた元和元年(1615)甲府

市塚原町恵連院六世の国州天越和尚が中興して曹洞宗に改めた。境内の七里岩洞窟と懸崖造りの窟観音堂は弘法大師の開基で多くの仏像を安置していた。現在の本堂庫裏は昭和五十八年十二月に三年の歳月を要して完成した。

山梨県韮崎市」

と記されている。

### 窟観音

仏窟山雲岸寺の境内、本堂の横には、七里岩(八ヶ岳火砕流跡)の南端崖面を削り貫かれて造られた石窟がある。そこには岩屋があり、内部に空海が開眼したという聖観音、弘法大師像、寛文八年(1668)に開眼した千体地藏等が安置され、更に窟内には多数石仏が安置されている。



◇観音様に見下ろされて、葦崎駅に到着する。

第十六回 実施日 平成二十五年(2013)二月二十一日(木)

葦崎駅～牧原 約十二・八軒 累計 約百六十五軒  
宿 葦崎宿

★集合場所・時刻

- ① JR 立川駅五番線八王子寄り NEW DAYS 付近午前六時三十分  
(入線 6:35 頃) 立川 6:46 甲府行 八王子 6:57 高尾 7:04 〓  
8:38 甲府(八王子、高尾からの乗車は混んでいて座れなし) 乗  
り継ぎ) 甲府三番線 8:53 〓 9:06 葦崎  
② 八王子 8:03 あずや三号 〓 9:18 葦崎 ①に合流(これに乗  
車する場合は事前に連絡をして下さい)

【第十六回甲州道中行程】

葦崎駅～小林一三翁生家跡～上宿の水神塔～十六石～水難供  
養塔～道標～七里岩～宮方家葺き門～神明宮・常夜灯～祖母石  
の赤地藏～九頭竜大神五石碑～姥婆石～桐沢橋～清哲町案内図  
～徳島堰～(円井逆断層)～下円井集落～常夜灯～サイホン徳  
水不息～内藤家・明治天皇円野小休所碑～上円井～小武川橋～  
一里塚碑(甲府より六里)～牧原バス停

帰路 牧の原～(タクシー)～日野春駅 14:55 〓 17:15 高  
尾駅(注)①日野春駅ではスイカ、パスモは使えません。②ジパ  
ング(大人の休日)を利用の際は「日野春」往復を購入が有利。

◇天気に恵まれたが、寒く残雪多い葦崎駅に降り立つ。朝早い  
のは苦手と浅見さんが一人特急を利用して合流し、十二名の旅  
人全員が揃う。



ホームのガードを潜り、観音様に見守られ、七里岩ラインを  
を歩き始めるとすぐに小林一三翁生家跡に着く。現在は葦崎文  
化村という資料館になっている。



がある。この辺りは明治三十一年九月に起きた風水害の決壊箇所であり、町内は濁流にのまれ、葦崎は大きな被害を受けた。

◎小林一三翁生家跡

小林一三【明治六年(1873)一月三日〜昭和三十二年(1957)一月二十五日】は山梨県巨摩郡河原部村(現 葦崎市)の商家に生まれ、生まれてすぐ母が死去、父とも生き別れたため、おじ夫婦に引き取られた。慶応義塾大学を卒業、三井銀行に勤務。その後「箕面有馬電気軌道(現阪急)」の経営にかかわり、阪急電鉄、宝塚歌劇団、阪急百貨店、阪急ブレーブス、東宝等の阪急東宝グループの創業者。戦前、商工大臣、国務大臣を歴任。

◎上宿の水神塔

石祠には「九頭竜大権現・安政四巳五月吉日 講中」とある。その傍に明治三十二年(1899)七月一日に建てられた「水神宮碑」



◎十六石

説明板によると、

「武田信玄公が治水に力を入れたのは有名だが、まだ晴信といわれた天文十二・三年頃年々荒れる釜無川の水害から河原部村(現

葦崎町)を守るため、今の一ツ谷に治水工事を行った。

その堤防の根固めに並べ据えた巨大な石が十六石で、その後徳川時代になって今の上宿から下宿まで人家が次第に集まり葦崎は宿場町として栄えるようになったと言われている。」とある。

### ◎水難供養塔

昭和三十四年(1959)八月十四日に襲った台風七号による水害供養塔。この近辺は、かつて釜無川の氾濫が続き、多くの犠牲者が出た。水難供養に関する石造物の多さが、信玄の時代から水害に悩まされた歴史を物語っている。

### ◎道標

道標には、「向 右葦崎町ヲ経テ甲府方面ニ至ル 左圓井村ヲ経テ台ヶ原方面ニ至ル」とある。



### ◎七里岩

七里岩は、八ヶ岳の山体崩壊期の葦崎岩屑流がんせつりゅうが、釜無川と塩川とによって削りだされたもの。葦崎から県境の白洲町付近まで、釜無川の左岸に沿って、高さ四十〜百五十米余りにも達す



る切り立った崖がおよそ七里(約二十八軒)も続いている。古くから七里岩と呼ばれている。

◇この七里岩は葦崎の雲岸寺の窟観音から始まり、観

音様が建っていたり、激しい岩肌を露出したり、樹木が繁る山であったりとこの街道の右側にいろいろな形で現れる。

### 第十六回甲州街道ウオーク参考資料

(注) 葦崎岩屑流について

【やまかいの四季NO.14甲府一高理科教室発行】より

「八ヶ岳火山 葦崎岩屑流は盆地を越えた

…甲府盆地を覆い尽くした巨大岩屑流を追って」

甲府から、国道20号線を北上して、諏訪方面に向かうと、葦崎から県境の白州町付近まで、釜無川の左岸に沿って、高さ四十〜百五十米余りにも達する切り立った崖が延々と続いている。この崖は、およそ七里(約二十八軒)にも及んでいるので、古

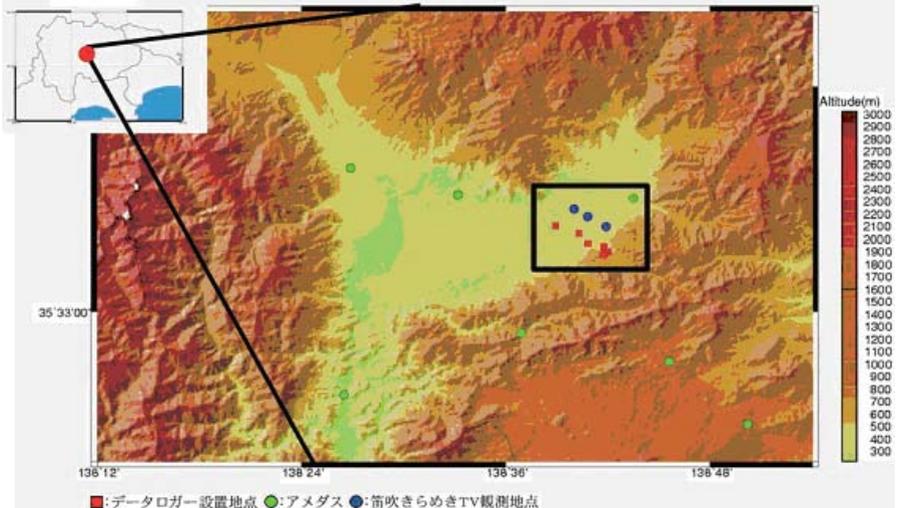
くから七里岩と呼ばれて、峡北地域を特徴づける代表的な地質的景観になっている。しかし、甲府盆地周辺の地質を詳しく調べてみると、この七里岩を形作っている「にらさきかんせつりゅう葎崎岩屑流」(古くは葎崎泥流と言った)は、七里岩の末端にあたる葎崎から直線距離にして二十軒余りも離れた、甲府盆地の反対側にあたる曾根丘陵にも分布している。

盆地の内部は河川の浸食などによって失われてしまったものの、かつて「葎崎岩屑流」は甲府盆地の全域を覆い尽くしていたことが分かる。七里岩を形作っている「葎崎岩屑流」とは、どのようなものなのだろうか。また、どのような活動によって生み出されたのだろうか。「葎崎岩屑流」の謎に迫ってみた。

衛星写真で甲府盆地を見ると、逆三角形をした甲府盆地の北西部に、長く舌のように延びている七里岩の様子がよく分かる。七里岩は、西側が釜無川によって削られて高い崖になっているばかりでなく、東側も塩川によって削られた高い崖になっているため、中央線の日野春駅辺りから南では、幅二軒余りの台地状になって、葎崎駅付近まで連なり、このような景観を作っている。

この台地上には、穴山駅の近くにある能見山のうけんやまをはじめとして、百余りの小高い丘(流れ山)があり、武田勝頼が織田信長の甲斐侵攻に備えて、急ぎ築城した「新府城」も、このような流れ

## Yamanashi weather observation points



山を利用して造られていた。

七里岩台地は、日野春より北では、西の釜無川側には、高い崖が続いているものの、東側には、台地を穿つ程の大きな河川がなく、逆三角形に広がって、広大な八ヶ岳の山麓を形成している。

七里岩を造っているのは「にちさきがしせつりやう葦崎岩屑流」と呼ばれる岩石で、近づいて観察すると、大きささまざまの大きさの角張った礫が砂や粘土で固められてできていることが分かる。岩石を叩いてみると、砂や粘土の部分は予想外に柔らかく、この岩石が比較的最近出来たことが伺える。更に詳しく「葦崎岩屑流」の内部を調べてみると、流れ山と呼ばれている小山の内部には、かつて火山の山体を形成していたと考えられる、溶岩や、凝灰角礫岩（火山灰が火山礫を固めて出来た岩石）などから出来ている巨大な岩塊がブロック状に含まれていることも分かる。これらのことから、七里岩を造っている「葦崎岩屑流」は、八ヶ岳の山体が、噴火やそれに伴う地震により大規模に崩壊して多量の岩、砂、泥が余り水を含まずに、山腹の巨木をなぎ倒し、高速で一気に流れ落ちて形成されたものと考えられている。

この岩屑流は、今から二十五万〜二十万年前に、火山活動の最盛期を迎えて、現在の八ヶ岳連峰の最高峰、赤岳の西にある阿

弥陀岳付近を中心に数度の噴火を繰り返し、三千四百米程度の高さに達していた成層火山（富士山のような外観の火山）の古阿弥陀岳が、アメリカのセントヘレンズ火山や磐梯山のように大規模な山体崩壊を起こして発生している。この岩屑流は、甲府盆地を覆い尽くして広がり、御坂山地の麓に広がる曾根丘陵にぶつかって止まるまで、五十軒以上の距離を流れ下った。

今からおよそ二十万年前に発生したこの岩屑流の厚さは、最大で二百米にも達し、全体積は十立方メートルと、日本で発生した岩屑流の中では最大規模のもので、この岩屑流によって二百米もある巨大な岩石の塊が運ばれ、流れ山が形成された。

この大崩壊により、古阿弥陀岳の山頂は吹き飛ばされて、標高は一気に千五百米ほど低くなり、後には巨大な馬蹄形をしたカルデラが形成されたと考えられている。

甲府盆地は、八ヶ岳を起源とする「葦崎岩屑流」以外にも、茅ヶ岳や黒富士火山に起源を持つ「火砕流」や「泥流」によって、何度となく覆い尽くされた。

黒富士火山、甲府盆地付近の火山について

黒富士は標高千六百三十五米の山で、曲岳、八丁峰、おにがわやま鬼頼山、太刀岡山、升形山や茅ヶ岳、金ヶ岳などを合わせて黒富士火山を形成する。茅ヶ岳、金ヶ岳は黒富士火山よりも遅く活動した

もので、黒富士火山の噴出物の上に乗っている寄生火山と思われる。黒富士の南東山麓にある「燕岩岩脈」の説明板には、

「国指定天然記念物

燕岩岩脈

指定年月日 昭和九年十二月二十八日（国指定）

所在地 甲府市御岳町

所有者 金桜神社

燕岩岩脈は黒富士（千七百六十米）の北方を中心とする放射状の黒富士岩脈のうち、幅三五米・延長一籽以上に亘って露出する規模の大きい岩脈として学術上貴重であると共に、柱状節理や板状節理が発達していて景観的にも優れていることから天然記念物に指定された。

黒富士火山の活動は今から約百万年前に始まり、何回も大火砕流を発生させ、その堆積物は釜無川や甲府盆地南縁の曾根丘陵に達している。

燕岩や太刀岡山（千二百九十五米）等の黒富士岩脈群や円頂丘は、約五〇万年前の黒富士火山の火山活動末期に火砕流の割れ目にマグマが貫入したもので、岩質は角閃石石英安山岩である。この岩脈には岩燕が営巣する事から燕岩と名付けられている。

昭和六十二年三月十五日 山梨県教育委員会

甲府市教育委員会」とある。

甲府盆地付近の火山

八ヶ岳、茅ヶ岳、金ヶ岳、黒富士、曲岳、八丁峰、鬼類山、太刀岡山、升形山、帯那山、小檜山、兜山と甲府盆地の北側に集中している。甲府盆地の北部での火山活動は、今から二百万年程前に塩山市の北にある焼山峠や小檜山一帯での噴火活動から始まった。活動の中心は徐々に西に移動して、百五十万年程前からは山梨市の北にある水ヶ森や帯那山付近を中心に噴火が起こり、甲府の市街地の北にそびえる山々を次々に生み出していった。ちなみに、舞鶴城（甲府城）は、この時の活動で出来た一条小山という小山を利用して築かれている。

やがて、活動はさらに西に移動し、百万年前になると、黒富士火山や茅ヶ岳火山などが活発に活動し、特有の山容を見せている溶岩円頂丘（有珠山のように粘り気の強いマグマで出来た山）の太刀岡山や曲岳、天然記念物にも指定されている燕岩岩脈などを形成した。

さらに五十万年まえになると、八ヶ岳火山群が次々に噴火し、この活動は二十万年前まで断続的に続き、盆地から見ると広大な山麓といくつもの頂を持つ八ヶ岳連峰が形成された。



◎宮方家藁葺き門

三十代続く旧家。珍しい藁葺き門



◎神明宮・常夜灯

祖母石・西岩下の鎮守で、古くは字神田にあったが、享保九年(1724)に現在地に遷座したと伝えられる。境内に「秋葉山常夜灯 明和六年(1769)丑十一月吉日」の常夜灯がある。

◎祖母石の赤地藏

神明宮のすぐ先、右手に「祖母石の赤地藏」がある。「南無阿彌陀佛」と書かれた赤い自然石で、地元では「赤地藏」と呼んで信仰している。

◎九頭竜大神五石碑

国道20号線に合流する手前左の一角に、五基の石造物がある。左から蚕神、石尊神、道祖神、秋葉大神、九頭竜大神と並び祀られている。



◇石碑をよく見て先に向かう。1.5kmの標識を見て、株ウィンを過ぎて七里岩と20号線にはさまれた田んぼ道をかなり歩き到着する。

◎姥婆石

説明板には、

「この巨石は、あたかも老婆があごを支えている姿に似ているところから、姥婆石と名付け、文字も祖母石に改め村名とした。



姥婆石前にて 第十六回参加者記念撮影

左から【中島、竹島、中田、前北、折本、三浦、嶋崎、八木、相原、浅見、伊藤、宇山】

村の発祥は定かでないが、慶長年中（一五九六〜一六一四）とみられ、以来幾星霜、その間の諸説をふまえて村では、弘化二年（一八四五）巨石の頂部に石祠を建て、近くの九頭竜社とともに、例祭を執行し、提燈まつりとして近郷にきこえていた。」とある。また、昔、田植えの最中に巨石が落下して死亡した老婆の霊を祀った石とも、水害で家族を失った老女が悲しみのあまりここで石になったものとも伝えられる。

◇姥婆石前で記念撮影後、七里岩を左に見て、富士山を見ながら、田んぼ道を、先ほどの九頭竜大神五石碑まで戻り、20号線を歩き、



信号を横断して、釜無川の桐沢橋に到着する。



雪をいただく山並みを目指し、釜無川と富士山に魅せられて、風景を堪能しながら、桐沢橋をゆっくりと渡り、清哲町案内図にたどり着く。

◎清哲町案内図

清哲は、四村の合成地名で、「水上」（さんずい）と「青木」の青で【清】、「折居」の折と「樋口」の口で【哲】と合併した各村の漢字の一部を合成して創られた。

◇清哲町を歩く、日陰は残雪多く、注意しながら歩を進める。

信号がある青木地区を通り、暫く進むと折居地区に出る。緩やかな長い坂を登ってゆく、唐沢橋を渡ると登りきったところで入戸野入口に到着する。



徳島堰の片鱗をここで確認して、本日の昼食場所の宝蔵寺へと入ってゆく。同寺には雨を予想して、中島リーダーが昼食に使わして欲しいと、仁義を切ってはがきを出しておいたのだが、生憎本堂が工事中だった。





幸い好天に恵まれたが、風で少し冷やされる。  
陽だまりに各自が陣取って食事ができたのは幸いでした。  
三十分ほどで食事を終わって、徳島堰に沿って歩き始める。

◇堰とは辞書では水流をせき止めたり調整したりするために川



の途中や湖・池などの水の出口に作るしきりとある。この徳島堰は運河のようなだがなぜ堰というのだろうか？

徳島堰を辿って行くと戸沢川に出る。その上流の渡渉地点で川を渡る。徳島堰はその川の下を潜らせて水路が繋がっている。

### ◎下田井逆断層

戸沢川の渡渉地点の奥約三百米にあり、押し被せ断層として有名な断層である。

この断層は、糸魚川―静岡構造線に沿った派生的な断層とされているようだ。東側の砂礫層（約二万年前に堆積した段丘堆積物）の上に、西側（赤石山脈方面）の約千五百万年前の石英閃緑岩が乗り上げている逆断層である。

### ◎下田井集落

戸沢の渡渉場所の先、県道の手前を左にUターンするように登れば下田井の集落だ。

小さな集落だが、洒落た土塀や石塀が多く、また、なまこ壁の門を持つ立派な家のある街である。

### ◎秋葉山常夜灯

下田井の集落の中の枡形になってところに、火伏の神を祀つ



た秋葉神社に因む常夜灯がある。

◎サイホン徳水不息

「徳島堰の水はとまらず」とでも読むのか。(息 $\parallel$ やむ、とまる、



消える、ほろびる)

◎徳島堰由来

説明板には、

「この堰は古くから日本三大堰（柳川堰、箱根堰、徳島堰）中  
随一と言われています。三百年前、江戸の住人徳島兵左工  
門がこの地方の開発を計画し、幕府（甲府藩）の許しを得て、  
寛文五年（1665）工事を始め、同七年に上円井（葦崎市円野町）  
より曲輪田の大輪沢（櫛形町）まで約十七kmの堰を造りまし  
たが、何故か兵左工門は同年秋工事から手を引きました。その  
後甲府藩では有野村（白根町）の郷土矢崎又右工門等に命じて  
全区間の不良箇所を修復をさせ同十年に完成したので、この堰  
を徳島堰と名付け兵左工門の功をたたえましたが、又右工門は  
工事に私財を使い果たして生活は困窮しました。…後述略…」  
とある。

◎流水不易（サイホン）

「流れる水は変わらない」とでも読むのか。（不易 $\parallel$ 変わらな  
いこと）



### ◎上円井

国道20号線を潜ると上円井の集落に入り、二百米弱で集落の中を通る旧道に出る。右は祖母石から笛吹川の左岸を通る「分間延絵図（注）」による甲州街道」で穴山橋からの道。ここで徳島堰と分かれ左集落の中心部へ向かう。集落の中程左手に「徳島翁のおはかみち」と書かれた石柱あり、その路地を入り少し先に「妙浄寺」がある。

また、旧道の少し先の右にある内藤家に「明治天皇小休所碑」がある。

（注）「分間延絵図」とは

正式には「五海道其外分間見取延絵図」と言い、江戸幕府が東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道の五海道及び

その他主要な脇街道の実態を把握するために作成。道中奉行の直轄事業として、寛政十二年（1800）七月から文化三年（1806）にかけて凡そ七ヶ年の歳月をかけて完成した。  
三部作成したうちの一部は江戸城内に、残り二部は道中奉行のもとに置かれた。

分間延絵図は全百四巻（甲州道中九巻、東海道二十四巻、中山道二十巻、日光道中五巻、奥州道中三巻ほか）で各巻共いずれも色彩を施した大巻で、実測を基調とし、千八百分の一の縮地（一里を曲尺7尺2寸に）を以って作成された精密な絵図で、諸街道の実情を忠実に伝えている。

各街道の沿道には主要宿名を墨書し、併せてその周辺には村76名、村数、宿高等を注記し、村々の境界には領分の境を示す傍示杭を描き、道路の曲折には方位を示し、本陣、脇本陣、高札、橋梁などを詳細に描いて、併せて社寺についても朱印地の有無を朱書に明示している。特に鎌倉八幡宮、東大寺などの大社寺については詳細な社寺配置を描き、他には名所旧跡、関所などを示すなど街道周辺の様相を正確に伝えている。

### ◎妙浄寺

清水山妙浄寺は徳島堰開削にあたった徳島兵左工門俊正が堰



筋用水五穀成就の守護神として七面大明神を祀って開基。境内には大正八年(1919)に建てられた大きな「徳島堰碑」と兵左工門俊正の墓がある。妙浄寺の梵鐘は享保二十一年(1786)二月に武川・西郡筋二十二ヶ村や個人の本願、施主六十八人により寄進されたもの。

高さ一・二米、口径〇・七八米の青銅製の鐘で、府中横沢の鑄物師沼上治左衛門吉品の鑄造である。

◎明治天皇円野小休所碑

内藤昭一氏宅にある。明治十三年六月に明治天皇が巡幸した際の休憩所で、長屋門と御座所は残り、屋敷内に碑が立っている。



◎一里塚跡碑

小武川橋を渡ってすぐに右折し、宮脇の集落の中を通って黒澤橋の二百米程先に「一里塚碑」がある。石碑には「甲府ヨリ六里ナノデ 六里塚トモ云ウ」とある。



◇武川町農産物直売センターを通り、側溝に雪が残る道を歩き、



牧の原の旭タクシー武川営業所に到着して予定の歩行完了。  
 タクシーは一台もなく電話で呼び出す。一台が到着して、我々  
 を三往復のピストン輸送により、釜無川と七里岩を超えて日野  
 春駅に運ばれる。甲斐駒ヶ岳に見送られて、予定電車に乗る。



第十七回 実施日 平成二十五年三月二十一日(木)  
 牧原〜台ヶ原宿 約十一・九粒 累計約百七十一粒  
 宿 台ヶ原宿

★集合場所・時刻

JR八王子駅四番線 甲府寄り NEWDAYS あたり午前6時15分  
 八王子6:30(松本行き) 〓 高尾6:43 〓 8:41 日野春(高尾か  
 ら乗車も可)

【第十七回甲州道中行程】

日野春〜釜無川ボケツトパーク〜牧の原バス停〜大武川橋〜78  
 庚申塚〜万休院〜神明神社・供養塔群〜七里塚跡〜尾白川橋〜  
 横山古道入口〜土手の道〜国見坂〜庚申塔・馬頭観世音〜道祖  
 神跡〜立場跡〜台ヶ原宿案内板〜台ヶ原宿〜高札場〜七賢酒造  
 〓 金精軒〜田中神社〜一里塚跡〜自元寺〜道の駅白州 〓 (cafe)  
 〓 長坂駅

帰路 長坂駅発(高尾行) 14:14 〓 〓 16:31 高尾

(注) ①長坂駅はスイカ、パスモは使えません。

②ジパンング(大人の休日)を利用の際は「〜長坂駅」往復を  
 購入が有利。



◇旅人八名が日野春駅で下車、海拔六百十五メートルの標識を見て、牧の原までおまけ歩きを始める。今回も天気恵まれて、雪をかぶった甲斐駒ヶ岳を見ながらの歩き、オオムラサキの育成保護の様子などを観察しながら、前回タクシーで登った道を下る。トンネルを潜ると県道に当たり、武川方面に歩く。



釜無川橋ポケットパークにて、第17回参加者記念撮影  
左から【三浦、前北、竹島、八木、嶋崎、中島、伊藤、宇山】



◇甲州街道歩きおまけ部分  
釜無川橋ポケットパークから山並みを見ながら橋を渡る。



根を広げて舞い降りる姿に似ているので「舞鶴の松」と呼ばれ

当寺にはかつて樹高九米、根回り四米、枝張り東西十八米、南北十五米、樹齢約四百年越えの赤松の巨樹があった。鶴が羽

#### ◎万休院

万休院の開基は、天正十年(1582)の武田氏滅亡の際、松本深志城の守将として城と運命をともにした馬場信忠(馬場美濃守信春(補足17頁参照)の子)である。寺伝では、元龜二年(1571)、利山玄益を開山とし、馬場美濃守信房(信春)を開基とすると伝えている。





◇橋を渡ると武川の標識が目に入る。パノラマ写真はHPでも好評でした竹島久雄さんの作品です。



ていたが、この松はマツクイムシの被害で枯れてしまい、平成二十年三月に伐採されてしまった。

### ◎山高の神代桜

今回の甲州街道ウォークでは訪れませんが、万休院より南へ一軒、大武川の向こう山高集落の田圃の先の小高い丘の上に日蓮宗実相寺がある。当寺には日本三大桜の一つで国指定天然記念物の「山高の神代桜」がある。境内の南端、道路沿いに立ち、エドヒガン種で根回り十三・五米、枝張りは東西二十七米、南北三十一米もある。樹齢一千八百余年。伝説によれば、日本武尊が蝦夷征伐の帰り道この地を訪れ、記念にこの桜を手植えたといわれる。

なお、日本三大桜は、「山高神代桜」山梨県北杜市武川町山高。

エドヒガン。「根尾谷淡墨桜」岐阜県本巣郡根尾村。ヒガンザケラ。樹齡一千五百年、樹高十七・二米、幹周九・一米、枝張りは東西二十四米、南北二十一米。「三春滝桜」福島県田村郡三春町大字滝桜久。樹齡一千年、樹高十九米、目通り幹周九・五米、枝張りは東西二十二米、南北十七米。



◇万休院から山を下り街道に戻るところに庚申塚がある。山津波の文言があり、自然現象に驚く。

◎神明神社・供養塔群

神明神社は上三吹<sup>かみみぶき</sup>にあり、境内入口に地藏・庚申塔ほか石塔十七基、奥に道祖神や供養塔などが四十基以上がある。三吹は、



釜無川・尾白川・大武川の氾濫原を開拓した耕地を基盤とする農村で、当地の歴史は三河川の水害史でもあった。三吹北部の上三吹の集落形態は農村には珍しく街村型をなしている。これは近世の信州往還に沿って民家が集まったとみられるが、むし



る釜無川の暴流に対する抵抗を少なくすることが主目的で、それに街道沿いの利益が一致した結果とみるべきと考えたほうが良い。上三吹の北端に神明神社の祠が祀られ、その南方に整然として街村が展開するのは、水害を防ぐ最適な形態である。

◇本日の食堂は上の休憩所のもりが風が強くて寒いので下に降りて風を避けて昼食をとる。このすぐ上に一里塚碑があった。



◎七里塚跡

神明神社より街道に戻ったすぐ先に休憩所と「旧甲州街道一里塚跡碑」があり、碑には『甲府ヨリ7里ノイチニアルノデ7里塚トモ云ウ』と刻まれている。



◎横山古道

国道と合流し右折、尾白川橋を渡った先すぐ左側に「甲州街道 古道入口 はらぢみち」の道標があり、ここから左の道を行く。この道は古府中より新府城、穴山、日野を経て台ヶ原村





に通じる道で、「はらぢ道」といわれる古道である。古道に入り  
すぐ右に「横山道標」がある。道標は二基あり、正面に馬頭観  
音の像が刻まれている。一基は「安永五(一七九六)丙申歳六月建

立之 右かうふみち 左 はらぢ道」。もう一基は「(右面)寛  
政四(一七九二)歳次壬子春三月吉日建之 (左面) 左りはらみち」  
とある。また、これと並んで文政十二年(一八二九)十月、蛭子屋  
儀八の建立した馬頭観音もある。

その先で「台ヶ原宿 古道」の標識が立つ右の道へと進む。  
滅多に人が通らない草に覆われた山道を進むと、急に開けた  
葡萄畑にでる。

◎庚申塔・馬頭観世音

横山古道の葡萄畑を進み、田圃のあぜ道を抜けて進むと、左

手に大石があり、その上に「庚申塔、馬頭観世音」の石塔、大  
石の横に多くの石造物が祀られている。

説明板には、『庚申塔と馬頭観世音 ◎庚申塔 庚申とは、干  
支(えと)の庚と申が結びついた六十年に一度回ってくる日や  
年のことである。庚申の夜は、眠ると人の体の中の三戸(さんし)  
の虫が抜け出して、天の神の所に行つて悪口を告げるので、そ  
の日は「守庚申」といって身を謹んで一夜を送る。庚申塔は集  
落中に建てられたが、文字だけのものと青面金剛を主尊とする  
庚申の神を彫つたものがあつた。江戸時代に入ると、各地に「庚  
申講」がつくられ、供養のための庚申塔が建立された。

◎馬頭観世音

馬頭観音は馬の守り神であり、石仏として地藏、  
庚申とともに親しまれてきた石造物で、馬頭観世音の字だけを

彫ったものと馬の頭に冠をつけた馬頭観世音がある。馬は古来より労働力として農耕、運搬、乗用等に重用されていたので、馬の供養と無病息災の祈願をこめて建立されていた。馬の頭上の冠は、生死の大海を渡った四魔を承伏する大威力や精神力、無明の重障を食い尽くすとの意味がある。

平成十七年三月吉日

『台ヶ原区』とある。



◎立場跡と共同井戸跡

説明板には

「立場跡

立場は宿駅の出入り口にあり、旅人・籠かき・人足・伝馬な



どが休憩する掛茶屋であつた。建坪が四十二坪で、時には旅籠として利用されていた。」

「共同井戸跡

昔は、湧水や川水などが生活用水として利用されていたが、衛生面から井戸を掘って、共同で維持・管理し、数戸から十数戸が利用していた。当時はつるべ式の揚水施設であつたが、後に揚水ポンプが導入され便利になった。井戸端には、多くの人々が集まって井戸端会議が行われ世間話やふれあいの場として賑わった。しかし、昭和三十年から白州町になり全戸に町水道が普及したので、各所にあつた共同井戸は廃止されるようになった。」とある。

## ◎台ヶ原宿

甲州街道の中で最も当時の雰囲気を残している宿場。昭和六十一年(1986)、「日本の道百選」に選定された。旧道の両側に古い家並が続いており、造り酒屋、旅籠、和菓子屋などが残っている。天保十年(1839)の『甲州道中宿村大概帳』によれば、高四百二十二石余り。



本陣一軒、旅籠十四軒、総家数百五十三軒、人口六百七十人(男三百四十人、女三百三十人)、宿場の長さ九町三十間

横手、白須、日野などの村々が助郷の負担をした。

台ヶ原宿は、葦崎宿から四里余り。その地が高く平らで台基のようなので台ヶ原といわれた。古道は七里岩台上の渋沢(長坂町)より花水坂を経て台ヶ原へ出た。武川筋と逸見筋との交通の要衝であった。天正十年(1582)の織田軍乱入のときも信長が大河原(台ヶ原)に宿陣したことや、天文8年(1538)には武田の将板垣信形が諏訪衆とこの筋で合戦した(『甲陽軍鑑』)との記録もある。

宿内中ほど、本陣の斜め向かい右手に問屋場があった。江戸方面への伝馬・商人荷物は一〜二十五日、武家荷物は一〜三十日の間に葦崎宿へ継ぎ、信州方面へは一〜二十五日の間は葛木宿、二十六〜晦日は教来石宿へ継ぎ立てた。

## ◎台ヶ原宿案内説明板

案内説明板には、

「台ヶ原宿の歴史と由来

台ヶ原宿の起源は明らかではありませんが、甲斐国志に「甲州道中の宿場なり、古道は辺見筋の渋沢より此に次ぐ・・・」とあり、台ヶ原は甲州街道の設定以前から交通集落としての機能を果たしていたと考えられます。元和四年(1618)に甲州街道に宿請が申し渡されたので、この頃台ヶ原宿も宿場として整備拡充されていったと考えるのが一般的です。

台ヶ原宿は江戸への里程四十三里十町余、葦崎宿へ四里、隣の教来石宿へ一里十四町、江戸より数えて四十番目、宿内の町並みは東





西九町半の位置になり、天保十四年の宿村大概帳によれば、人口六百七十人、家数百五十三（加宿共）とされています。

- 本陣 宿中にあり、建坪九七坪余、門構え、玄関付き、一軒
- 脇本陣 当時は無く宿役人の家において勤める。
- 問屋場 宿の中ほどにあり、問屋、年寄り、馬指、各一人が勤める。
- 旅籠 宿内十四軒、大い、中六軒、小七軒、木賃宿一
- 高札場 宿内中程の一ヶ所、高さ二間余、長さ三間、横七尺
- 郷藏 宿内一ヶ所
- 一里塚 宿内一ヶ所 木立無之

### 宿場の機能（一）

宿場の重要な機能は、公用の旅行者の貨客の運送、一般旅行者の利便をはかること。

①宿場には旅行者の駅伝業務を円滑にするため、当宿にも二十五人の人足と二十五頭の馬が用意され、うち五人、五匹は困い人馬といひ火急に備えました。

②加宿、助郷の制度が設けられ、多くの人足や、馬が必要な時には、加宿である三吹村をはじめ助郷と

なっている十四の村から協力を得られる仕組みがつけられていました。

③宿場の業務は幕府の所管で、道中奉行の支配下にあつて、問屋場を中心に駅伝業務が行われていました。問屋場では町役人が毎日詰めてそれぞれの業務にあたりました。

問屋 問屋場の責任者  
年寄 問屋役の補佐

帳付 毎日の人馬の使用状況を日しめ帳に記載する  
馬差（指） 人馬の差配や、駄賃の支払いなどを行う。

### ④宿場における継たてには、

無賃 御朱印、御証文とうの公用のもの  
御定賃銭 公定価格により格安で大名の参勤交代等に  
相対賃銭 使用者と駄賃稼ぎの者と相互に決める価格で一般の者と区別されていた。

⑤駄賃、人足賃については正徳元年、葦崎宿までの費用で、一般的に次の四種があつて、何文と決めて高札場に掲げられていました。

本馬 馬へ荷物だけをつける。四十貫以内（二百六文）  
乗り馬 人が乗った馬へ荷物をつける。二十貫以内（二百六文）

軽馬、軽尻馬 人だけが乗る、手荷物五貫以内、荷物だけの場合は二十貫以内（百三十文）

人足 人の背で運ぶ荷物五貫以内（百二文）

### 宿場の機能（二）

もう一つの重要な機能は、旅行者の休息と宿泊です。寛永十二年三代將軍家光によって参勤交代制が定められてから、大名や上級家臣が宿泊するのは本陣、脇本陣で、一般の家臣や庶民が宿泊するのは旅籠屋でした。

甲州道中の参勤交代は、高島藩（諏訪伊勢守）、高遠藩（内藤大和守）、飯田藩（堀大和守）の参藩が利用していました。特に街道を賑わしたのは、

①天明三年の浅間山の大噴火によって、中山道が閉鎖となり、甲州道中の通行量が増大した。

②寛永九年（1632）から元文三年の間、將軍飲用のお茶壺道中の通行が行われ、宿内の田中神社に一行が宿泊された時。

③中馬（農民の馬による荷物輸送）が発達して物資の交流が激しくなり、当時の宿場は多忙極めました。」とある。

### ◎本陣跡

説明板には、「大名が陣を敷いた場所ということから、大名級の者が宿泊した所である。したがって規模は広大であり、門を建て玄関を設け、上段の間を有することで一般の旅籠と区別され、一般の旅籠には許されない書院造りの建築様式であった。



天明二年（1782）の記録に、敷地は間口十八間、奥行き十九間の三百五十一坪で建坪は九十二坪であった。」とあり、小松家本陣跡に「秋葉大権現常夜石燈籠」が立っている。

秋葉大権現常夜石燈籠の説明板には、「往年、台ヶ原宿が火災と水害に見舞われたことに起因して、慶應三年（1867）「秋月講」

というグループが誕生し、防火を祈願して『秋葉大権現』の石燈籠を旧小松家（本陣）屋敷跡に建立して、大火の防火を祈願した。その後、「秋葉講」として祈願グループが広がり、年々秋葉山に代参をたて、（途中略）……。

記 建立年月日 慶應三年十一月祭日」とある。



本陣跡の向かいに脇本陣跡（本来、当宿には脇本陣は無かったが、文化三年（1806）の記録には平右衛門が村役人として脇本陣を務めたとある）があり、その隣に高札場跡、問屋場跡、郷倉跡がある。

説明板には「高札場跡 幕府からの命令を板の札に墨で書いて掲示した場所で、幕府の権威を人々に認識させる役割を果たしていた。文化三年の記録によると、その大きさは高さ二間余り、長さ三間、横七尺であった。」

「郷倉跡 毎年の生産物より一定量を備蓄して、非常の時に対応するために造られた備蓄庫であり、囲い枌（古いもの）は、新しいものに取り換えられた。文化三年（1806）の記録に『倉ヶ所貯穀有之』と記され、凶作の時に時価をもって極難の者に分売したとある。また、明和四年（1767）には郷御倉ヶ所、二間に三間の建物で敷地は除地であった。」

慶應二年（1866）の大凶作、嘉永七年（1854）の大地震のときに貯穀を借り受けたという。安政五年（1858）の貯穀取調書上帳によると枌四十七石六斗二升八合であった。」とある。

### ◎七賢酒造（北原家住宅）

高札場、郷倉跡の斜め向かいに七賢酒造と隣に北原家住宅がある。

説明板によると、

【北原家住宅 四棟】山梨県指定有形文化財（平成十二年十月指定）  
主 家 桁行十八・一米、梁間十八・一米、一重一部二階切妻  
造銅版葺

附 表門及び両脇屋根塀

奥便所 桁行三・八米、梁間二・六米、一重切妻造銅版葺

主家間の渡り廊下を含む

文庫蔵 土蔵造、桁行七・三米、梁間五・五米、一重二階銅版葺

文化蔵 土蔵造、桁行十四・五米、梁間五・五米、一重一部二階

切妻造割板葺

当家は、寛延二年（1749）頃、信州の高遠で酒造業を営んでいた北原伊兵衛光義が、この地に分家をして大中屋（現山梨銘醸株式会社）という屋号で酒造りを創めたと伝える。以来営業





は行在所となった。

北原家住宅は、台ヶ原宿の街道に面して建つ大規模な町屋建築である。主屋は主部の桁行が十間、梁間が十間半で、東側の土間、店舗および居住部分から構成され、一部に二階居間がある。西側につづく突起部は桁行が六間、梁間七間半で、南面に式台付き玄関、北西に座敷部分が並び、総桁行は十六間に及ぶ。屋根は緩勾配の切妻造りで銅版葺になっているが、もとは石置きの板葺屋根であった。

玄関の正面には両脇に塀を付けた表門が立つ。とくに座敷部は三室を南北に並べた配位で、格式の高さを示し、北端の奥座敷（行在所）は座敷飾床の間、違棚、付書院を備えた十畳間で北側に畳廊下が付く。奥座敷と中のある欄間装飾は「七

は大いに発展し幕末には諏訪高島藩、伊那高遠藩の御用商人を務め、また脇本陣を兼ねていた豪商である。従って、明治十三年(1880)に明治天皇本県御巡幸の際



試飲、見学のあと、七賢酒造（北原家住宅）にて、第17回参加者記念撮影（2）  
左から【三浦、宇山、八木、竹島、中島、嶋崎、伊藤、前北】

林の賢人」の彫刻である。

これは立川流宮大工・彫刻師として名高い立川専四郎富種の作品であり酒名「七賢」の由来とされる。

建築年代は天保年間(1830—43)から嘉永七年(1854)にかけて完成したと考えられる。主屋はじめ文庫蔵等付属建物が当時の状態でよく保存され、また建築関係資料も多く残されており、江戸時代末期の優れた商家遺産である。

平成十二年十月十二日

山梨県教育委員会

白州町教育委員会

とある。

七賢酒造の前に「信玄餅」で有名な和菓子屋、金精軒がある。



また、七賢酒造から登記所跡を見ながら、先を歩くと、右側に田中神社と荒尾神社がある。

### ◎荒尾神社

荒尾神社は、もと中山の麓の根古屋にあった。祭神は罔象(ミツハ)女(メ)命(注)と日本武尊である。甲斐国志に「荒尾白川二臨ムノ意ニテ荒尾ト名付クト云」とあり、尾白川の氾濫などから村人が、台ヶ原などに移り住むようになり、明治四十三年に台ヶ原田中神社境内に境内神社末社を合祀、大正三年四月五日その境内に遷座した。

(注)罔象女<sup>みづはのめ</sup>罔象は水神、または水中の怪物。『日本書紀』に「時に伊弉冉尊<sup>いざなみ</sup>、軻遇突智<sup>かぐつち</sup>が為に、焦<sup>や</sup>かれて終<sup>つひ</sup>りましぬ。其の終<sup>つひ</sup>りまさむとする間に、臥<sup>ふ</sup>しながら土神埴山姫<sup>つちのかみはにやまめ</sup>及び水神罔象女<sup>みづのかみみづのめ</sup>を



生む。(中略……) 罔象、此をば美都波と云う。」とある。

#### ◎田中神社(お茶壺道中)

田中神社は、祭神は大己貴命と媛太神で、安産の神として近郷に知られていた。この拝殿は、江戸時代(慶安五年から元禄三年)にお茶壺道中の宿舎に当てられ、二回修造料として各拾兩宛拝領の記録がある。なお、甲斐国志に「祀側二虎石アリ故二古来本村ニテハ獅子舞ヲ禁シテ入レス正月十四日道祖神祭ニモ虎舞ト名付ケテ他村ノ獅子トハ其形異ナリ」とあり、明治初年頃まで虎舞が続けられていた。虎頭のみ残して絶えていたこの舞を、近年集落の若者を中心に保存会が発足し、復活させた。

また、境内を出発地として明治初年まで行われていた昆虫除けの祭礼は、資料が残存していて、江戸末期の農村事情を知ることが出来る。

お茶壺道中は、江戸幕府三代将軍家光の寛永十年から毎年四月中旬、京都の宇治に採茶使を派遣して、将軍家御用達の新茶を茶壺に納封して、江戸城へ運んだ行列である。行列の往路は東海道であったが、帰路は中仙道を経て甲州街道へ入り、谷村勝山城の茶壺蔵に収蔵して、熟成後の秋に江戸城に搬入されていた。この茶壺行列は権威が高く、御三家の大名行列さえも

道を譲らなければならぬほど格式の高い行列であった。資料によれば、このお茶壺行列は、中仙道奈良井宿や下諏訪宿に逗留後、当田中神社に宿泊したと記録されている。

『甲斐国志』には「此ノ拝殿昔時ハ毎年御茶壺一泊ノ処ナル故ニ修造料トシテ金拾兩宛ニ度拝領セリ、慶安五年(1654)六月ノ立札ノ写ニ御茶壺毎年当社拝殿御一泊候間拝殿並ニ御番所柱板壁等落書一切仕ル間敷候、総シテ穢ラワシキ者並ビニ乞食非人等、昼夜集リ居ル可カラズ候事」、「御茶壺通行ノ停マリシハ元禄三年ナリト見タリ」と記されている。

故に当田中神社は、お茶壺道中とゆかりがあり、由緒ある神社である。

田中神社の横に、修験智拳寺がかつてあった。



◎一里塚跡

田中神社の先、左側に「台ヶ原の一里塚跡」の碑がある。日  
本橋から四十三番目。「江戸より四十三里拾町」と刻まれている。



ある。

《自元寺の総門》

説明板には「総門は『武田四臣』武田二十四将馬場美濃守  
信房公（信春）の屋敷（通称梨子の木屋敷）現白州町白須  
一〇〇八一番地付近から移したものである。四脚門流造り屋  
根は鉄板葺きであるが元は茅葺きであったと思われる。棟の前  
後に奥方の家紋笹竜胆（注）が付けられている。

総門が造られたのは信房公が生涯何度か改名した中、教来石  
民部景政から馬場民部景政に改名した天文十五（1546）年あた  
りと思われる。戦国武将の屋敷・構えが偲ばれる貴重な遺構で  
ある。」とある。（注）馬場家、自元寺の家紋は『花菱』。

教来石景政の生家は白州町鳥原、サントリ―白州工場の北「鳥

◎自元寺

曹洞宗白砂山自元寺は馬場美濃守信房公菩提所。説明板には、  
「由緒 開基は馬場美濃守信房公、開山は端叟敦の大和尚である。  
元亀元年（1570）白須坊田に寺を建立。天保初期に焼失し天保  
十四（1843）年現在地に再建。信房公は武田家臣の中でも智勇  
兼備の重臣で、天正三年（1575）長篠合戦にて六十二才の生涯  
を終えた。墓所と位牌（乾叟自元居士）が安置されている。」と



原平活性化施設ビューフアーム鳥原平」の向かいにあり、「史跡  
教来石民部屋敷跡」の標柱、説明板と東屋がある。

馬場姓を継承した後、ここより南の現在の「道の駅白州」付  
近に移った。通称梨子の木屋敷である。

◇自元寺から白州小学校の脇を歩き20号線に出て、道の駅「は  
くしゅう」に着き、予定歩行を完了する。

暫く、休憩して、各自おみやげを求めたり、長時間乗車する  
車内宴会用のビール、おつまみを仕入れて、タクシーを呼び待  
つこと十五分、細い道を通り、長坂駅に向かう。

今回、欠席した折本旅人は次の日一人でタクシーも使わずに  
全コース歩いたと後日、情報が入る。



◇長坂駅で1414発高尾行、最終尾の車両に乗る。

第十八回 実施日 平成二十五年四月十八日(木)

台ヶ原宿〜葛木宿⇨タクシー⇨小淵沢駅

約十軒 累計約百八十軒

宿 台ヶ原宿、教来石宿、葛木宿

★集合場所・時刻 JR八王子駅四番線 甲府寄り NEWDAYS  
あたり午前六時十五分 八王子6:30(松本行き) ⇨高尾6:43  
⇨8:29 葦崎(高尾から乗車も可)8:40 バス下教来石下行—9:12  
白須バス停

【第十八回甲州道中行程】

葦崎バス(8300円) 台ヶ原(白須バス停) 白須松林社  
 と宗良親王の歌碑 教来石景政の館跡 教来石宿 教来石 本  
 陣河西家跡・明治天皇御小休所址 諏訪神社(彫刻装飾) 明  
 治天皇御田植御通覧之址 御膳水跡 教慶寺の地藏菩薩 山口  
 素堂生誕地と句碑 山口の口留番所跡 西番所跡 山口素堂句  
 碑 旧道国界橋 感電ゲート 日蓮の高座石 真福寺 応安の  
 古碑 葛木宿 常夜灯 六角灯笼 南(東)の枡形 三光寺  
 道の駅信州葛木宿 タクシー 小淵沢駅

◇十二名の旅人が集い、葦崎駅前からバスに乗り込み、貸切状  
 態にする。前歩いた約十二軒を辿り、ここを横断した、あそ  
 この横を歩いた、と回想も追いつかず、白須バス停に到着する。



バス停から少し戻り、紅白の花桃が散見し、八ヶ岳が頭を覗か  
 せる旧道を歩きはじめる。暫くすると右側に鳥居が現れ、武田  
 神社と見える。今は廃社のように素性はわからない。甲斐駒ヶ  
 岳が望める前沢ちびっこ広場に着く。



◎白須松林址と宗良親王の歌碑

かつては一里にわたり松原が続き、中には六本松や一ツ松と呼ばれた巨木もあったが、昭和一〇年代に伐採されてしまった。歌碑は武田神社の先、前沢ちびっこ広場の奥にある。



歌碑の左には蚕神や馬頭観音などの石祠がある。



大正十一年(1922)に建てられた「宗良親王(南北朝時代、後醍醐天皇の皇子)歌碑」には以下の歌が刻まれている。

「甲斐国しらすといふ所の松原のかげにしばしやすらひて

かりそめの行かひちとはきゝしかど

いさやしらすのまつ人もなし」(『李花集』)



(注) 宗良親王(むねよし)とも読む

〈応長元年(1331)〜元中二年(1385)〉

後醍醐天皇の皇子、兄弟に護良親王、尊良親王、懷良親王、

義良親王(後村上天皇)など。

母は歌道の家であった二条家二条為世(たのよ)の娘為子。幼いときか

ら和歌に親しんでいた。延暦寺に入り、尊澄法親王と称し、元

徳二年(1330)天台座主となる。元弘元年(1332)元弘の変が起

ると後醍醐の倒幕運動に参加、笠置山にこもったが捕えられて

讃岐へ流罪となる。元弘三・正慶一(1333)鎌倉幕府が滅び建

武の新政が開始されると再び天台座主となる。

しかし建武の新政が崩壊し、南北朝の対立が本格化すると

還俗げんぞくして宗良親王と改名、翌延元三・暦応元年(1338)後醍醐

天皇の南朝再建策の一つ、遠江を拠点地とするため、奥州陸奥

国府(福島県伊達市霊山町)を指す北畠親房らと共に伊勢国

大湊(伊勢市)を出発、途中暴風雨にあり、親王は運よく遠江

国に漂着し、井伊谷(静岡県浜松市北区引佐町井伊谷)の豪族

井伊道政のもとに身を寄せる。

興国元・暦応三年(1380)に足利方の高師泰・仁木義長らに攻められて井伊谷城が落城した後、越後国寺泊や、越中国放生津(富山県射水市)に滞在した後、興国五・康永3年(1384)に信濃国伊那郡の豪族香坂高宗に招かれ、大原原(長野県大鹿村)に入った。親王はこの地を文中二年(1373)までの約三十年間にわたり拠点とし、「信濃宮」と呼ばれるようになった。

その間に上野国や武蔵国にも出陣し、駿河国や甲斐国にも足を運んだことが『新葉和歌集』や私家集『李花集』の内容から判明している。

正平六・観応二年(1351)に足利尊氏が一時的に降伏した際には新田義興とともに鎌倉を占領し、翌正平七・文和元年には征夷大將軍に任じられたが、鎌倉を占拠し続けることができず、越後で再起を図るも振るわず、再び大原原の地に戻る。正平十・文和四年(1385)諏訪氏・仁科氏など信濃の宮方勢力を結集し、信濃守護小笠原長基と桔梗ヶ原(長野県塩尻市)で決戦に及ぶが敗れる。

大原原の地でおも信濃の宮方勢力再建を図ったと思われるが、文中三・応安七年(1374)、三十六年ぶりに吉野に戻った。天授三・永和三年(1377)再び出家(落飾)している。吉野に戻った頃から南朝側の君臣の和歌を集めた和歌集の編集を開始して

いた。当初は私的なものであったが、長慶天皇は勅撰集に准ずるように命じ、弘和元・永徳元年(1382)に完成し、長慶天皇に奉覧した『新葉和歌集』である。終焉の地は、信濃国大原原、遠江国井伊城、入野谷長谷(大原原から諏訪に向かう途中の峠道で討ち死した)、浪合、河内山田、岐阜県中津川市坂下町ほか各所であり、薨去された日も元中二年八月十日(1385/9/14)とされているが定かではない。



#### ◎ 教来石景政の館跡

「教来石景政の館跡」は前沢から荒田へ行く旧道を荒田入口で左に、石尊神社鳥居をくぐって鳥沢の信号で国道20号線を横切り、西約一軒強の『鳥原平活性化施設(ビューファーム鳥原平)』



の横にある。

案内板には

「教来石民部館跡の由来（馬場美濃守信春）

この地鳥原には、昭和六十三年度の発掘調査により、教来石民部館があったことが判っています。

館主である教来石氏は、武田家支流の一条氏から派生し



た在地の武士団、いわゆる武川衆の一員であり、武田宗家に忠誠を尽くし、幾多の合戦で勇猛な働きをしたと古来より伝えられています。また、武川衆は、



教来石景政の館跡にて、第18回参加者記念撮影(1)  
立ち人左から【浅見、折本、中田、竹島、八木】  
座り人左から【嶋崎、相原、前北、中島、宇山、三浦、伊藤】



家跡を継ぎ、その一条信長の孫一条時信が甲斐守護職に任ぜられた。時信には十数人の男子があり、武川筋の村里に分封され、その地名を氏として子孫が繁栄した。(武田氏系図参照) 青木折居、山高、柳沢(柳沢吉保の祖先がいた)、宮脇、入戸野、白須、横手、牧野、知見寺、葛木、教来石などの諸氏が同族的結合をもつて、信虎、信玄、勝頼三代に仕え、大いに活躍するのである。天正十年(1582)、武田氏滅亡、六月本能寺の変と大きく歴史も動き、甲斐国へは北条氏直勢が侵入、折居市左衛門、米倉忠継らの武川衆は、七月に入国し新府城へ布陣した家康から感状を賜り本領を安堵された。北条勢を追いやった家康翼下の武川衆十四人は、のち埼玉県鉢形に領土を与えられたり、旗本などに取り立てられた。

武川衆十二人は津金衆(須玉・津金から佐久までを領した武田氏の辺境武士団)とともに元和二年(1616)まで二人ずつ十日交替で甲府城番を務めた。現在韮崎市に清哲町がある。これは武川衆が拠点とした○水上、○青木、○折居、樋○口の地名をあわせて作ったもので、団結力の強い武川衆をいまだ象徴するような地名である。



◎教来石宿……甲州最後の宿

本陣一軒 脇本陣一軒 旅籠七軒 総家数百四十四軒  
 人口六百八十四人(男三百六十人、女三百二十四人)  
 宿場の長さ四町三十間  
 武田の武將、馬場美濃守信房の領地であった。



◎教来石(キョウライシ)

地名については「村の西に教来石として高さ七尺許、ぼかり 豎三間、横二間許の巨石あり。村名の起る所なりといへり。石上に小祠あり。日本武尊を祀る」と『甲駿道中之記』では説明している。日本武尊が甲府の酒折宮にいた頃この地に来て、この石の上に休んだので、村人が「へ 経て来石」と呼んで村名にしたという。経を教と書き誤ったことから、いまの名になったと伝えられ



教来石の前で



◎本陣河西家跡・明治天皇御小休所址  
 現在は更地となっているが、「明治天皇御小休所址」の石柱の立っている辺りが本陣河西家の跡。本陣は建坪百二十坪、門構の玄関付であった。

ている。  
 村名の由来となった教来石は、国道20号線の下教来石の信号を少し諏訪方面に進んだ所を左折し、道なりに右にカーブしながら緩やかな坂を上って行くと、来福寺の墓所があり、この墓所が切れたあたりの畑の中に大きな石、教来石がある。石上には五体の石仏が祀られている。

◎諏訪神社

説明板には、

『諏訪神社本殿

付棟札一枚 本社拝殿再建諸色勘定帳

昭和四十三年十二月十二日 県指定

諏訪神社の創建及び沿革について詳しいことは明らかでないが、古来から教来石村の産土神として崇敬を受けてきた。現在の本殿は、天保十五年(1844)十二月十九日再建したもので、棟梁は諏訪出身の名工立川和四郎富昌である。



脇羽目の「昇竜と降龍」幕股の「竹に雀」脇障子の「手長と足長(注2)」の浮彫、向拝正面に中国の故事「ひょうたんから駒」の丸彫など、豊富な意匠、奇抜な図柄、加えて精巧な彫刻は、全体の均衡を失わず、よく「立川流」の作風を伝えており、富昌の傑作品の一つである。江戸時代後期の社寺建築の動向をふまえつつも、異彩を放つ貴重な遺構である。

なお付加指定の棟札に「維持天保十五歳次(中略)甲辰冬十二月十有九日(以下略)」とあり、また本社拝殿再建諸色勘定帳には「御本社棟梁 立川和四郎殿 本社分 一金 四拾二両・米 貳拾八俵 拜殿分 一金 拾七両・米 拾七俵(以下略)」

山梨県教育委員会」とある。

本殿は一間社流造(注1)で、屋根は柿葺、正面中央に軒唐破風付の向拝をとりつける。建築の特色は、随所に施された彫刻装飾にある。身舎壁面の「狸々と酒壺」背面の「唐獅子」小

(注1)流造(ナガレツクリ)

本殿の建築様式の一つ。神社の建築様式の基本は、「神明造」と「大社造」の二つで流造は神明造から派生した様式。切妻造、入口は平入り。屋根が前方に流れるように伸びて、参拝する人のための向拝【こはら／こうらばし】(ひょうたん)になっている。屋根には千木と鯉

木がない。なお、大社造は柱が九本で、中心に心御柱しんのみはしらという太い柱がある。入口は妻入り。ほかに、切妻造と入母屋造がある。

(注2) 手長、足長は『古事記』『日本書紀』の八俣の大蛇退治の話に出てくる。

足長(足名椎あしなづち)と手長(手名椎てなづち)は夫婦で櫛名田比賣の親。櫛名田比賣は須佐之男命と夫婦となり大國主命を生む。諏訪大社の御祭神建御名方は大國主命の次男。つまり、足長、手長は諏訪大社の御祭神建御名方の曾祖父母である。諏訪地方の説話では、足長の脚は長さ十米、手長の手の長さは七米という。なお、『日本書紀』では足名椎は脚摩乳あしなづち、手名椎は手摩乳てなづち、櫛名田比賣は奇稲田姫くしいなひめ、須佐之男命は素戔嗚尊と書かれている。また、



足長神社は諏訪市四賀に、手長神社は諏訪市茶臼山にある。

足長、手長神社には第21回甲州街道ウォークで訪れる予定。

### ◎明治天皇御田植御通覽之址

ここを明治天皇が通ったときに、下の田んぼで田植えをやっていたのを明治天皇がここから眺めたと言われている場所。

址の碑には「明治十三年六月本縣二御巡幸遊バサル同月二十三日本村通輦つうれん(輦とは天子が乗る車)ノ際 親シク耕作插秧そうぢやう(插はさす、秧はなえ)ノ状ヲミノナハセシ處ナリ」とある。



### ◎御膳水跡

上教来石の町名表示の少し先左側に「御膳水跡」の説明板がある。説明板には「明治十三年、明治天皇が、ご巡幸の際にこの細入沢の湧水をお飲みになり、お誉めに与かりました」とある。



### ◎教慶寺の地蔵菩薩

御膳水跡の先で20号線に合流、左に教慶寺の地蔵菩薩がある。地蔵菩薩の由緒は「今からおよそ七百四十年前（1247）中国から帰化した名僧蘭溪禪師が、村内に火災悪病、強盗などの凶事が相次ぎ、村人が難儀していたので、この厄災を取り除こうと大きな石地蔵を鎮座して、ひたすら祈願して村内に平和をよみがえらせたと言う。又最近ではいくつかの交通事故を救ってくれたと言う。霊験あらたかな地蔵様である。」

### ◎山口素堂生誕地と句碑

山口素堂 寛永十九〜享保一（1642〜1716）  
『甲斐国志』によると素堂は上教来石の字山口に生まれ、幼少の頃家族と共に甲府魚町に出る。



元来家は富裕で時の人は「山口殿」と挙げ奉る家柄であったという。二十歳の頃に江戸に出て幕府儒官林家の門に学び、諸侯に講義する俊才であった。西山宗因や松尾芭蕉を友として林春斎と並ぶ人見竹洞とも交友を結んでいた。

元禄八年には父母の墓参りの為に帰郷して、その昔、僚属として仕えた甲府代官桜井孫兵衛に再会し、当時下流地域を水害で悩ましていた濁川の改修工事の手伝いを依頼された。素堂は快諾、桜井孫兵衛の手代として治水工事の指揮を執って完成させる。その後江戸に戻り松尾芭蕉との俳諧活動を再開し正風を確立した。

「目に青葉 山ほととぎす 初かつお」の句は知らない人がいない位有名である。

◎山口の口留番所跡

説明板には

「甲州二十四ヶ所の口留番所の一つで、信州口を見張った国境の口留番所である。」

ここがいつ頃から使用されたかは不明であるが、天文十年(1541)の武田信玄の伊那侵攻の際設けられたという伝承がある。『甲斐国志(1894)』によれば、番士は二名で近隣の下番の者二名ほどを使っていた。当時の番士は二宮勘右衛門・名取久吉で名取氏は土着の番士であったが、二宮氏は宝永二年(1705)に本栖の口留番所から移って来た。

この番所の記録に残る大きな出来事に、天保七年(一八三六)郡内に端を發した甲州騒動の暴徒がこの地に押し寄せた折、防



がずして門扉を開いた判断をとがめられ、番士が「扶持召し上げられ」の処分を受けたことである。番士のうち二宮氏は再び職に戻り、明治二年番所が廃せられるまで勤め、明治六年に設けられた台ヶ原屯所の初代屯所長に起用されている。

今は蔵一つを残し地割にわずかなおもかげを留めるのみであるが、番所で使用した袖がらみ、刺股、六尺棒などの道具が荒田の伏見宅に残り、門扉一枚が山口の名取氏宅に保存されている」とある。

◎西番所跡

石碑には「天保七年八月百姓一揆時に開門、その責任をとり名取慶助は若尾に改姓、明治四年廃藩により廃止 一九九二年 若尾法昭」とある。

◇ここで、中島さんが事前調査の経験から、道の駅信州葛木宿から小淵沢駅までのタクシー三台の予約を入れる。

◎国界橋

橋を渡ると信濃国諏訪領に入る。この地はもともと甲斐領であったが、天文9年(1540)に武田信虎の娘ねね々々ねね(信玄の妹)が諏訪頼重に嫁いだとき、化粧料として境方十八カ村まかいかた(乙事、



高森、池袋、葛久保、先達、田端、葛木、神代、平岡、机、瀬沢、木の間、休戸など御射山神戸以南の地区)を譲られたといわれている。しかし信玄が実権を握ると諏訪頼重を攻めこれを降伏させ諏訪を併合した。

葛木地区の北の山の葛木城は、甲斐勢の出城であったといわれている。

### ◎日蓮の高座石

街道は下葛木の信号を過ぎたらすぐ右に登る。角の崖の上の日蓮宗敬冠院があり、その境内に「南無日蓮大菩薩の碑」が立ち、その下に「日蓮の高座石」と記した標柱がある。

「日蓮の高座石」の説明板には、「文永十一年(1174)三月、流罪を赦された日蓮上人は佐渡から鎌倉に帰ったが、その後、

甲斐国河内の豪族波木井氏の庇護を受けて身延に草庵をつくることになった。その合間に、上人は甲斐の逸見筋から武川筋の村々を巡錫した。下葛木(当時は甲斐領・蘿木郷)に立ち寄り、たのはこの時である。

伝承によると、当時、村には悪疫が流行し村人が難渋していたので、上人は三日三晩この岩上に立つて説法とともに加持祈祷を行い、靈験をあらわしたという。その高德に村人はことごとく帰依し、真言宗の寺であった真福寺の住職も感応して名を日誘と改め、日蓮宗に改宗したといわれる。また、このとき上人が地に挿して置いた杖から葛の芽が生えて岩を覆うようになったと伝えられる。その後、日誘はこの高座石の傍らにお堂(後に敬冠院と呼ばれた)を建てて上人をまつり、近郷への布教に つとめたという。」とある。

◎追分道標

坂の途中右側にブロック造りで覆いのある小さな小屋の中に追分の石造道標がある。ここは武川筋と逸見筋の追分で、横の草地道が逸見筋で、ここを行くと七里岩の上部を通り今の長坂駅、日野春駅を通って葦崎へと行く。石標には「へみみちにらさきまで むしゆく」と刻まれている。



◇下葛木集落センターで七百三十一米の標識を確認し、前述の日蓮上人が三日三晩の岩上説法に村人が帰依したことにより、真言宗から日蓮宗に改宗したという真福寺前を通る。

◎応安の古碑

真福寺の前を左に進むと、パッと開け上葛木宿が一望できる所に出、右に「応安の古碑」がある。周りに五輪塔や宝篋印塔の石があり、その中の方形の石に「応安五壬子年(1372)」とあるらしいが読めるかどうか。



◎葛木宿入口

応安の古碑からゆるやかな坂を下ると上葛木の集落に入り「甲州街道 葛木宿 江戸より四十三番(四十五里三十丁)」の看板があり、ここから葛木宿が始まる。その先左に常夜灯と石の祠がある。



信州葛木宿入口にて、第十八回参加者記念撮影(2)  
 立ち人左から【竹島、中島、折本、相原、嶋崎、浅見】  
 座り人左から【前北、中田、八木、三浦、伊藤、宇山】

◎南(東)の枅形

石祠から約百米右側に「枅形道路の碑」がある。 碑には  
 「枅形道路」

葛木宿は、甲州街道(道中)の宿駅として、慶長十六年(十六一一)ころつくられた。この宿駅は、新しい土地に計画されたので、稀に見る完備した形態となっている。

枅形路は、南北の入口に設けられ、以来、宿内への外からの見通しを遮り、侵入者の直進を妨げて、安全防備の役割をはたしてきた。平成三年度の道路改良工事のために、南の枅形路を移動したので、その原形を碑面に刻し、これをのこす。」とある。





◎三光寺

かつて蔦木は甲斐国領でした。鹿島山三光寺は武田信重が建てたと云われる武田家ゆかりの寺で、寒梅と福寿草で有名とのこと。三光寺の家紋は「花菱」。



◇三光寺を参拝して、20号線の郵便局の軒下に「めどでこ」と中島さんが言う。日本橋まで百七十四軒の標識を見て、道の駅信州蔦木宿にはタクシーと同時に着く。名物の寒天大福を求めると意外な美味で満足。小淵沢駅14時07分発、高尾駅行の最終尾車両はまた貸切宴会場になる。



第十九回 実施日 平成二十五年五月十六日(木)

葛木宿〓青柳駅 約十四軒 累計約百九十二軒

宿 葛木宿

☆集合場所・時刻 JR八王子駅四番線 甲府寄り NEWDAYS  
付近午前六時十五分 八王子6:30〓9:01 小淵沢〓(タクシー  
10分 2000円位)〓道の駅信州葛木宿

【第十九回甲州道中行程】

小淵沢駅〓タクシー〓道の駅信州葛木宿〓十五社大明神〓上  
葛木交差点〓本陣大阪屋〓天皇御膳水〓北(西)の枡形〓川除  
古木〓石仏群〓平岡の一里塚跡〓明治天皇御野立所跡〓平岡か  
ら瀬沢へ〓諏訪神社・西照寺と笠塔婆〓瀬沢の道標〓瀬沢の古  
戦場跡〓尾片瀬神社〓とちの木風除林〓重修(塚平)の一里塚  
〓富士見公園〓原の茶屋跡〓現存する江戸時代の甲州道中〓石  
仏群〓御射山神戸集落(間の宿)〓神戸八幡社〓御射山神戸一  
里塚(江戸から四十八里目)〓徳屋之木大明神境内整備記念碑  
〓青柳駅

帰路 青柳 13:41〓13:58 小淵沢 14:07〓16:31 高尾

◇小淵沢駅からタクシーで三光寺まで移動する。



◎葛木宿

人口五百八人(男二百三十三人 女二百七十五人)

宿場の長さ四町三十間

宿は南(東)の枡形から北(西)の枡形まで一直線に延びている。  
また「上葛木郷」と呼ばれ、古くは「蘿木郷」などとも書かれ  
ていた。上葛木集落の北の居平や夏焼から、もともと釜無川の  
河原であった現在地に移転したものと伝えられおり、慶長十六  
年(1611)ころから計画的に造られた宿場である。生活用水な  
どの水路は道路両側の家の裏を通し、各家の土間はすべて甲州  
街道側に置かれているところなどに特徴がある。

問屋場は二ヶ所あって、それぞれ問屋の居宅を用い、十五日  
交代で人馬を継ぎ立てた。問屋場には 問屋・年寄・帳附・馬  
指がそれぞれ一人ずつ、毎日詰めていた。河原に造られた宿場

だったので二〜三年に一度は釜無川【北（西）の枡形の先の街道沿いにある】の増水による水害に見舞われた。そのため川沿いは藤川除、大川除などいくつもの堤防で守られていた。

◎十五社大明神

十五社は嘉禎年間(1235〜1238)以前に東町(場所不詳)に鎮座し、昭和四十三年に現在地に遷宮された鎮守神社。祭神は建御名方命、八坂刀売命、御子神十三神を祀つてある。社殿には御柱祭に使用する「めどこ」が奉納されている。

(注)御柱祭、めどこは【本誌】22頁を参照



◎本陣大阪屋

上葛木交差点を右に行く道は大門峠を越して上田方面への鎌



倉街道。この交差点の隣に本陣大阪屋があった。本陣表門横の説明板には

「甲州街道葛木宿と本陣表門の沿革

葛木宿は江戸幕府の宿駅制度によって、慶長十六年(1611)ごろ甲州道中第四十三番目の宿駅として設置された。街は街道に面して屋敷割をし、本陣・問屋などが位置づけられた。本陣の規模は広大で多くの座敷や板敷、土間のほか堂々とした門構えや広い玄関、書院造りの上段の間などを具備していた。この宿駅は、元禄十五年(1702)、延享三年(1746)、明和八年(1771)、寛政六年(1794)、文化六年(1809)、元治元年(1864)の計六回の大火にあい罹災戸数も知られているが本陣の類焼についての詳細は不明である。この宿場街は、明治維新による宿駅制度廃止と、さらに、鉄道がこの宿駅から離れたところに敷設された



〔注〕ため次第にさびれていった。

本陣も主屋は、明治四十年(1907)に南原山に移築され、渡辺別荘(分水荘)として活用されていたが、老朽化したため昭和五十年代に取り壊された。本陣主屋は弘化三年(1846)五月の建築であり、甲州道中における、本陣建築の遺構として惜しまれる建築物であった。この表門は、構造手法、および使用材料よりみて、主屋より新しく江戸末期の元治元年の火災後

「本陣表門の構造形式」(概要)

棟門、銅版葺、背面腰高片袖付、支柱付、西側面袖塀付、平面桁行一間半、一間菱格子付板扉内両開、半間潜板扉内開、軸組土台に柱を立て上部を棟木だ繋ぐ、一軒疎垂木、妻千鳥破風造り、屋根銅版葺に樋棟を乗せて、中陰蔭紋で飾る。」とある。

〔注〕 鉄道の敷設・開業

明治三十七年(1904)十二月二十一日中央本線葦崎～富士見間延伸開業、日野春駅、小淵沢駅、富士見駅を開業。

本陣表門の横に「甲州道中葛木宿本陣

跡」の碑と「明治大帝駐輦の碑」【輦れんと

は「天子の乗る手ぐるま(輿コシ)」のことで、駐輦とは「止めてお休みになった」との意味がある。】



◎ 天皇御膳水

宿の半ば右手に与謝野晶子の句碑と明治天皇御膳水の案内板があり、それには「この水は七里ヶ岩から出る湧水であり明治天皇が御巡幸の折りに使われた、御膳水であります。その御膳

水と、あと二箇所湧水を使用して、明治三十九年頃、葛木宿

の復興になるものと考えられる。明治三十八年(1905)池袋区、平出武平氏がゆずり受け、同家の正門としていたが、平成二年(1990)本屋取りこわしに際して町の歴史民俗資料館に保存された。かつての葛木宿の面影をしのび、心のよりどころとの区民の要望から、平成四年(1992)七月本陣跡地に復元された。建物の造りは簡素であるが数少ない本陣表門として貴重な遺構である。」



の街道筋に、十六箇所の水道施設を造り、飲料水として昭和二十六～七年頃まで使用されていたものです。当時の施設の石が保存されていたのでここに復元いたしました。

平成九年十月吉日

富士見町

白じらと 並木のもとの石の樋が 秋の水吐くの葛木宿かな

与謝野晶子詠

とある。

◎北（西）の枡形

左手に枡形道址の石碑があります。城の入口や宿場の入口の道を直角に曲げた所を枡形（鍵手ともいう）と云い、宿の中が見通せぬ様に造ったもので交通に不便であった。明治十八年新道の改修に及んで取り払われ真っ直ぐの道になった。枡形道に



は数多くの石造物がある。また、大きな木の袂たもとに「川除古木」の説明板がある。

◎川除古木

説明板には

「富士見町指定天然記念物 川除古木

釜無川の氾濫による水害から葛木宿を守るために、宿の上の入口付近につくられた信玄堤かまゆけと呼ばれる堤防がある。

川除古木は、この信玄堤と共に水害から地域を守るために植えられた川除木の名残りの古木であり、現存しているものはキササゲ一株、サイカチ二株、ケヤキ一株である。明治三十一年（1898）の大水のときには、この大木を切り倒して集落内に向かおうとする大水の向きをかえ、集落を水害から守ったとい

われる。キササゲは胸高幹囲二二五センチ、主幹は地上三メートルより上は枯れ、分かれた枝が張っている。キササゲは中国原産で暖地に植栽され、また河岸などに逸出している。果実が腎臓病の薬に利用される。富士見町内では窯無河原に見られる。

サイカチの一株は胸高幹囲三三五センチ、主幹は地上四メートルで大枝二本に分かれ、樹高一六メートルに達する。サイカチは本州・四国・九州の温帯および暖帯に分布し、通常、樹高一〇〜一五メートル、胸高直径三〇〜四〇センチに育つ。富士見町内では釜無および入笠地域に認められるが、株数は少ない。果実は洗濯に、葉は食用に、根皮および木の刺は薬用に、花は薬湯に利用される。

ケヤキは国内の温帯および暖帯に広く分布し、他の樹木に比べて大きく育って目立つので、けやけき木という意味からケヤ



キと名づけられた。また地方名「ツキ」は強木の略であり、防風のために植えられている例がある。

平成十六年三月

富士見町教育委員会」とある。

国道20号線に合流する直前に左に入る小道があり、それを行く。国道を約三百米程に岩田屋石材店があり、その前を左に入り川沿いの道を進む。約六百米でまた国道に合流する。合流地点には甲子塚、庚申塔、道祖神が祀られている。

#### ◎平岡の一里塚跡

北(西)の枡形から約一軒ドライブイン赤石の先の火の見櫓の先、道の左下の木の下にあるのが「平岡の一里塚」。西側だけが残っている。日本橋から四十六番目の一里塚である。



◎平岡から瀬沢へ

平岡の先の一本杉の先で右登り道（旧道）をとる。上り始めた斜め左の奥、田圃と堤防の間にグラウンド状の広場があり桜の木と石塔が見える。ここに「明治天皇御野立所跡の碑」が立っている。

明治天皇御野立所跡の碑の説明板には

「富士見町指定史跡 明治天皇巡幸御野立所

明治十三年六月、山梨・長野・三重・京都などの府県の民情視察のため、明治天皇の巡幸が行われた。

巡幸の行列は六月二十三日朝、台ヶ原（白州町）を出発し、国界橋をへて当地に入った。午前十時に葛木本陣に到着、しばし休息ののち平岡の御野立所に向かった。当日、沿道の家々では日の丸を掲げ、小学校児童をはじめ近郷近在の拝観者が沿道



に連らなって御巡幸を迎えた。行列は、四百人に及ぶ数であった。御野立所の位置は、あらかじめ宮内省より街道筋の柳の大樹のある草地を指定されていた。地元ではそこに白砂を盛って菊花紋のついた紫の幔幕を張り巡らし、白木の机と椅子を備えて玉座とした。すべて村人の奉仕によるもので、御巡幸を迎えるにあたっての苦労はなみなみならぬものがあつた。この日、天皇は金色燦然たる大元帥の礼服を着用され、御手ずから小さな箱を携えられて玉座につかれたそうです。そしてここまでは二頭立ての馬車で来られたが、行き先の瀬沢坂、とちの木坂が難路のため、四人担ぎの板輿いたこにお乗り換えになった。それから巡幸の行列は徒歩で次の休息地の原之茶屋へ向かつて出発したが、玉座跡の白砂は人々がお守りに持ち帰ったという。この巡幸の直後、地元では御野立の栄誉を記念として残そうと、平岡村が中心となって御座所の位置に鸞躑らんちゆう碑をつくり、左右にも行列を讀める歌碑を建てた。その後、明治十七年の釜無川の氾濫によって三墓の石碑は流失し、村中総掛かりでやっと探し出したが、台石は遂に発見できなかつたという。碑はいったん村中に建てておいたが、昭和九年に再び現在地に復元した。

平成十一年三月

富士見町教育委員会」とある。

上り坂は右に大きくカーブすると、左の石垣の上に大正十年

(1921) 建立の馬頭観世音が安置されている。平岡の集落に入った。今度は旧道は左に大きくカーブすると左手用水路の上に明治建立の馬頭観世音が安置されている。

さらに進むと左手に火の見櫓が現れ足元に甲子塔かっしや石祠(男女双体道祖神)が祀られている。

火の見櫓の前が変則的Y字路になっていて馬頭観世音が安置されている。変則的Y字路は左へ緩い坂道を下る。右手の石垣の上に二基の馬頭観世音が安置されている。旧道は今度はT字



路に突き当たり右折する。右折すると左手に「諏訪百番巡礼供養塔」がある。母沢川を渡る。曲がりくねった旧道は全てこの母沢川を高巻く為のものであった。(母沢川を渡ってすぐ左の民家は茶屋で道の反対側には湧水があったと近所の人が話してく



れた。) 旧道は机の集落に入り、左手に明治六年(1873)開校、平成二十四年(2012)三月三十一日閉校した富士見町立落合小学校がある。旧小学校の隣富士見町消防団第八分団の手前を左に入ると、大きな忠魂碑と愛馬出征記念碑がある。





愛馬が徴用され出征したことを記念したのか。

◇一行はここで休憩をする。地元の人から、この辺には見当たらない「垢抜けた老人団体」とご感想頂き、気を良くして出発。

すぐ先の矢の沢川を矢の沢二号橋で渡る。道は左に次に右に大きく曲がると急な下りとなり、左手に文政四年(1822)建立の「大勢至菩薩の石塔」があり、右手見上げる上に「奇石かぐら石」があるはずだが見つけれない。

坂を下りて20号線を横断して立場川の瀬沢大橋を渡る。立場川は八ヶ岳連山の権現岳とその北の立場岳の間を源流とし、瀬坐の下の机で釜無川に合流する。瀬沢大橋を渡ると直ぐに左(下流へ)曲りすぐ先を道なりに右折し人家の前のT字路を右折する。旧瀬沢村に入る。旧道は意外に急な上り道で左手にベンガ

ラ塗りの家、軒下に「めでどこ」が吊り下げられている家があり、坂を上ると左手に天保十三年(1840)建立の「諏訪神社常夜灯」があり、その後ろには男女双体道祖神が祀られている。

◇「奇石かぐら石」を見つけに行く、それを20号線の交差点で待つ旅人たち、中島さんと折本さんが見つけて帰ってくる。

諏訪神社の境内に「西照寺」

がある。この地域で天文十一年(1542)二月に行われた瀬沢合戦で多数の戦死者を出し、その戦死者の屍は九つの場所に穴を





〇〇新田ヲ経テ大門峠

正面には「富士〇〇〇〇」

左面には「横吹ヲ経テ西ノ〇ニ至ル（〇は字が不明）」

とち（草冠に子）之木ヲ経テ上諏訪町」とある。

『二つ目Y字路、左手の石垣の下』

「左すワ 右山浦」とあるようだ。

### ◎瀬沢の古戦場跡

三つ目のY字路を旧道は左にとるが、右に約百米進むと20号線に突き当たり地下道を潜って横断すると瀬沢の古戦場跡があり、碑と解説板がある。『甲陽軍鑑』には、天文十一年（1542）、小笠原長時・諏訪頼重・木曾義昌・村上義清の信濃四将と甲斐の武田晴信（信玄）との間で合戦があったと記されている。

掘り、埋めて塚を造り葬ったその一つの場所がここであったと伝えられる。境内、西照寺の後ろの少し高くなつた処には天文十三年（1545）建立の「笠塔婆」の石塔があり、三回忌と合致する。旧道は、この先三か所のY字路があり全て左に行く。一つ目と二つ目に道標がある。

### ◎瀬沢の道標

『一つ目のY字路、吉見屋の前』

右面には「乙

事 〇〇〇〇



二月に信濃四将は武田晴信を攻めようと合議し、甲信の境の瀬沢に陣を張った。この碑のある場所は「血河原」と呼ばれ、瀬沢合戦を血河原合戦ともいわれていた。

瀬沢合戦は武智川と立場川で挟まれた地域で行われた。諏訪頼重は釜無川、武智川の左岸のトヤケ峰に、小笠原長時は血河原に陣を張った。晴信（信玄）は躑躅が館で籠城するという噂を流し敵を油断させ、一気に敵陣を攻めて大勝した。信濃軍は休息してから甲府を攻めようと一息ついていたところを攻められ、千六百二十一人も打ち取られたとのこと。負けた諏訪頼重は入笠山（標高千九百五十五米）付近を通って逃げたとのこと。三つ目のY字路を左に上り進む。小川を渡り、T字路を右折し勾配がきつくなった坂を上る。左手に馬頭観音や甲子塔、また次左手の石垣の上に享和二年（1802）建立の観世音菩薩がある。



道は大きく左にカーブし上り坂は続く。正面の高台にあるのが知的障害者入居施設しらかば園です。やや平坦になり旧とちの木村に入る。まだ上り坂は続きますが旧とちの木村の外れに尾片瀬神社がある。

#### ◎尾片瀬神社

祭神は「瀬織津姫せおりつひめ」で、災厄抜除の女神。境内には多数の石仏石塔が集められている。街道沿いには、道祖神や男女双体道祖神が、その先には馬頭観音群がある。振り返ると富士山が見える。道はまだ上り続けますが美しい赤松の並木が現れる。と



ちの木風除林です。

◇本日の昼食場に尾片瀬神社を選びました。



尾片瀬神社で八ヶ岳を背景にして第十九回参加者記念撮影  
 立ち人（八木、中田、前北）  
 座り人（相原、中島、宇山、竹島、折本、三浦、嶋崎、伊藤）



◎とち（+冠に子）の木風除林  
 説明板には  
 「富士見町指定天然記念物 とちの木風除林  
 とちの木には、古くは樋口姓の者が住んでいた。しかし村は風  
 当たりが強く、五穀は実らず、全戸が今の若宮地籍へ移り住み、  
 無人家の地となった。元和六年（1620）、樋口氏が木之間から今  
 の塚平の地へ移住した。こは周りが草原だったので、神戸か  
 ら来た人達や甲州道中の通行人が時々失火して、火災にあった。  
 それで、やや南の方の今の地へ移った。このころ片瀬から小林  
 氏が来て住むようになった。やはり北風は強く、内風除けを作っ  
 たが、なお稲はよく実らなかった。寛政年間（1789～1800）に  
 村では高島藩へ願い出て、防風林として外風除けを村の上に仕  
 立てた。そのアカマツが、樹齢およそ二百年の立派な風除けと

して今日に至っている。この風除けは甲州街道に直交し、かつ東西に百米ずれるように設けられている。

東側は村の北西、ソリの道地籍の崖縁に沿う延長百六十米の間に植えられている。樹高二十米余り、胸高幹囲百四十〜二百四十糎のもの三五本を数える。西側は延長四十五〜五十米に上端の幅十米余、高さ二米余の土盛りをして植えられ、いま胸高幹囲百六十〜二百五十糎のもの一四本を数える。

風除けと呼ばれる林は藩の許可を得て設けられるもので、富士見町内では三十余りが数えられる。現存するものの中でこの風除林は、往時からの姿を伝える顕著なものである。

平成一五年 富士見町教育委員会  
とある。

とちの木風除林の二百米程先、右手に重修（塚平）の一里塚跡がある。

### ◎重修の一里塚

塚平の一里塚とも呼ばれていて、北側だけが残っている。江戸日本橋から四十七里目である。そばに道祖神があり、標高九百五十米の標識もある。瀬沢大橋から約百四十米も上って来たことになる。重修の一里塚の直ぐ先がT字路で、旧甲州街道は直進するのだが今は通行不能なので左折する。



T字路を右折して約一・四軒行くとJR中央本線富士見駅がある。T字路を左折、百米先一本目の舗装道を右折する。途中から砂利道になるが、ゆるやかに右カーブした先辺りが「パパが歩く甲州道中」に記されている。「甲州道中最高地点九百五十六米」だが、最高地点は笹子峠標高千九十六米。

すぐ先左折するところで、右から旧道が来る。旧道を少し戻り左折した先左にと「透関の馬頭観音像」がある。「透関（三井透関）」とは、乙事村、三井伊左衛門の長男・藤助のことで、甲府に出て託間屋たくまという商屋の養子となり、諏訪地方との交易も多かった。当時、この辺りはぬかるみになることが多いなど道路状況が悪く、人馬の通行に難渋したため、透関は藩から許可を受け、私財を投じて安永九年（1780）に改修・新道路建設に着手し、翌年竣工した。馬頭観音像はその改修の記念と人々の



道中の無事を祈念して建立されたという。

旧道との合流地点を左折すると原の茶屋村（旧向原村）に入り右側に富士見公園がある。「富士見」の地名は下諏訪方面から来た旅人が此の地に来て、初めて富士を見たことに由来する。

◎富士見公園

富士見公園は、伊藤左千夫が当地を訪れ、「ここは自然の大公園だ」と絶賛したところから、左千夫の監修で富士見公園が明治四十四年に出来上がったという。公園内には伊藤左千夫の歌碑「寂志左乃極尔堪弓 天地丹 寄寸留命乎 都久都久止思布（さびしさのきわみにたえてあめつちによするいのちをつくづくとおもふ）」のほか、島木赤彦、斉藤茂吉の歌碑、松尾芭蕉元禄七年（1694）の句「眼にかかる ときや殊更 五月不二」の句碑が

ある。芭蕉の句碑の後ろには庚申塔が並んでいる。

原の茶屋の交差点の先右手に原の茶屋公民館がある。敷地内に「明治天皇駐驛之所碑」があり、隣に「明治天皇御膳水跡碑」がある。明治天皇の巡幸は平岡村の野立所までは二頭立ての馬車であったが、瀬沢坂、とちの木坂が難路の為、四人担ぎの板輿いたこに乗り換え、原之茶屋村に到着した。

◎原の茶屋跡

公民館の先右手に文化八年（1882）建立の金毘羅神社常夜灯があり、その手前に「雀踊り」と呼ばれる棟飾りをあげた旧家（名取家）がある。これが原の茶屋跡で、のちの旅館桔梗屋の跡である。往時、とちの木と御射山神戸の約三軒の間は人家がなく不便であったので、明和九年（1772）に松目新田の名取与兵衛



が茶屋を出店した。これより原之茶屋村の集落が形成されたが、周囲の村と紛争が起きたので高島藩が四十間四方の築地を築かせ営ませたという。

旅館桔梗屋に富士見小学校初代校長を務めた小池晴豊が下宿したところ、短歌の友であった島木赤彦が訪れるようになり、これをきっかけに明治から大正にかけて伊藤左千夫、土屋文明、竹久夢二、斉藤茂吉、田山花袋等多くの歌人、文人が訪れ、桔梗屋はサロンのな役割を果たしたという。屋内には歌会が開かれた囲炉裏も残り、多くの書簡、掛け軸を残しているとのこと。桔梗屋の向かいに「如意輪観世音菩薩標石」があり、如意輪観世音菩薩は奥に安置されている。その先の右手に百番供養塔、庚申塔、道祖神と新しい男女双体道祖神等がある。

◎現存する江戸時代の甲州道中

石像群の先、道の左手に森があり、その森の中にわずかだが江戸時代の旧道の痕跡がある。

◇街道は、うちの庭からあの森に続いていたと説明される。

如意輪観音像の先の住宅の辺りから今の道を左にそれて、森



の手前の左へ行く道を横切って通っていた。右の高い擁壁の上にカゴメ富士見工場を見て直ぐ先左手に道標を兼ねた「奉納念仏供養塔」があり、「左甲州道」と刻まれている。街道は火の見ヤグラがあるY字路になり、左に行く。旧道を進むと左手に赤松があり、奥に金山大権現が祀られている（金山大権現の石碑は次回第20回の「権現の森」で説明する「信玄のつるし掘跡」、「金鶏金山」との関係が考えられる）。下り坂になり、左手に夥しい



「御射山祭」

御射山祭は上社・下社にそれぞれ行われる。

上社 御射山祭

御射山社とは、富士見町御射山神戸にあり、建御名方命と国常立命を祭神としている。

中世にはこの社のある一帯は神野と呼ばれる諏訪大社の社領で、御射山御狩の祭事が行われていた。

御射山祭では、諏訪大社の分社である穂屋（ススキで囲った仮屋）に諏訪大社の神主が一晩籠ることから、「穂屋祭」と呼ばれている。地元では御射山社一帯を原山と呼ぶことから「原山様」とも呼ばれることがある。（富士見町公式ホームページより）

祭は旧暦七月二十六日から三十日まで行われる。

御射山社境内にある『入会権部落十六区』が建てた記念碑には「南下原山整理記念碑 御射山の野は諏訪上社と由緒深き地なり。往時盛大に行われたる押立・御作田・秋尾と共に、年四度の御狩神事中最も重きをなしたる所。

七月廿六日より卅日に至る五日間の信濃国第一の大宮神事にして、嘉禎記に御射山社は建御名方命と国常立尊即ち大元尊虚空蔵を祀る祠と、三十間を距て四御庵・磯並・子安・神功皇后の四座あり。廿六日、大祝、五官、両奉行、大政所、行事、郡長吏等前宮を立ち、騎馬の行列「十三所神明帳」なる銅札を附

したる鉾牽馬五十余頭大神に供奉し、酒室神事を終り長峯にて狩り乍ら裾野を分け物見ヶ岡に至り大鳥居を経て原山に達す。此処に穂屋新たに建て並び其屋に入る。同夜神楽鉦鼓の音につれ巫女の託宣喧し。廿七日より廿九日に至る三日御手倉あり贄の鷹狩あり。廿九日矢抜の式ありて祭事を了す。上社より神霊を此地に移し狩の獲物を供し犬追物流鏑馬等の武戯を演じ皇室将軍武将等を招きたるものにて、会津松は会津侯の座席址なりと。・・・（後略）」とある。

また、酒室神社の説明板に御射山祭のついで次のように書かれている。

「酒室は御射山の入口に位置し、御射山は通称『はらやま』で、諏訪明神のみ狩神事の祭場である。年四度のみ狩が定められ、これを『みさやままつり』または『はらやまさま』と呼ぶ。

四度のみ狩とは、押立み狩・御作田み狩・穂屋のみ狩・秋尾のみ狩である。このうち最も盛大な神事が穂屋のまつりで、旧暦七月二十六日、現在は八月二十六日に行われている。武術を奨励した昔は、諸国から守護、持頭、代官職等が多数参加し、祭の催しには、的矢、流鏑馬、角力等が行われ、露店や芸人が集まり、そのため槍隊が出て警護にあたったと云われる。参詣人をかぞえる大草さずけの儀が行われ、神事が終わると一同勢揃いして弓振川で弓を清め、御射山にのぼりみ狩が行われた。」

## 下社 御射山祭

下社の御射山社は、元禄年間（1688～1704）に標高一千六百米の霧ヶ峰西南部、八島の高地から約四軒南の下社に近く、秋宮から直線距離で二・五軒のところに移され、上社と同様の御射山祭、御射山神事が行われる。

旧御射山社は、八島湿原の南端（ビーナスライン 観音橋・ヒュッテ御射山のそば）にあり、現在は「霧ヶ峯本御射山神社」として上桑原牧野組合が管理している。この旧御射山は標高一千六百米の亜高山帯の凹地で、土壇数十段が三方からこの凹地を囲んで今も御射山御狩神事の棧敷跡が残っている。長径三百五十米、短径二百五十米あり、東京オリンピックスタジアムより大きい。

この御射山で狩や騎射、相撲などが行われ大競技場の様相を呈していた。

御射山遺跡の説明板には

「長野県史跡 御射山遺跡 指定昭和三十七年七月十二日

ここは諏訪神社下社の御射山祭御狩神事が行われたところである。御射山祭はいつごろから始められたか不明であるが、平安時代から特に鎌倉時代を全盛として元禄年間まで行われてきた。祭事は毎年七月二十六日から二十九日まで行はれ、信濃の豪族が交替で御頭をつとめ、神官は新しく造られた祭事用の穂

屋にこもり豊作を祈った。

それと同時に信濃の氏人が騎射等の技を競って諏訪明神に奉納した。周辺の丘には鎌倉幕府の將軍や将歴の棧敷跡が今も土壇として残っている。当時の御射山祭をしのぶ和歌として次の一首がある。

をばなふくほやのめぐりの一むらに

しばし里あり秋のみさ山 金刺盛久

この祭も室町時代中期、下社大祝金刺氏の滅亡とともに衰微し、御射山も江戸初期に移転したため、この地は旧御射山と呼ばれるようになった。

昭和五十七年 三月 長野県教育委員会

諏訪市教育委員会」とある。



## ◎神戸八幡社

社殿（富士見町指定有形文化財）は宝暦十二年（1762）の建立で、棟梁は伊那郡沢底村（現辰野町）出身の加藤吉左衛門の手によるものとのこと。社殿脇のケヤキ（富士見町指定天然記念物）は樹高三十米で推定樹齢三百九十年とのこと。境内には、芭蕉句碑「雪ちるや 穂屋のすゝきの 苺のこし」がある。これは、元禄三年（1696）芭蕉四十八歳の句で、「初しぐれ 猿も



小蓑を ほしげ也」で始まる『猿蓑集 卷之一』に載っている「信濃路を過るに 雪ちるや 穂屋の薄の 刈残し」である。

〈私見〉

創作年の元禄三年に芭蕉は信濃路を旅していない。したがって詞書の「信濃路を過るに」は、享保二

年(1689)芭蕉42歳の4月10日名古屋から木曾路に入つて甲州路で4月末に江戸に帰着したときの記憶によるものと思われる。(甲州路の旅は江戸く谷村を除いてこのときしかない)季節は春で雪の季節ではない。したがつてこの句は芭蕉の心の風景としか言いようがない。



光寺の境内にある。)

★「穂屋」は、御射山祭で上社大祝おおほしり以下の神官の宿泊・参籠の場所として、ススキで屋根を葺いた仮屋。神戸八幡交差点からやく三百米左の上り坂の旧道を進む。

分岐には馬頭観音が祀られていて、その先には馬頭観音や道祖神が一ヶ所に集められている。さらに坂を上ると御射山神戸の一里塚がある。

◎御射山神戸一里塚

江戸より四十八番目の一里塚。東西両塚を残している。東(右)塚のエノキは明治半ばに枯れてしまったが、西(左)塚のケヤキは今も堂々たる風格を見せている。甲州街道で塚・ケヤキ共



に往時のものが保存されている例は他になく、貴重な存在である。旧道は下りになり、エプソンを過ぎ青柳集落に入る。

#### \*金鶏金山

青柳集落の途中に道祖神・庚申塔のある交差点があり、ここを左（西）に上り（この道はかつては金沢峠を越えて伊奈・高遠へ抜ける重要な街道）、左千軒平の標識がある分岐（標識はないが右は金沢峠）を左に進むと『信玄のつるし掘跡』の案内板



があり、少し上って行くと幾つかの「つるし掘（露天掘り）」がある。大小二百余りの採掘跡があるとのこと。露天掘りが深くなったときに、鉱石をつるし揚げたところから、つるし掘の名

があるとのこと。つるし掘の案内板を更に先に進むと高層湿原・千間平に着く。この付近は、金の鉱脈が鶏の形で埋蔵されているという伝承がある金鉱である。永承（1538）のころ、信玄が甲州金二十四万両を掘ったと云われている。発掘は昭和まで続いたとのこと。

そして青柳の集落を過ぎると国道20号線に合流、田畑を下り線路に沿って五百米弱戻るとJR青柳駅に着く。

途中、線路際に穂屋之木大明神境内整備記念碑がある。

記念碑には「穂屋之木大明神（ほやのきさま）の祠は、諏訪大社摂社の一つの御射山社（原山社）の前宮にあたる社で、彌坂の登り口に鎮座している。脇を通る道はかつて甲州街道下筋方面同社への参詣道の一つとして、御射山祭（原山祭）が行



われる八月二十六日から二十八日の三日間は、ここを通る参詣者で賑った。

昭和初期青柳から新たに参詣道が開設され通る人も少なくなり、その上金沢区にとっては穂屋の木と称された文化財的な境内の大本が鉄道線の複線化工事にともなう伐られ、境内は往時の面影を失った。

それを憂いた敬神の念厚い小林平三氏は、境内の整備と鳥居と幼児の守り神である鬼子母神を寄進されこれを「記念し、…（後略）」とある。

◇穂屋の木大明神を最後に訪れ、青柳駅に到着し、本日の予定歩きを完了する。この青柳駅は無人駅で販売店もない。旅人は帰りの宴会用飲料の調達に焦る。疲れているが、近くの酒店ま



で足を延ばす。本日は生憎とお休み、なんで今日なんだよ！人に会うのも稀で、たまたま駐車場に止まっていた人に尋ねる。

「お店は隣町まで行かないとありません」とのことでした。本当に何もない駅なのだ。



◇乗客はわれわれ旅人のみで、堂々と着替える。小淵沢行き普通電車を待つ。

武田氏系図（山梨県社会教育施設情報化・活性化推進委員会／山梨県立図書館&ウィッキペディア）

